

## 第4章 強化方策の検討

### 1. 山村活性化の目標像

強化方策の具体的な検討を行うための前提として、本調査で考える山村活性化のあり方（目標像）について、整理を行う。

#### 1) 浜松市中山間地域振興計画における目標像

まず、関連する既往計画における山村活性化の目標像を確認する。

浜松市では、山村地域（本中山間地域計画では、対象地域が天竜区及び北区引佐町となっている）の持続的な成長発展につながる効果的な政策・施策を提案するための計画書として、浜松市中山間地域振興計画を、平成22年3月に策定した（詳細は、P29を参照のこと）。

この浜松市中山間地域振興計画では、以下の基本目標が定められている。

#### ◇浜松市中山間地域振興計画における基本目標

##### 「幸せを実感する山里暮らしの実現」

- ① 中山間地域の市民が「この地域に生まれ、育ち、住んでよかった」、「これからも住み続けたい」と実感できる地域を目指します。
- ② 都市部の市民が「行ってみたい」、「住んでみたい」と思える魅力的な地域を目指します。

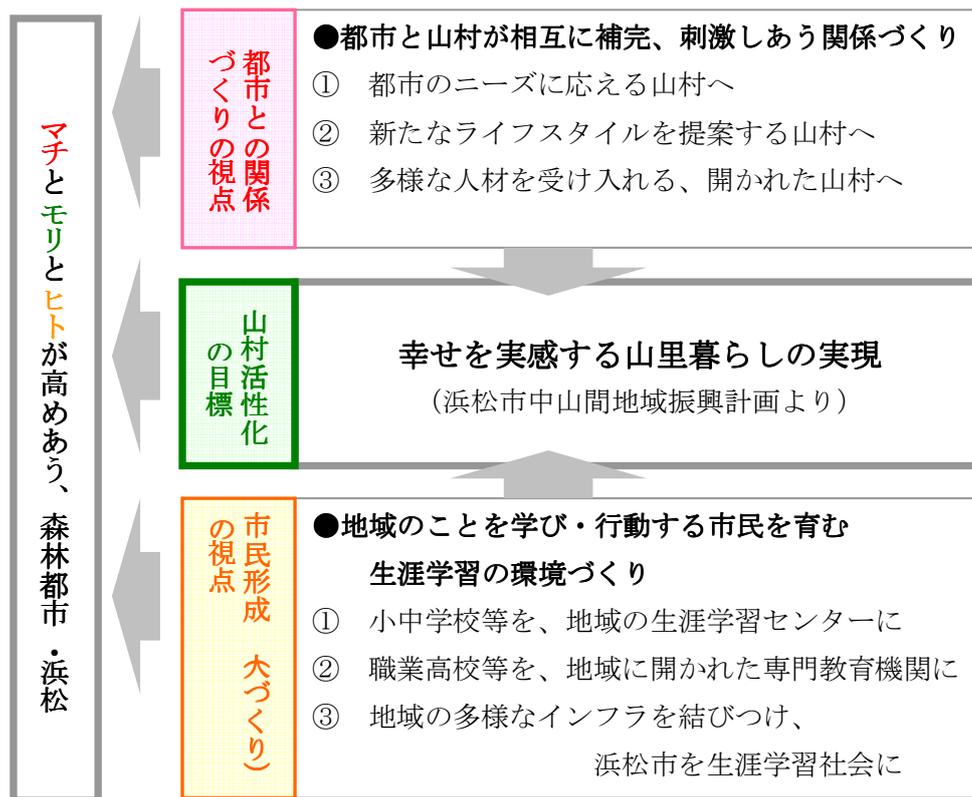
浜松市中山間地域振興計画は、計12回、参加住民225人に及ぶ「集落座談会」、計5回、参加住民61人に及ぶ「若者座談会」、対象者数650人（回答数は411人）に及ぶ「住民アンケート」により広く山村住民の意見を聴取し、それらを踏まえて策定されたものであり、この基本目標は、本調査での検討においても前提とすべきものであると考える。

ただし、本調査における委員会の議論の中で、上記の基本目標を補強するものとして、幾つかの補足的な視点が浮かび上がってきたため、それを以下に記すこととする。

ここで補足する二つの視点とは、図4-1-1に示すように、都市との関係づくりの視点、及び、市民形成（人づくり）の視点である。

一つ目の視点に関しては、平成17年の合併によって都市部と山村部が一体となった浜松市においては、山村部が都市のニーズに応えることはもとより、新たなライフスタイル、ワークスタイルを提案する発信基地となるべきである、製造業等の雇用が流動化している昨今においては、多様な人材の雇用の受け皿となるべきであると言った意見が多くあったことから、ここに位置づけたものである。

二つ目の視点に関しては、森林資源を有効に活用した地域づくりを進めていくためには、市民が地域のことや森林・林業のことに興味を持ち、また自ら行動を起こす姿勢を持たなければならない、人づくりが第一に重要であるといった意見が多くあったことから、ここに位置づけたものである。



図表 4-1-1 本調査の提案の前提とする山村活性化の目標像

## 2) 都市との関係づくりの視点：都市と山村が相互に補完、刺激しあう関係づくり

浜松市中山間地域振興計画の基本目標の補足的な視点として、都市と山村が相互補完、相互作用する関係の構築を挙げる。具体的には、以下の①～③に示すような、都市との関係から見た山村のあり方を目指すべきであると考えます。

### 都市と山村が相互補完、相互作用する関係づくり

- ① 都市のニーズに応える山村
- ② 新たなライフスタイルを提案する山村
- ③ 多様な人材を受け入れる、開かれた山村

#### ① 都市のニーズに応える山村へ

都市住民の住宅に対するニーズ、観光・レクリエーション等に対するニーズが日々変化する中で、能動的に消費者のニーズを把握することが益々重要になってきている。しかし、一方で、多くの林業者、製材所、観光団体等は、限られた人員・資金・設備で事業を運営している状況の中で、消費者のニーズを十分に把握、対応できているとは言いがたい状況にある。

こういった状況を踏まえ、地域の森林を守る林業者や、地域材の流通に取り組むこれらの主体が消費者ニーズにあった商品開発・事業展開・情報発信を行うことを、地域として積極的にバックアップし、都市のニーズに応え得る山村を形成していくことを目指すべきである。

## ② 新たなライフスタイル・ワークスタイルを提案する山村へ

都市住民のニーズに合わせた商品・サービス等を提供していくことが必要である一方、都市住民の意識やライフスタイル、ワークスタイルが現状のまま将来的にも変わらないままであるならば、山村の自然・文化が有する多様な価値は十分に発揮され得ないという見方もできる。

今後は、現状のニーズに対応する一方で、将来のニーズを形成するためにも、都市住民の意識を積極的に変えていくことも重要になってくる。例えば、週末にマチとヤマを往来するようなライフスタイル、ITを活用しヤマで働くワークスタイル等の提案や、木材の新しい使い方の開発等をより一層進める必要がある。こういった新たなライフスタイル・ワークスタイルを提案できる山村を形成していくことを目指すべきである。

## ③ 多様な人材を受け入れる、開かれた山村へ

山村地域においては、過疎化、高齢化が依然として進行しつつあるが、森林の持続的な管理、山村の集落機能の維持・活性化を図るためには、現状の山村住民では担いきれないことが明白になっている。今後は、都市住民を中心とした UJI ターン者の山村への移住・定住を促進することが山村の集落機能や森林の多面的機能の維持のためには不可欠である。

一方、都市部では、平成 20 年以来の世界的な景気後退により、中核的産業である製造業等でも雇用情勢も極めて厳しくなっていることから第 1 次産業も雇用の場として期待が高まっている。実際に、林業に関する緊急雇用対策事業等では、応募が殺到する状況となっている。

こうした状況を踏まえて、林業への就業や山村への移住等を希望する多様な人材を受け入れ、彼らが地域に愛着と誇りをもって暮らし続けられるような、開かれた山村を形成していくことを目指すべきである。

## 3) 市民形成（人づくり）の視点：地域のことを学び・行動する市民を育む生涯学習

次に浜松市中山間地域振興計画の基本目標を補足する視点として、「地域のことを学び・行動する市民を育む生涯学習の環境づくり」を挙げる。

なお、ここで「生涯学習」を挙げたのは、浜松市中山間地域振興計画の基本目標「幸せを実感する山里暮らしの実現」に含まれる「幸せ」は、インフラが揃っていれば、収入が多ければ、誰しもが同じように「幸せ」を感じるわけではなく、積極的に自分や地域に対する学びを継続・発展させ自身の成長を促すことや、学びの成果を周りの人や社会全体に還元していくこと（こういった趣旨を生涯学習と言う）で初めて真に得られると考えるからである。

具体的には、以下の①～③に示すような環境づくりを目指すべきであると考える。

**地域のことを学び・行動する市民を育む生涯学習の環境づくり**

- ① 小中学校等を、地域の生涯学習センターに
- ② 職業高校を、地域に開かれた専門教育機関に
- ③ 地域の多様なインフラを結びつけ、浜松市を生涯学習社会に

**① 小中学校等を、地域の生涯学習センターに**

過疎化・少子化が続く天竜地域では、小中学校の児童・生徒数の減少が顕著であり、小中学校の廃校も相次いでいる。一方で、地域社会における教育や学習の基礎を担うべきは、地域の小中学校であるという状況は変わらない。また、地域の小中学校は空間的に広く便利なところにあり、地域のために多目的に利用しなければもったいない存在でもある。児童・生徒の学習の場所であると同時に、地域に開放していくことで、大人の社会教育等の拠点施設としても位置づけることができる。

以上を踏まえて、山村地域の小中学校は、地域の生涯学習センターとして、自然や農林業や歴史文化等について、子どもと大人たちが共に教育しあうオープンな空間を作り上げていくことを目指すべきである。なお、旧役場や公民館等の公共施設等も積極的に活用していくことが望まれる。

**② 職業高校等を、地域に開かれた専門教育機関に**

天竜地域には、県立天竜林業高校、県立農林大学校林業分校といった全国的にも恵まれた林業教育のインフラを有する。これらの学校は、かつて天竜林業の隆盛を担う人材を多数輩出してきたが、近年は林業や森林に対する関心・志望の高低ではなく、偏差値の高低を根拠に入学する傾向が強まっているという。こういった現状を反省し、もう一度職業高校、専門職業学校という本来の目的に立脚すべく、実学性を高め、天竜を中心とした地域の森林管理の担い手の技術・技能・知識・知恵を磨くための修練の場としていくことが望まれる。但し、そのためには、学校の出口（就職先）である林業や木材産業等をより魅力的な職場にしていく努力も不可欠であることは論を待たない。

また、地域にとって重要なものであり続けるためには、地域の小中学生や住民との交流を活発に行い、地域全体の森林・林業・木材・山村に関する専門教育機関となることを目指すべきである。

**③ 地域の多様なインフラを結びつけ、浜松市を生涯学習都市に**

①②で述べたように、地域のことや森林のことについて学ぶ場として小中学校や高校等の役割は依然として大きい。地域の公民館における講座や教室、地域のサークル活動、ボランテ

ィア活動、町内会等の地縁組織によるコミュニティ活動など、生活の中に学びの機会や場所はあふれている。

それらの学びの機会やその機会を提供する施設等を積極的にバックアップし、またマップやコースでつなげることや見える化していくことにより、浜松市における生活全体が学びの空間・時間になるような環境づくりを目指すべきである。

## 2. 山村活性化に向けた戦略

次に、上記のような目標像を達成するための戦略を考えた。

まず、検討のフレームを設定した上で、産業（主に生産力、雇用力に関連）と暮らし（主に地域力、教育力に関連）に分けて、どのように戦略的に取り組みを展開していくべきかを検討した。

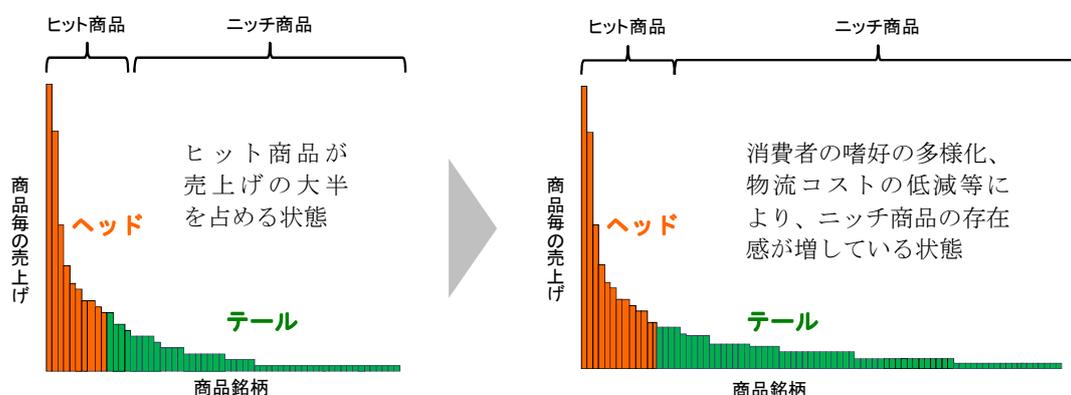
### 1) 検討フレーム～ロングテール～

ここでは、浜松市で既に始まっている多様なベクトルの動きを相互に関連付けて検討できる検討フレーム（枠組み）を模索した結果、「ロングテール」モデルを用いて説明することが好適なのではないかと考えた。まず、ロングテールについて簡単に説明する。

主に商業等のマーケティング分析の知見として、ある特定の分野における売り上げは上位20%の商品の売り上げが全体の80%を占めるという経験則が言われてきた。よって、従来型の小売店等では在庫の制限などでこの上位20%に当たる商品（ここでは、ヒット商品とする）を多く揃えなければならず、その他の商品（ニッチ商品）は軽視されることが多かった。

しかし、近年、消費者の嗜好の多様化や、IT技術による物流コスト、在庫コストの低減等が進み、今まで見過ごされてきたニッチの80%をビジネス上に組み込むことが可能になり、そこからの売り上げを集積することにより新たなビジネスモデルが生まれるようになってきた。そのような現象を説明する時に使われるのがロングテールというモデルである。

なお、このモデルはグラフで説明すると分かりやすい。図表4-2-1の通り、横軸を商品銘柄、縦軸を商品銘柄ごとの売上げとして、売上げの大きい順に並べると、あまり売れない商品が恐竜の尻尾(テール)のように長く伸びる。このグラフの形状から因んで「ロングテール」と言われているのである。



なお、このモデルは、ヒット商品が売上げの大半を占めるような状態（上左図）ではなく、

消費者の嗜好の多様化、物流コストの低減等により、ニッチ商品の存在感が増している状態（上右図）を説明する際に用いられることが多い。また、商品に限らず、消費者のニーズの裾野が広い業界、市場等の現状や動向を説明するときに使われるモデルである。

## 2) 産業のロングテール戦略

以上で説明したロングテールモデルを用いて、浜松市林業、木材産業が今後どうあるべきかと言った戦略の検討を試みる。

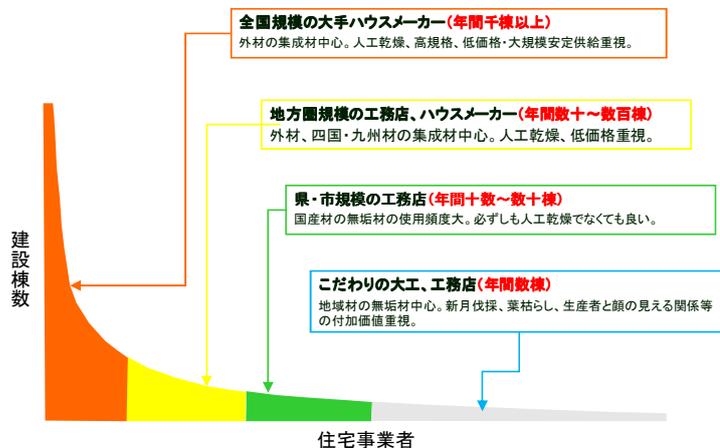
### (1) 住宅市場もロングテール

まず、浜松市の林業、木材産業の生産財である木材の消費先である住宅市場を、ロングテールモデルで説明できるのではないかと考えた。

浜松市は、平成 20 年の金融危機までは、製造業を中心とした産業が好況であったため、人口の移入と住宅建設が好調であったこともあり、全国規模の大手ハウスメーカー（積水ハウス、一条工務店等）から、地方圏規模の工務店・ハウスメーカー（遠州鉄道住宅事業本部等）、市域規模の小規模工務店等 50 社以上が事業展開する全国有数のハウスメーカーの激戦区である（木材流通業者ヒアリングより）。

なお、浜松市で事業展開するハウスメーカー・工務店等は、その建設棟数の規模から、4 つほどにパターン化できる。年間千棟以上を建設する全国規模の大手ハウスメーカー、年間数十～数百棟規模の地方圏規模の工務店・ハウスメーカー、年間十数～数十棟規模の県・市規模の工務店、最後に年間数棟を建設する大工等である。

少数の大手ハウスメーカー、中規模ハウスメーカーが大きなシェアを握っているものの、依然として地元密着型の中小工務店も多数残っているという状態であり、これらの事業者ごとの建設棟数を、大きいものから順に並べると、ロングテールの形状になると言える。



図表 4-2-2 ロングテールモデルに住宅市場を適用した例（イメージ）

なお、木材関係団体へのヒアリングによると、これらの4つのタイプの事業者は、取り扱う木材の種類等に、異なる傾向が見られる。

大手ハウスメーカーは、外材の集成材を主に用い、人工乾燥、高規格、低価格・大規模安定供給を重視する。中堅ハウスメーカーは、外材、四国・九州材の集成材が中心であり、人工乾燥、低価格を重視する傾向がある。小規模工務店等は、国産材の無垢材の使用頻度が大きい、必ずしも人工乾燥でなくても良いとする傾向がある。また、こだわりの大工、工務店は、地域材の無垢材が中心であり、新月伐採、葉枯らし、生産者と顔の見える関係等の付加価値を重視する傾向がある。

以上を先ほどのロングテールモデルに当てはめると、大手及び中堅ハウスメーカーが建設している住宅では地域材がほとんど使われていないこと、つまり「ヘッド」の部分がほぼ外材や九州・四国等の他地域材に占有されており、地域材は、テール部分で辛うじて使われていると説明できる。

## (2) 今後の戦略

以上のような状況を踏まえると、地域材利用をより活発にするためには、二つの方法があると言える。一つは、外材に占められているヘッド部（大手ハウスメーカー等の大規模な木材需要）を奪還すること。もう一つはテール部（地域密着型の中小工務店等の小規模の木材需要）への対応を強化していくことである。天竜地域として、どちらの路線を取ることが望ましいのだろうか。

ここで、参考事例として、典型的な衰退産業であった古本業界を概観してみる。古本業界は、10年前、古本屋は大型新書店の台頭等の波に飲み込まれ衰退の一路を辿っていた。まさに、今林業が置かれている状況に近いと言える。

しかし、その後の業界の取り組みを見てみると、まず、零細の古本屋が手持ちの在庫をすべてネット上に掲載し、Amazon.comなどのサービスを通して統合化を図った。また、ブックオフなどの大型古書店が、これまで古書店が無かった地域に積極出店し、新たな市場開拓した。このような動向を経て、現在、古本業は書籍販売業界で最も成長している分野となっている。なお、古本業界のロングテール戦略は、結果的に次のようなものであったと言える。

○ブックオフ等の大型古書店が、これまで古本屋が無かった地域に積極出店。ヒット漫画等を中心に販売。（雇用創出）

○零細古書店もアマゾン等のシステムの下で、在庫を統合、それぞれに個性を出していくことで存続。（雇用維持）

これによって、生産性の向上（生産力）と、雇用の維持・創出（雇用力）を実現したのである。

以上の古本業界の例を参考にし、浜松市の林業・木材産業のとるべき戦略について、一つの考察を試みる。まず、外材に占められているヘッド部（大手ハウスメーカー等の大規模な木材需要）を奪還することができれば、川上の森林組合、素材生産業者、川下の木材加工・流通業

者まで大きな雇用を生み出すことができると言える。

一方で、テール部（地域密着型の中小工務店等の小規模の木材需要）への対応を強化していくことは、新たに大きな雇用を生むことは期待しにくい。小規模であるが高付加価値型のサプライチェーンを構築してきた既存の製材所や素材生産業者等の雇用を守り、ひいては天竜林業の深みのある森林文化を守っていくことにもつながると言える。

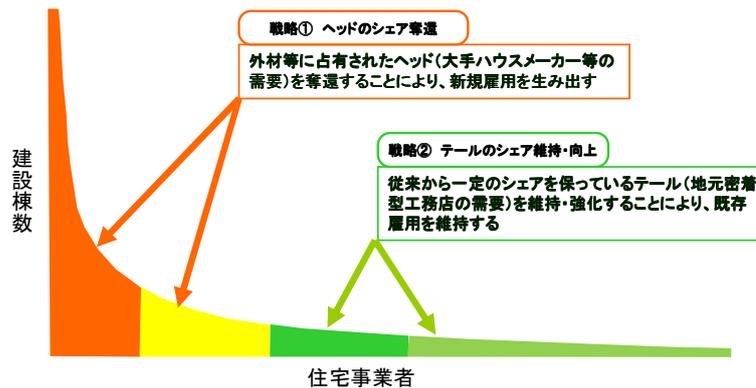
以上より、以下の二つの戦略を展開することが望ましいと考えられる。

戦略① ヘッド（大手ハウスメーカー等の大規模な木材需要）のシェア奪還

外材等に占有されたヘッド（大手ハウスメーカー等の大規模な木材需要）を奪還することにより、新規雇用を生み出す

戦略② テール（地域密着型の中小工務店等の小規模の木材需要）のシェア維持・向上

従来から一定のシェアを保っているテール（地域密着型の中小工務店等の小規模の木材需要）を維持・強化することにより、既存雇用を維持する



図表 4-2-3 木材産業のロングテール戦略（イメージ）

以下にそれぞれの戦略で推進すべき事項について述べる。なお、詳細については、次節「3. 山村活性化に必要な機能」に記載しているので参照のこと。

### ■「戦略① ヘッドのシェア奪還」で重点的に推進すべき事項

（事業の詳細内容は「3. 山村活性化に必要な機能」を参照のこと）

#### ●ハウスメーカーのニーズを踏まえたサプライチェーン・マネジメント

市内の木材のサプライチェーンを見ると、原木流通の段階では市内材が95%以上のシェアを占めるが、製品流通段階では外材、他地域材がシェアを伸ばし、市内材は28%までシェアが落ち込んでいる。（P51、図表 3-3-24 参照）

地域材の地産地消は、地域の木材を利用したいといった需要（地産地消）に応えられる一

部の地域ビルダー、大工・工務店や建築士によって支えられているものの、大ロットかつ一定品質の製材品の安定供給を求めるハウスメーカーのニーズに応えうる地域材のサプライチェーンがないことが原因となっている。

今後は、市内の工務店などを対象とした地産地消を着実に推進するとともに、パワービルダーや地域ビルダーを意識した新たな需要の創出が必要である。なお、現在天竜材を採用していない大手ハウスメーカー、工務店へのヒアリングにより、天竜材取扱いの条件としては、図表 4-2-4 に示すような視点が挙げられている。このような品質面、供給面、価格面等の条件をクリアしたサプライチェーンを構築する必要がある。

大手ハウスメーカー等をターゲットとしたサプライチェーンの構築に向けた動きが 2 団体を中心に始まっている。一方は、木材生産から住宅建築までを視野に入れた「産直住宅拠点」に関する構想（集成材工場）であり、もう一方は、現在ある地元材製材工場の規模拡大を視点とした構想である。こうした動きを、地域として後押ししていくことが望まれる。

図表 4-2-4 現在天竜材を採用していない大手ハウスメーカー・工務店の意見・意向  
（天竜材取扱いの条件）＜再掲＞

	製品面／品質面	供給面
大手ハウスメーカー	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 安定した乾燥率</li> <li>● 柱材では JAS の 2 等級程度</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 柱材として毎月 500～1,000 本の安定供給</li> </ul>
中小工務店	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 強度が弱い印象を払拭すること</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 数量を増やすこと</li> <li>● 木材業者が勧めること</li> </ul>
	価格面	その他
大手ハウスメーカー	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 大量購入時に安くなること</li> <li>● 輸入材並みであること</li> </ul>	—
中小工務店	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 外材と比較してコスト的な差がないこと</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 自治体含めた地域協力体制を作ること</li> <li>● 天竜スギの紹介および P R</li> <li>● 強度データの提供</li> </ul>

資料：「浜松版木材生産システム 今後の事業計画」報告書（天竜林材業振興協議会）

### ●森林組合間、組合－業者間の連携強化

近年、林業採算性の低下、林業経営意欲の減退等による林業の停滞の中で、森林組合（市内 6 森林組合）は林業・木材産業、山村地域の活性化等のため、広域合併の推進により森林組合の組織・経営基盤を強化することが重要な課題である。

現在組合間の協議会で是非が検討されているところではあるが、トップダウンでの決定だけではなく、現場レベルからも組合間連携の実績をボトムアップで積み上げていくことが、現場との乖離がない、真に必要とされている連携のあり方、合併の是非が見えてくるものと思われる。

また、森林組合間のみならず、森林組合と民間素材生産業者間でも連携を強めていくことで、地域として生産性の向上を図る上で不可欠な要素である。

## ●社会人等を対象とした新たな人材育成システムの整備

本調査のヒアリングで、林業への新規参入者に対する基本的な林業の技術・知識を与える教育システムの必要性が多く組合等から聞かれたが、今後製造業や建設業等多様な経験を有する人材の参入が期待されている状況も踏まえ、社会人等を対象とした新たな人材育成システムの整備の重要度が高いと考えられる。

なお、ここで育てる林業の人材は、従来型の林業者ではなく、高性能林業機械のオペレーションや作業道の開設等、成熟期に達した森林の整備・利用に対応し得るスキルと、持続可能な森林経営に関するビジョンを有する新たな林業者である。

将来的には「学校」という形で定常的な機関を設置することが望まれるが、初期は、数週間程度の研修形式での実施が適当と考えられる。浜松市森林課、天竜林業高校、農林大学校林業分校、市内森林組合等が、講師や施設、費用等を分担することが望まれる。

## ■「戦略② テールのシェア維持・向上」で重点的に推進すべき事項

(事業の詳細内容は「3. 山村活性化に必要な機能」を参照のこと)

### ●事業者協働によるマーケティング

消費者の住宅に対するニーズや価値観が日々変化する中で、能動的に消費者のニーズを把握することが益々重要になってきている。しかし、一方で、多くの小規模の林業者、製材所、観光団体等にとって、限られた人員・資金で事業を運営している状況の中で、独自にマーケティング調査を行うことは、難しいと言える。

こういった状況を踏まえ、地域の森林を守る林業者や、地域材の流通に取り組むこれらの主体が消費者ニーズにあった商品開発・事業展開・情報発信を行うことを、地域として支援することが望ましいと考えられる。

具体的には、行政も経費の補助により、小規模事業者等が協働で定期的に都市部住民に対するマーケティング調査（郵送アンケート調査、グループインタビュー等）を実施、その結果に基づく、森林・山村資源の商品化の方向性検討、協同事業の可能性検討等を行うことや、住宅メーカーを交えた意見交換会の開催などが考えられる。

### ●FSC 森林認証と関連づけた商品・サービスの開発・発信

本調査で都市住民に対して行った WEB アンケート調査では、約 40%の回答者が近隣や地元材を使いたいという意識を持っていること、環境性能や産地証明の明確化等に対するニーズが大きいことが把握された。

こうした消費者ニーズに応えるため、FSC 森林認証（FM 認証）を取得した森林の木材を使った商品・サービスの開発を進め、地域材利用の付加価値化、環境ブランド創出を図る。

林業者・木材業者・建設業者・デザイン関係者・NPO・行政等多様な主体によりコンテスト実行委員会を構成し、浜松市「FSC 森林認証」エコデザインコンテストを開催する。

浜松市の FSC 材を使った商品・サービスのプラン・デザインを、広く市内外から募集し、優秀な商品・サービスのプラン・デザインを審査委員会で選定・表彰する。

なお、優秀プラン・デザインは、広く市民に PR する他、商品化を目指す。

### ●天竜材、天竜材の家に関する普及啓発キャンペーン

浜松市は、外材を含む他産地材と市内産材との価格差に対し市が一定の助成を行い、地域材の需要を喚起する取り組み（天竜材の家 百年住居る事業）を行ってきた。これらの住宅は都市部にも多く立地し、都市住民が天竜材を見て・触れ・体験する絶好の素材であると言える。

この事業によって建設された住宅を活用した普及啓発キャンペーンを展開し、市民が天竜材や、天竜材を使った家を見て・触れ・体験する機会を提供することによって、天竜材の利用促進を図ることが効果的であると考えられる。

### 3) 暮らしのロングテール戦略

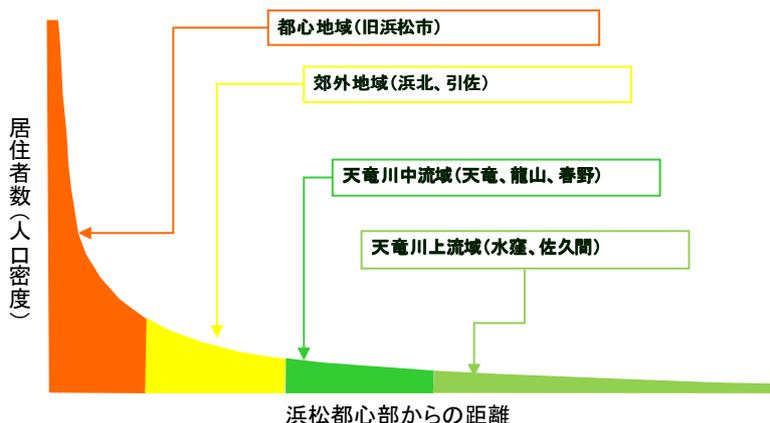
続いて、ロングテールモデルを用いて、浜松市の居住地や都市と山村の交流と言った暮らしに関する事項が今後どうあるべきかと言った戦略の検討を試みる。

#### (1) 人口分布もロングテール

先に、浜松市の林業、木材産業の生産財である木材の消費先である住宅市場を、ロングテールモデルで説明したが、暮らしに関してもロングテールのモデルを適用し得る。

以下は、浜松市の都心地域からの距離（横軸）と人口密度（縦軸）の関係を示したものである。旧浜松市からなる都心地域や、旧浜北市、引佐町等の郊外地域に約95%の人口が524.2人/km<sup>2</sup>という高い密度で集中している一方、天竜地域では、旧天竜市等の天竜川中流部から、都心部からの車のアクセスに2時間程度もかかる旧水窪町といった上流部まで、広大な面積に、約5%の人口が38.7人/km<sup>2</sup>という低い密度で居住しており、都心部からの距離を横軸に、人口密度を縦軸にしたグラフで表すと、まさに、ロングテールの形状で表わされる。

最近の9年間において、市全体では、引き続いて人口は毎年増加しているのに対し、天竜地域では、全ての地区で人口が毎年減少している状況にあるが、林業・木材関係の雇用に関しては、中流部（旧天竜市、旧龍山村、旧春野町）と上流部（旧水窪町、旧佐久間町）で大きな違いがあることが森林組合等ヒアリングから把握された。中流部（旧天竜市、旧龍山村、旧春野町）では、都市部からの通勤が比較的容易なこともあり、採用募集した際には都市住民の応募が殺到するなど買い手市場にあるが、上流部（旧水窪町、旧佐久間町）では通勤が難しい上に、子育てや医療等の定住条件が十分でないために、基本的にIターンの受け入れは難しい環境にある。



図表 4-2-5 人口分布をロングテールに適用した例（イメージ）

図表 4-2-6 天竜地域と浜松市全域の面積、人口等の比較

	天竜地域	浜松市全域	天竜地域が市全域に占める割合
面積	102,281ha	151,117ha	67.68%
人口	39,565人	792,104人	4.99%
高齢者人口	14,300人	174,794人	8.18%
高齢化率	36.14%	22.07%	
人口密度	38.68人/km <sup>2</sup>	524.17人/km <sup>2</sup>	

資料：浜松市中山間地域振興計画

## (2) 今後の戦略

今後、山村活性化を図るためには、UJI ターン者等を受け入れていくことは必要であることは確かであるが、段階的な働きかけが重要になってくると考えられる。特に上流部は受け入れのためのインフラや都市部へのアクセス条件が十分でないため、積極的に UJI ターン者の導入を進めることは現実的ではない。

浜松市の人口の地理的分布をロングテールととらえ、ヘッド（都心地域や郊外地域）からボディ（天竜川中流域）、ボディからテール（天竜川上流域）へのゆるやかな移行を促すことが望ましいと考えられる。

以上を踏まえ、以下の三つの戦略を展開することが望ましいと考えられる。

### 戦略① 森林を感じる都市生活の提案

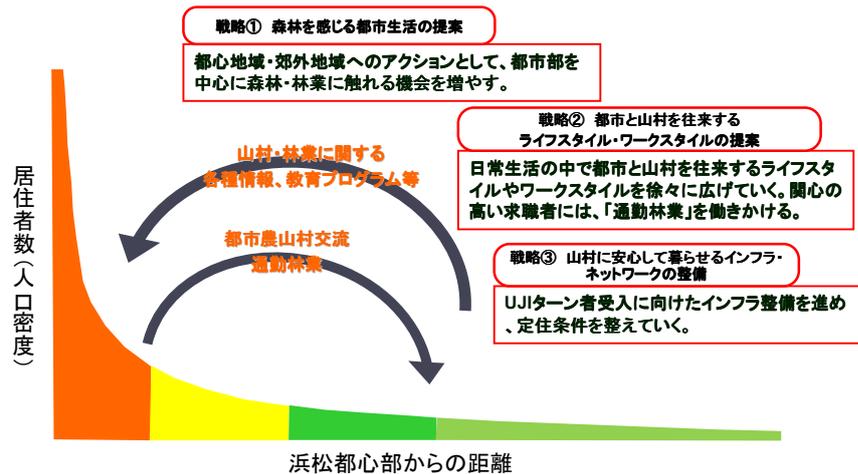
都心地域・郊外地域へのアクションとして、都市部を中心に森林・林業に触れる機会を増やす。

### 戦略② 都市と山村を往来するライフスタイル・ワークスタイルの提案

日常生活の中で都市と山村を往来するライフスタイルやワークスタイルを徐々に広げていく。関心の高い求職者には、「通勤林業」を働きかける。

### 戦略③ 山村に安心して暮らせるインフラ・ネットワークの整備

UJI ターン者受入に向けたインフラ整備を進め、定住条件を整えていく。



図表 4-2-7 暮らしのロングテール戦略（イメージ）

以下にそれぞれの戦略について推進すべき機能について述べる。なお、詳細については、次節「3. 山村活性化に必要な機能」に記載しているので参照のこと。

### ■「戦略① 森林を感じる都市生活の提案」で重点的に推進すべき事項

（事業の詳細内容は「3. 山村活性化に必要な機能」を参照のこと）

#### ●小中学校等での森林環境教育の展開

浜松市が将来にわたって、森林の多面的機能を維持し、森林と共生した社会を構築するためには、未来を担う子どもたちを対象とした、森林や木材とのふれあいをとおした環境教育の展開が求められる。

浜松市内の小中学校では4年生の社会科で、副読本「のびゆく浜松」で金原明善の業績を紹介したり、総合的な学習の時間に、県が作成した環境学習の手引書「天竜美林の教え」を配布するなどの取り組みがなされてきたが、体験的な活動については、十分になされていない。

今後、林業者による出前講座や、児童が自然豊かな山村部を訪問することによる、山村の人々との交流や山村での生活体験や自然体験等の機会を増やすことで、児童にとって、もの見方や考え方、感じ方を深め、学ぶ意欲や自立心、思いやりの心、規範意識などを育むといった力強い成長を促す効果があると期待される。

具体的には、林業者等による出前講座や、児童が自然豊かな山村部を訪問することによる、山村の人々との交流や山村での生活体験や自然体験等の機会を創出する。

## ■「戦略② 都市と山村を往来するライフスタイル・ワークスタイルの提案」で重点的に推進すべき事項

(事業の詳細内容は「3. 山村活性化に必要な機能」を参照のこと)

### ●都市及び山村における交流拠点整備、交流プログラムの構築

観光、余暇、体験教育等により、山村と都市の間に人の往来、交流を生み出すことを目指すものである。

なお、交流を生み出す資源・テーマとしては、従来の寺社等文化財や景勝地を目的地とする観光や、アウトドアスポーツ、レクリエーション等に加え、林業・木材産業等の産業観光、山村の暮らしを体験するグリーンツーリズム・エコツーリズム、企業のCSR活動等新たな観光資源・テーマを発掘・創出していく必要がある。

また、交流を生み出す主体としては、文化財や景勝地に関する観光事業は従来の観光業者が、自然体験、都市山村交流は環境NPO団体等が、産業観光は都市部企業がという形で、ばらばらに企画・情報発信されてきた傾向があるが、今後は、都市と山村の交流の裾野を広げるためにも、一体的に取り組み、大きなムーブメントとすることが望まれる。

### ●浜松型「市内二地域居住スタイル」の推進

天竜地区は遠州鉄道で旧浜松まで30分、車でも1時間程度で到着できる比較的都市に近い立地にある。これに加え、天竜区各地区へのアクセス道路の整備が進んだため、現在では以前に比べ格段に短時間でマチに出ることができるようになった。

交通インフラの充実を活かし、浜北や旧浜松(マチ)に住まいながら中山間地区(ムラ)へ通勤する、逆にムラに住まいながらマチに通勤するという、ライフステージ(家族の変化)に応じた居住地のフレキシブルな選択を可能とする二地域居住(往来生活)スタイルの成立に向けて、可能性の検証と、実現に必要な支援策、それによる中山間地の活性化効果などを検証・検討する。

## ■「戦略③ 山村に安心して暮らせるインフラ・ネットワークの整備」で重点的に推進すべき事項

(事業の詳細内容は「3. 山村活性化に必要な機能」を参照のこと)

### ●自治的機能と広域ネットワークによる支援

合併後数年が経過する現時点においても、旧市町村単位で行われていた行政サービスの継続や、地域密着型生活支援を実施しているNPOの有無などにより、生活支援機能の充実度合いは、地区ごとにまちまちなままである。一方、当該地域の少子高齢化傾向は今後も進み、システムや支援内容の効率化を行わなければ、サービス全体の低下・停滞を招く恐れがある。

以上を踏まえ、中山間地域全体で統一されていない生活支援サービスや各種コミュニティビジネスなどの実施状況を一元的に整理し、既存のサービスは継続し、地区により不足している支援サービスを、主に中核となる病院・福祉施設(天竜、佐久間、引佐、浜北等)や商業施設(天竜、浜北等)などを拠点として、実施する広域ネットワークによる生活支援システム(訪問医療、サテライト診療、在宅診療、宅配買物サービス、移動店舗等)の検討を行

う。

《補足》山村での生活を成立させるための「7つの通」

山村での生活を成立させるためには、「7つの通」に関する条件を整えることが必要であると言われている。通学（教育）、通勤（雇用）、通院（医療）、通商（買い物）、通信（情報）、通行（交通）、通貨（資金）の7つである。上記の「生活支援機能」においては、これらの条件を整備していくことが必要であると言える。（榛村委員より）

### ●UJI ターン者等の住居・職業の斡旋

本調査における森林組合等へのヒアリングで、林業・木材産業の求人情報や、山村の空き家情報等の情報が一元化されておらず、山村への移住を希望する都市住民の立場から非常に分かりにくい状況にあることが把握されている。

今後、都市から山村へという人の交流・定住の流れを創出するためには、職業や、住居、さらには子女の教育環境等に関してワンストップで情報・アドバイスを提供できる総合的な支援機能が必要となってくる。市内で林業・木材産業に就業したい、あるいは山村に移住したいと思ったときに、気軽に相談でき、確実に情報が得られる拠点・窓口である。

また、交流から定住への発展を後押しすることも想定すると、観光情報、環境教育イベント情報等の提供や、企業のCSR活動のフィールド斡旋等も一体的に提供できる体制を構築することが、望ましい。

### ●地域再生に資する人材育成システムの構築

従来の一次産業としての林業技術・専門知識に重点を置いた人材育成だけでなく、環境問題、生物多様性など森林の多機能性に精通した総合的知識と技能を持った人材育成を行うことにより、地区の森林の将来ビジョン実現に必要な、多様な人材の育成システムを構築する。

また、林業だけでは生活が成り立たなくなった現在、地区の現状や特性に応じて、荒廃しつつある森林に手を入れつつ一定の利活用を進めていくために、林業以外の森林の多角的利活用を検討することが、地区のニーズとして増大していく。

これを受け、地区ごとの森林の将来ビジョンと、短期・中長期の施業計画を作成するとともに。その実現にふさわしい人材を、地域ぐるみで育成する仕組みを構築する。

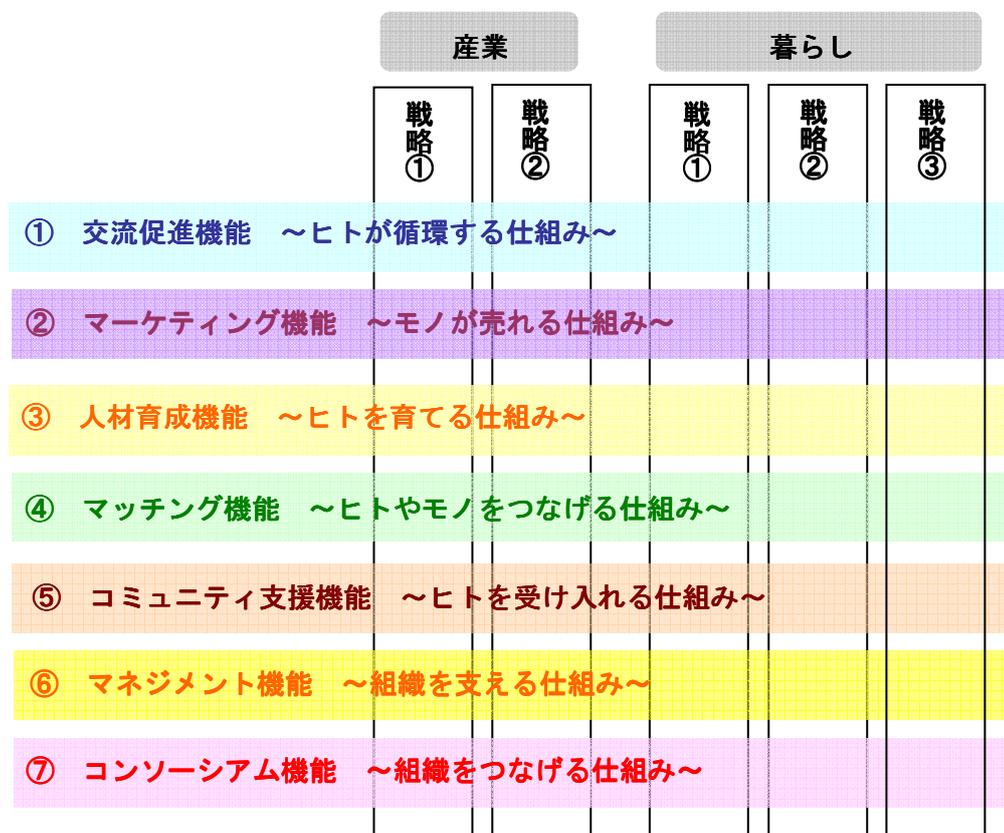
### 3. 山村活性化に必要な機能

#### 1) 山村活性化に必要な「7つの機能」

前節「2. 山村活性化に向けた戦略」で、5つの戦略を挙げたが、意図としては、この戦略の中から幾つかを選んで限定的に展開するものではなく、地域の多様な主体が協働することにより相互連携させながら一体的に展開することが望ましいと考える。

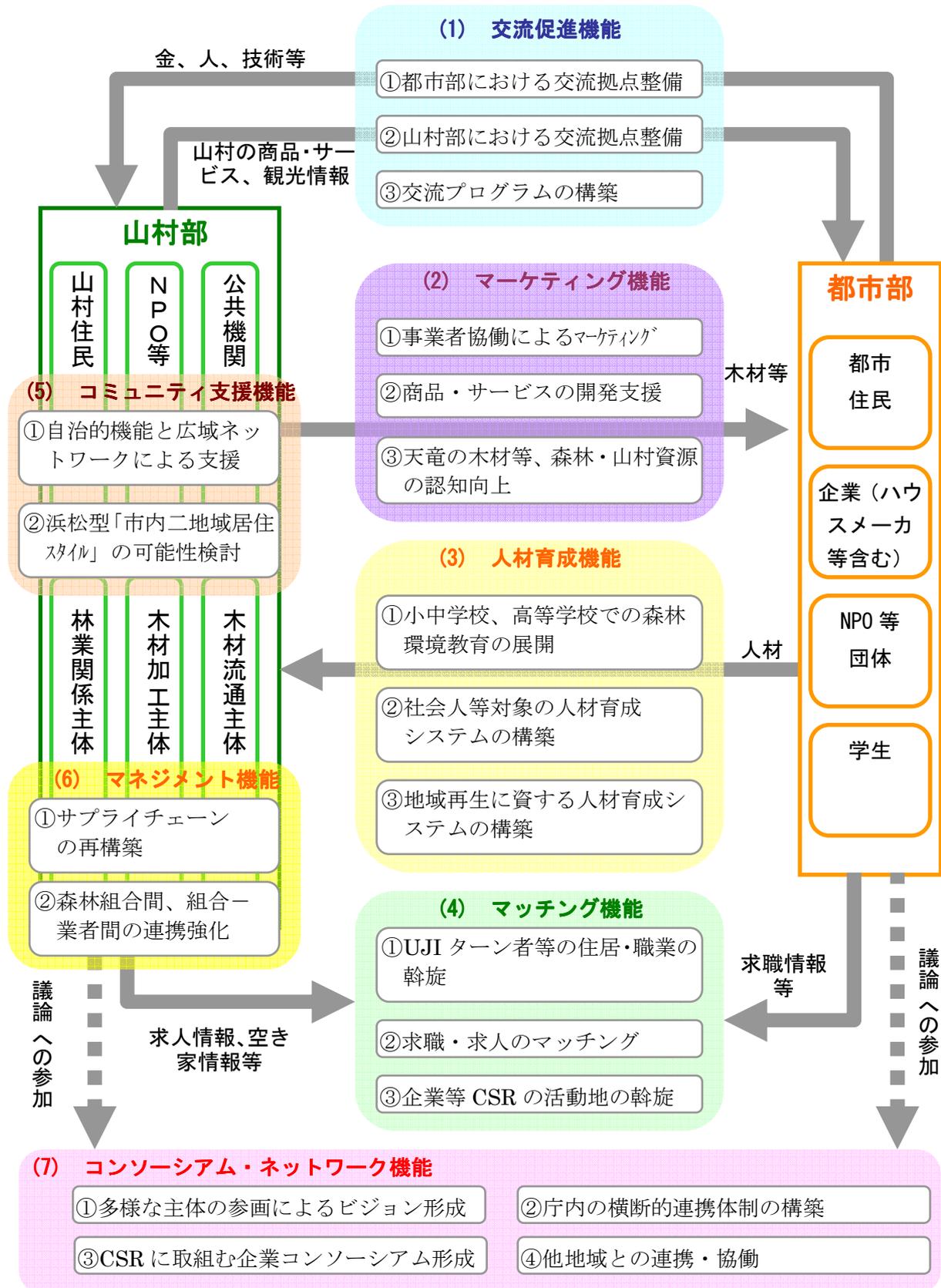
なお、戦略毎に挙げた「重点的に推進すべき事項」も、複数の戦略に跨る事項を一体的に実施できるものも少なくないと言える。そこで、同様の機能を持った事項ごとにまとめ、(1)交流促進機能、(2)マーケティング機能、(3)人材育成機能、(4)マッチング機能、(5)コミュニティ支援機能、(6)マネジメント機能の6つの機能に分類した。また、これらの機能をうまく調整する機能を、(7)コンソーシアム・ネットワーク機能とした。今後、浜松市の都市山村間にヒト・モノ・カネの循環を生み出し、浜松市の山村活性化に資するものとして、この7つの機能を、市内に整備・強化することを提案する。

なお、ここで「機能」という用語を使った理由としては、必ずしも「新しい施設」の整備や「新しい組織」の設立、「新しい事業」の創設を伴わなくとも、既存の施設や組織を活用したり、相互に連携させたり、既存の事業の方向性を修正することでも、山村活性化と言った目標に寄与し得ると考え、あくまでも「施設」「組織」「事業」は、「機能」を発揮させるための手段でしかないというスタンスを明確化するためである。



図表 4-3-1 「4つの力」と「7つの機能」の関係

各機能が都市と地域の関係性においてどのような位置づけにあるのかを、下図に示した。



図表 4-3-2 「7つの機能」(概念図)

なお、それぞれの機能について、以下に基本的な考え方を述べる。

## ① 交流促進機能

この機能は、観光、余暇、体験教育等により、山村と都市の間に人の往来、交流を生み出すことを目指すものである。

なお、交流を生み出す資源・テーマとしては、従来の寺社等文化財や景勝地を目的地とする観光や、アウトドアスポーツ、レクリエーション等に加え、林業・木材産業等の産業観光、山村の暮らしを体験するグリーンツーリズム・エコツーリズム、企業の CSR 活動等新たな観光資源・テーマを発掘・創出していく必要がある。

また、交流を生み出す主体としては、文化財や景勝地に関する観光事業は従来の観光業者が、自然体験、都市山村交流は環境 NPO 団体等が、産業観光は都市部企業がという形で、ばらばらに企画・情報発信されてきた傾向があるが、今後は、都市と山村の交流の裾野を広げるためにも、一体的に取り組み、大きなムーブメントとすることが望まれる。

なお、本機能が4つの力の強化に与え得る効果としては、以下が考えられる。

<本機能が4つの力の強化に与える効果>

雇用力	観光・交流機会を提供する事業者における雇用の創出
生産力	都市住民（消費者）の林業・木材に対する親しみ、認知度の向上
地域力	交流から定住への発展、コミュニティ支援の担い手の出現
教育力	地域の自然や文化に対する学びの機会の提供

## ② マーケティング機能

消費者の住宅に対するニーズ、観光・レクリエーション等に対するニーズが日々変化する中で、能動的に消費者のニーズを把握することが益々重要になってきている。しかし、一方で、多くの小規模の林業者、製材所、観光団体等にとって、限られた人員・資金で事業を運営している状況の中で、独自にマーケティング調査を行うことは、難しいと言える。

こういった状況を踏まえ、地域の森林を守る林業者や、地域材の流通に取り組むこれらの主体が消費者ニーズにあった商品開発・事業展開・情報発信を行うことを、地域として支援することが望ましいと考えられる。

なお、ここでマーケティングを行う対象は、木材製品とは限らない。例えば、森林セラピー、環境教育、エコツアー等の体験型のサービスも含むものとする。こういった森林資源、山村資源を活用した多様な商品・サービスについて、一体的にマーケティングを行うことで、新たな用途、展開が発掘されることが期待される。

なお、本機能が4つの力の強化に与え得る効果としては、以下が考えられる。

<本機能が4つの力の強化に与える効果>

雇用力	事業改善、事業創出による雇用の確保、創出
生産力	マーケティングによる事業の収益性の向上、新事業の創出
地域力	地域資源の分析等による、地域の魅力の再発見、開拓
教育力	環境教育、エコツアー等環境系サービスの創出

### ③ 人材育成機能

浜松市が将来にわたって、森林の多面的機能を維持し、森林と共生した社会を構築するためには、未来を担う子どもたちを対象とした、森林や木材とのふれあいをおとした環境教育の展開が求められる。これまでも社会科や総合学習等で副読本を使った森林教育などが行われていたが、より効果を高めるために、山村の人々との交流や山村での生活体験や自然体験等の機会を増やすことが望まれる。

また、本調査のヒアリングで、林業への新規参入者に対する基本的な林業の技術・知識を与える教育システムの必要性が多く組合等から聞かれたが、今後製造業や建設業等多様な経験を有する人材の参入が期待されている状況も踏まえ、社会人等を対象とした新たな人材育成システムの整備は重要度が高いと考えられる。

なお、ここで育てる林業の人材は、従来の「林業者」ではなく、高性能林業機械のオペレーションや作業道の開設等、成熟期に達した森林の整備・利用に対応し得るスキルと、持続可能な森林経営に関するビジョンを有する新たな林業者である。

また、林業技能者等育成に加え、森林セラピー、バイオマス利用、企業 CSR 等、森林の多面的機能を生かした事業を担う人材や、山村コミュニティの支援を行う人材等も積極的に行う必要がある。

なお、本機能が4つの力の強化に与え得る効果としては、以下が考えられる。

<本機能が4つの力の強化に与える効果>

雇用力	参入前に基本的知識・ノウハウを身に付けることで、雇用者側の負担を減らし、被雇用者の定着率を高める
生産力	高性能林業機械のオペレーション技術等を有する技術者の参入による生産性の向上
地域力	森林セラピー、バイオマス利用、企業 CSR 等、森林の多面的機能を生かした事業を担う人材の育成による地域の魅力発掘、山村コミュニティの支援を行う人材等の育成によるコミュニティ活動の維持
教育力	体験活動による、児童のものの見方や考え方、感じ方を深め、学ぶ意欲や自立心、思いやりの心、規範意識などを育む

#### ④ マッチング機能

本調査における森林組合等へのヒアリングで、林業・木材産業の求人情報や、山村の空き家情報等の情報が一元化されておらず、山村への移住を希望する都市住民の立場から非常に分かりにくい状況にあることが把握されている。

今後、都市から山村へという人の交流・定住の流れを創出するためには、職業や、住居、さらには子女の教育環境等に関してワンストップで情報・アドバイスを提供できる総合的な支援機能が必要となってくる。市内で林業・木材産業に就業したい、あるいは山村に移住したいと思ったときに、気軽に相談でき、確実に情報が得られる拠点・窓口である。

また、交流から定住への発展を後押しすることも想定すると、観光情報、環境教育イベント情報等の提供や、企業の CSR 活動のフィールド斡旋等も一体的に提供できる体制を構築することが、望ましい。

なお、本機能が4つの力の強化に与え得る効果としては、以下が考えられる。

<本機能が4つの力の強化に与える効果>

雇用力	ワンストップでの求人情報、住宅情報等の提供による参入・移住障壁の低減
生産力	新規参入者のニーズにあった就業環境の紹介による定着率の向上、生産性の向上
地域力	空き家情報の提供等による通勤圏外の山村地域への移住の促進(Iターン者の移住が都市からの通勤圏内に偏っている状況を踏まえ)
教育力	環境教育イベント情報等の提供や、企業の CSR 活動のフィールド斡旋等による都市住民への学びの機会の提供

#### ⑤ コミュニティ支援機能

天竜地域の中山間地の特徴として、集落が小規模に分散して立地していることがあげられる。そのため、基幹集落から離れた小規模集落ほど、十分な定住条件を整備することは今後ますます困難になってくることが予想される。

そのため、地区ごとの特性や課題を踏まえた定住条件を満たすための生活支援機能のあり方を、地区ごとに肌理細かく検討していくことが必要である。そのため、地区ごとに必要となる生活支援機能のリストアップを行い、基幹集落に整備するもの、天竜や浜北(旧浜松)に依存するもの、公共サービスや、NPOによる支援サービス等で補完するものなどを体系立てて整理し、支援策を組み合わせしていくプロセスを具体的なアクションプログラムとして明示していくことが効果的であると考えられる。

この際、かつてのように地区内で全ての機能をフル装備することは困難な社会・経済情勢となっていることを認識し、広域拠点整備による複数地区をカバーする支援サービス実現や出張サービス(医療、福祉、買物など)なども検討していくこととする。

また、道路インフラの充実と、都市から通うことができるメリットを活かした「浜松市型二地域居住(都市・中山間往来)スタイル」の可能性についても検討する。

<本機能が4つの力の強化に与える効果>

雇用力	定住条件が維持されることによる都市部からの参入者の増加
生産力	雇用・生活の安定による事業運営の安定化 地域経済の活性化による産業連関の拡大
地域力	生活支援機能の整備による定住者の増加
教育力	二地域居住スタイルの定着による、山村・森林に関する学び

## ⑥ マネジメント機能

本機能は、川上から川下までの垂直連携、森林組合・素材生産業者等の水平連携を図り、木材生産・加工・流通を効率化し、ハウスメーカー等の消費者にニーズにあったサプライチェーンを創出し、持続可能な形でマネジメントするものである。

市内材のサプライチェーンを概観すると、原木流通の段階では市内材が95%以上を占めるが、地域材の地産地消は、地域の木材を利用したいといった需要（地産地消）に応えられる一部の地域ビルダー、大工・工務店や建築士によって支えられているものの、大ロットかつ一定品質の製材品の安定供給を求めるハウスメーカーのニーズに応えうる地域材のサプライチェーンがない。今後は、市内の工務店などを対象とした地産地消を着実に推進するとともに、パワービルダーや地域ビルダーを意識した新たな地域材需要の創出が必要であると言える。

また、近年の材価の下落、所有者の森林管理意欲の減退等による林業の停滞の中で、森林組合（市内6森林組合）は、広域合併の推進等により森林組合の組織・経営基盤を強化することが重要な課題となっている。

なお、本機能が4つの力の強化に与え得る効果としては、以下が考えられる。

<本機能が4つの力の強化に与える効果>

雇用力	事業改善、事業創出による雇用の確保、創出
生産力	事業の収益性の向上、新事業の創出
地域力	地域の多様な主体の連携、産業連関による地域経済の改善
教育力	多様な主体が一体となって地域のあり方、事業戦略を検討することによる地域に対する学び

## ⑦ コンソーシアム・ネットワーク機能

森林は、木材生産以外にも、温暖化防止、土砂災害防止、水源涵養といった多様な公益的機能を持つが、都市住民と山村住民、林業関係者と非林業関係者など、居住地や職業によって、森林に期待するものは大きく異なる。

よって、地域の森林やそれを取り巻く林業・山村に関するビジョンは、立場の異なる多様な主体が議論に参加し、互いの認識のギャップを埋め、思いを共有する作業を行いながら、地域の中で広く支持されるビジョンを構築することが望まれる。

また、ビジョンが作られた後も、山村活性化に取り組む主体がコンソーシアム、ネットワー

クを形成し、相互に刺激しあい、協働するプラットフォームを構築し、ムーブメントを創出することが望まれる。

なお、本機能が4つの力の強化に与え得る効果としては、以下が考えられる。

<本機能が4つの力の強化に与える効果>

雇用力	多様な主体の連携によるビジョン形成による4つの力の強化方策の具体化・実践 コンソーシアム、ネットワーク内での相互の刺激、協働による4つの力の強化
生産力	
地域力	
教育力	

## 2) 「7つの機能」に関して他の林業地から学ぶべき点

次に、この7つの機能について、他の林業地域から学ぶべき点を抽出し、さらに、各点に関する浜松市の現状と課題、対応の優先度を整理した。対象とする地域は、本調査のうち全国調査分で、「雇用力・生産力・教育力・地域力を一体的に強化する方策の検討を進める上で参考となる取り組みを行っていると考えられる地域」として、現地訪問調査を行った以下の4地域である（各地域の調査の詳細な結果は、別冊「全国調査編」を参照のこと）。

優先度については、検討委員会等での議論も踏まえ、総合的に判断したものであるが、あくまでも本調査における提案であるので、今後浜松市の多様な主体の参加による議論の中で検討を進めていくことが望まれる。

なお、これらの学ぶべき点については、次節「3）機能ごとの具体的な事業（案）」の立案の際に参考とした。

図表 4-3-3 調査対象地域、調査スケジュール等

調査対象地域	立地する自治体	調査スケジュール	特徴
尾鷲林業地	三重県尾鷲市、紀北町	平成22年2月4日～5日	三大人工美林。中部地方の代表的な伝統的林業地。 かつての東京向け産地。FSC等先進的な取り組み。
日田林業地	大分県日田市	平成22年2月15日～17日	九州地方の代表的な伝統的林業地。 新生産システムの取り組み（原木市場の活用も）。SGECの取り組み。
智頭林業地	鳥取県智頭町	平成22年1月～2月	中国地方の代表的な伝統的林業地。 森林セラピー等、木材以外の森林利用の取り組み
下川林業地	北海道下川町	平成22年1月～2月	新興林業地。Iターンの受け入れの先進地域。

図表 4-3-4 「7つの機能」に関して他の林地から学ぶべき点等

凡例：○優先度大、△優先度中

機能	他地域から学ぶべき点	浜松市の現状と課題	優先度
①交流促進機能	<p>&lt;下川林地&gt;</p> <p>●移住・定住の促進を意図した林業体験、山村交流ツアーの開催</p> <p>・下川町は、林業体験ツアーを通じたIターンの働きかけを積極的に行っている。林業体験ツアーは、森林・林業をテーマにして都市住民と山村住民が交流を深めることなどを目的にして、林業や地域づくりへの支援者・協働者を養成すること、移住・定住の促進を図ることを意図しており、山村と都市をつなぐ取り組みである。なお、林業体験ツアーによって5世帯9名が下川町に移住するなど、大きな成果をあげている。</p>	<p>・各森林組合や、民間素材生産業者等が、積極的に交流ツアーを催行している。</p> <p>・例えば、素材生産業者「榊原商店」では、貯木場、製材、住宅を巡る「与作ツアー」を126回実施し、880人もの参加者があった。(2008年実績)</p> <p>・実際にツアー参加者が天竜材を使って家を建てることも多い。</p>	△
	<p>&lt;智頭林地&gt;</p> <p>●森林セラピー、森のようちえん等多角的な森林利用による幅広い市民の関心・参画喚起</p> <p>・智頭町は、「智頭林業・木材産業再生ビジョン」で多角的な森林利用を進めることを明確に打ち出している。そして、これらは、現在「森林セラピー事業」「森のようちえん事業」等として実現し、地域住民がもう一度森林に目を向けるきっかけを提供するにいたっている。</p> <p>・このように、森林を多様な形で利用していくことを明確に打ち出すことで、地域内外の幅広い主体の関心と参画を担保し、ひいては森林管理意欲の喚起にもつながっていくものと考えられる。</p>	<p>・交流プログラムは、文化財や景勝地に関する観光事業は従来の観光業者が、自然体験、都市山村交流は環境NPO団体等が、産業観光は都市部企業がという形で、ばらばらに企画・情報発信されており、<b>ワンストップの情報発信拠点</b>が必要。</p> <p>・アウトドアプログラム等は充実しているが、森林セラピー、森のようちえんと言った新しい都市ニーズに沿ったプログラムは少なく、<b>新たな交流プログラム開発</b>も必要。</p>	○
	<p>&lt;下川林地&gt;</p> <p>●農工商事業者、行政、市民等の多様な主体による商品開発、販路開拓</p> <p>・下川町では、商工業者、自営業者、農家、教師、森林管理署職員、主婦、労働者、農協、森林組合、商工会関係者、役場職員など多彩な階層によって構成される下川町産業クラスター研究会を立ち上げ、全町的な議論により、新たな産業を検討した。</p> <p>・この下川町産業クラスター研究会の具体的な成果としては、森林認証、トドマツの精油づくり、森林療法、環境教育事業等がある。なお、トドマツの製油づくりに関しては、都市部を中心にして、アロマセラピーなど販路を開拓しつつ、精油体験ツアーなどを企画して消費者との結びつきを深める様々な取り組みを行っていった。</p>	<p>・大規模な素材生産業者等は、積極的にマーケティング調査を行っているが、小規模の素材生産業者、製材所等にとって、限られた人員・資金で事業を運営している状況の中で、独自にマーケティングを行うことは難しく、消費者ニーズの把握、対応は十分に出来ていない状況。</p> <p>・下川の例のように、<b>共同でマーケティング調査や商品開発を行うプラットフォーム</b>は有効と考えられる。</p>	△
②マーケティング機能	<p>&lt;尾鷲林地&gt;</p> <p>●林業者・木材業者連携による地域材のPR、工務店・建築士等川下との連携による最終消費者とのつながりの強化</p> <p>・尾鷲市では有力な製材業者が、個別に東京の取引先と信頼関係を築き、ブランドを形成・継承してきたが、それを地域に広げるために、三重県、尾鷲市、紀北町、森林組合おわせ、尾鷲木材協同組合、海山木材協同組合、尾鷲ヒノキ内装加工協同組合等が「尾鷲林政推進協議会」を組織し、尾鷲ヒノキのPRのため、パンフレット制作等を行っている。</p> <p>・また、山林経営、製材・素材生産、家具・建具製造、建築士等が集まり、「東紀州・尾鷲ひのきの会」を設立し、産直住宅の販売推進、最終消費者向けの商品開発及びPRを行っている。</p>	<p>・「天竜材の家 百年住居る事業」を活用して建設した住宅は都市部にも多く立地し、都市住民が天竜材を見て・触れ・体験する絶好の素材であると言える。</p> <p>・平成22年3月、FSC森林認証(FM認証)を取得。今後は市内の製材所等のCOC認証の取得を促進することにより、市内の認証材を消費者に届けるためのサプライチェーン構築し、消費者の選択的購買を通じた持続可能な森林経営を進めていくことが課題となっている。</p> <p>・この「百年住居る事業」や「FSC認証」を素材とした都市住民向け普及啓発キャンペーンが望まれる。</p>	○
	<p>&lt;智頭林地&gt;</p> <p>●高校を地域住民等にも開き、地域の専門教育機関として位置づけ</p> <p>・智頭町の智頭農林高校は、智頭農林高校と智頭町の共催で「智頭林業まつり」、「智頭農林業いきいき交流まつり&amp;智頭農林高校農林祭」、森林セラピーの体験会や講演会等、地域住民を対象にした、普及啓発、交流イベントを開催している。智頭農林高校は、県立高校であることを超えて、地域の専門教育機関として存在価値を見出しつつある。</p>	<p>・天竜林業高校が、地域住民、都市住民等への森林教育の取り組みを積極的に展開。小学校対象の出前授業、空き店舗を借りた木工品の店の期間限定オープン等。</p> <p>・平成19年から若手林業者を中心としたグループTENKOMORIが、市内の小中学校等でチェーンソーデモなどを取り入れた体験型の講座を積極的に開催。</p>	△
③人材育成機能	<p>&lt;日田林地&gt;</p> <p>●都市の土木業経験者等、有技術者を積極的に採用</p> <p>・日田市では、「緑の雇用」制度等を利用して、10代・20代の若年層、他業種経験者等を大多数を採用する等の受け皿を確保してきた。なお、日田市森林組合の組合員の中では、高性能林業機械を扱うことが多くなり、土木業経験者などの30代の年齢層が増えてきている。</p>	<p>・現状、天竜林業高校、農林大学校等、学生対象の林業教育インフラは充実しているが、社会人が新たに林業・木材産業に就業する際の人材育成システムは十分とはいえない。</p> <p>・今後、林業・木材産業には、<b>製造業や建設業等多様な経験を有する人材の参入が期待</b>されており、これらの人材が体系的に地域森林管理の実務に関して学ぶことのできる仕組みを整備する必要がある。</p>	○

機能	他地域から学ぶべき点	浜松市の現状と課題	優先度
④マッチング機能	<p>&lt;下川林業地&gt;</p> <p>●Iターン者どうしのネットワーク形成による課題解決</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Iターン者を多く受け入れていた下川町でも、当初は離職者が後を絶たなかった時期があったという。理由としては、林業に対して抱いているイメージと実際の仕事や生活とのギャップの大きさ、「仲間」の不在といったことが大きな要因と考えられた。</li> <li>・こうした状況の中で先駆的なIターン者が、Iターン者が孤立するのではなく横につながることが必要と考え、「さーくる森人類」という組織を結成した。ここでIターン者どうしが交流を深め、また議論を深めていき、後には森林環境教育を進めるなど地域活動も活発に行うようになっていった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・林業・木材産業の求人情報や、山村の空き家情報等の情報が一元化されておらず、山村への移住を希望する都市住民の立場から非常に分かりにくい状況にある。</li> <li>・今後、都市から山村へという人の交流・定住の流れを創出するためには、<b>職業や、住居、さらには子女の教育環境等に関してワンストップで情報・アドバイスを提供できる総合的な支援機能</b>が必要。(下川のようなネットワーク組織も有効か)</li> </ul>	○
⑤コミュニティ支援機能	<p>&lt;下川林業地&gt;</p> <p>●Iターン者等の外部人材による地域づくりの推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・下川町は、1990年代初頭には森林組合はIターン者を積極的に受け入れ始め、1989年以降、事務職員・森林管理員・工員合わせて、Uターン者16名、Iターン者86名、地元新卒者19名、延べ計121名を受け入れてきた。</li> <li>・これらのUJIターン者は森林や地域に対して特別な思いを持っており、地域の森林管理の新しい展開、地域の活性化に向けた議論や活動に積極的にかかわるようになった。そして、これらの外部人材の増加によってまちづくりに大きな質的変化があらわれることになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・合併後数年が経過する現時点においても、旧市町村単位で行われていた行政サービスの継続や、地域密着型生活支援を実施しているNPOの有無などにより、生活支援機能の充実度合いは、地区ごとにまちまちのまま。一方少子高齢化傾向は今後も進み、システムや支援内容の効率化を行わなければ、サービス全体の低下・停滞を招く恐れがある。</li> <li>・地区ごとの違いを踏まえ、<b>広域ネットワークによる生活支援システムや、都市住民・Iターン者等も対象としたコミュニティ支援の人材づくり</b>が課題</li> </ul>	△
⑥マネジメント機能	<p>&lt;日田林業地&gt;</p> <p>●「安定供給」のブランド化による需要の拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日田材は、高級材と知られた材ではなく、並材の産地として知られており、近年においても量的供給に対する一定の評価を得ていた。日田林業地がとった戦略は、その方向性を踏襲し、素材を安定供給できる日田材をブランド化し、日田材の需要拡大に努めることであった。</li> </ul> <p>&lt;智頭林業地&gt;</p> <p>●長伐期優良大径材路線から、並材生産の重点化（路網整備、機械の協働利用等）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「長伐期優良大径材」である「智頭杉」の産地であるが、「ビジョン」の第一の柱として、「①低コスト林業の推進」を打ち出し、『長伐期優良大径材』と『並材』を組み合わせ、市場ニーズにあった優良智頭スギ材の林業経営」という新しい智頭林業像が提示している。</li> <li>・これまであまり重視されなかった「並材」に焦点を当てて、施業の集約化・団地化、路網の高密度化（50m/ha）、林業生産の機械化及び共同利用の拡充、地元原木市場への安定的な原木供給といった対策を進めている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・木材の大需要者である大手及び中堅ハウスメーカーでは地域材がほとんど使われていない状況。</li> <li>・こうした需要先に<b>地域材の安定供給体制を構築しようという動きが始まっている</b>。現在、2団体で動いている。</li> <li>・一方は、木材生産から住宅建築までを視野に入れた「産直住宅拠点」に関する構想（集材工場）であり、もう一方は、現在ある地元材製材工場の規模拡大を視点とした構想である。</li> <li>・こうした<b>先導的な動きを、地域として後押し</b>していくことが望まれる。</li> </ul>	○
⑦コンソーシアム・ネットワーク機能	<p>&lt;智頭林業地&gt;</p> <p>●百人委員会による、住民による主体的事業運営の素地づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・智頭町では、森林再生を通じて地域再生が目指されているが、注目すべきは、智頭町百人委員会や森林セラピー推進協議会にみられるように、住民参加を最重要課題としている点である。ここでは、住民自治の徹底によって地域住民の力を引き出し、アイデアを募り、その実現を支援するのが町の役割だと考えられている。</li> <li>・智頭町百人委員会の設置以降、智頭町の林業・木材産業の振興策は産業関係者以外からも積極的に提言されるようになった。</li> </ul> <p>&lt;下川林業地&gt;</p> <p>●多様な産業の巻き込みによる、地域振興の加速化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クラスター推進部は近年では森林にとどまらず農業なども含めて活発な活動を行っている。例えば、建設業による農業参入のための支援や、初冬まきハルユタカ小麦栽培の支援や、下川産小麦を使った手延べ麺生産のコーディネートなど地域の産業連携・活性化に取り組んでいる。</li> <li>・このように、他の産業と積極的に連携を生みだしていくことで、地域に落ちるお金を増やし、地域振興をより加速化させることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森林ボランティア団やコミュニティ支援のNPOは多数あるが、横の連携は希薄である。</li> <li>・ビジョン形成の際に、市民参加の委員会、ワークショップ等が開催されたが、現在は継続されていない。有識者の懇談会に留まる。</li> <li>・<b>森林や山村に関心を持った個人、NPO、企業等が、浜松市の森林のあり方に関する議論や、活動に参加できるような場</b>が必要。</li> </ul> <p>&lt;下川林業地&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・天竜林業振興協議会が中心となり、林業者、木材加工・流通業者等のネットワークを形成しているが、ハウスメーカー等との対話や連携は十分に行われていない。</li> <li>・川下のハウスメーカー・工務店や建築士、さらには農業者、製造業企業等、<b>多様な産業の連携を生み出すコンソーシアム機能</b>が望まれる。</li> </ul>	○  △

### 3) 機能ごとの具体的な事業（案）

この7つの機能が浜松市に整備されるために、具体的にどのような事業、取り組みを行うべきか、そしてその事業を、どのような主体が担い、どのような手順で進めていくことが望まれるかを、以下に取りまとめた。

なお、ここに記載する事項はあくまでも本調査における提案であるので、今後浜松市の多様な主体の参加による議論の中で検討を進めていくことが望まれる。

#### (1) 交流促進機能

##### ① 都市部における交流拠点整備

名称	ヤマのアンテナショッププロジェクト
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・都市部における、天竜地域の情報発信</li> <li>・天竜地域の食材・特産品等の流通拠点の整備</li> <li>・都市住民のうち、環境やエコロジカルな生活に興味を持つ人たちの交流の場づくり</li> <li>・エコポイント流通の拠点</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>○おすそわけマーケット <ul style="list-style-type: none"> <li>・旬の野菜や山菜・きのこなど、穫れたての産品のおすそわけの特設コーナーを設ける。</li> </ul> </li> <li>○おすそわけオークション（WEB ショップ） <ul style="list-style-type: none"> <li>・また、ホームページ上にて限定品のネットオークションなどを行い、来店・アクセスの動機付けを行う。</li> </ul> </li> <li>○ギャラリーカフェ&amp;ショップ <ul style="list-style-type: none"> <li>・アーティスト・イン・レジデンスや里山学校などの作品を展示するギャラリー空間と、エコロジーをテーマとするカフェを組合わせたコーナーを設置する。</li> <li>・展示している作品や、木工芸品、炭製品など森林保全に関連する商品を販売するショップを設置する。</li> <li>・カフェや商品の購入にはエコポイントを利用できるようにし、ヤマのプログラムとの連携を図る。</li> </ul> </li> <li>○全体システム <ul style="list-style-type: none"> <li>・店舗全体として天竜地域の魅力の情報発信を店ぐるみで行い、都市生活者の歓心を喚起する。</li> <li>・商品の購入にはエコポイントを利用できるようにし、ヤマのプログラムとの連携を図る。</li> </ul> </li> </ul>
運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公設民営を想定。</li> <li>設置者＝市、運営者＝民間の新運営組織（3拠点運営）</li> </ul>
成立条件・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・店舗のコンセプト明確化と雰囲気づくり</li> <li>・ヤマの商品やフィールドを紹介することができる人材（マネージャー、スタッフ）の選定・育成</li> </ul>
立ち上げの手順	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ヤマ側の食材や特産品の出荷・搬入体制の整備をまず整備する</li> <li>・店舗の事業運営を任せることができるスタッフを公募する</li> </ul>

## ② 山村部における交流拠点整備

名称	森のクラブハウス・プログラム
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・広域に多様な資源が点在している天竜地域において、利用者のニーズに応じたスポットやプログラムの情報を一括提供する拠点づくり。</li> <li>・食材や特産品のショールーム、各地区の観光施設への送客窓口。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天竜地域で展開する様々なプログラムの総合窓口となるクラブハウスを整備し、マチの拠点と連携する。これにより、都市住民の天竜地域利用の玄関口とする。</li> <li>・クラブハウスにレストラン&amp;食工房を設置し、都市生活者のもう一つの食卓として、旬の食材や郷土料理を提供する。</li> <li>・レストランに併設する食工房は、小中学校の総合学習の時間や、農体験プログラムの料理教室などで活用し、地域の食育推進に寄与する。</li> <li>・天竜の各拠点にあるレストラン（温泉、民宿、名所旧跡等）とも連携し、天竜地域の集客・食材活用の相乗効果を目指す。</li> </ul>
運営体制	※アンテナショップ・プログラムと同様に進める。
成立条件・課題	※アンテナショップ・プログラムと同様に進める。
立ち上げの手順	※アンテナショップ・プログラムと同様に進める。

名称	山の農楽校・里山楽校
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中山間地域の農林業の活性化</li> <li>・1次産業の高次化（加工品開発、観光体験プログラム化）</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天竜各地区との農林業家と連携し、農業体験（収穫を中心とする収穫体験コース／1シーズン通じて通うコース）をプログラム化した「農学校」と、里山の生活文化、自然エネルギーや森林管理、ヤマ遊びの楽しみを学ぶ「里山学校」を開設する。</li> <li>・「楽校」の共通窓口は山のクラブハウスに置き、教室（フィールド）は各地区の農地や里山とする。</li> <li>・様々な参加者が、朝と夕方に顔を合わすことにより、新たな交流の機会を提供する。</li> <li>・マチのアンテナショップにおけるギャラリーにおける情報発信、ギャラリーでの作品展示など、他の拠点との連携を図る。</li> </ul>
運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公設民営方を想定。設置者＝市、運営者＝民間の新運営組織（3拠点運営）</li> <li>・森のクラブハウスのスタッフが、各地区で活動する NPO・市民団体等と連携し、楽校プログラムを運営。</li> <li>・各地区の農家や林家に講習回答を実施し、リーダーとして利用者と接することができるよう指導。</li> </ul>
成立条件・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校の総合学習や、企業等の団体利用の誘致。</li> <li>・後継者不足等により遊休化した農地の活用の実現（地元交渉）。</li> <li>・指導者となりうる農家・林家の発掘。</li> <li>・農業、里山保全活動のノウハウを持っている既存の市民団体・NPOとの連携</li> </ul>
立ち上げの手順	<ul style="list-style-type: none"> <li>・農家の実態調査（何に困っているのか／遊休農地や後継者不足の実態／指導者となりうる人材の存在 等）</li> <li>・利用者側（都市住民）ニーズの把握による利用料金・開催頻度などの設定</li> </ul>

### ③ 交流プログラムの構築

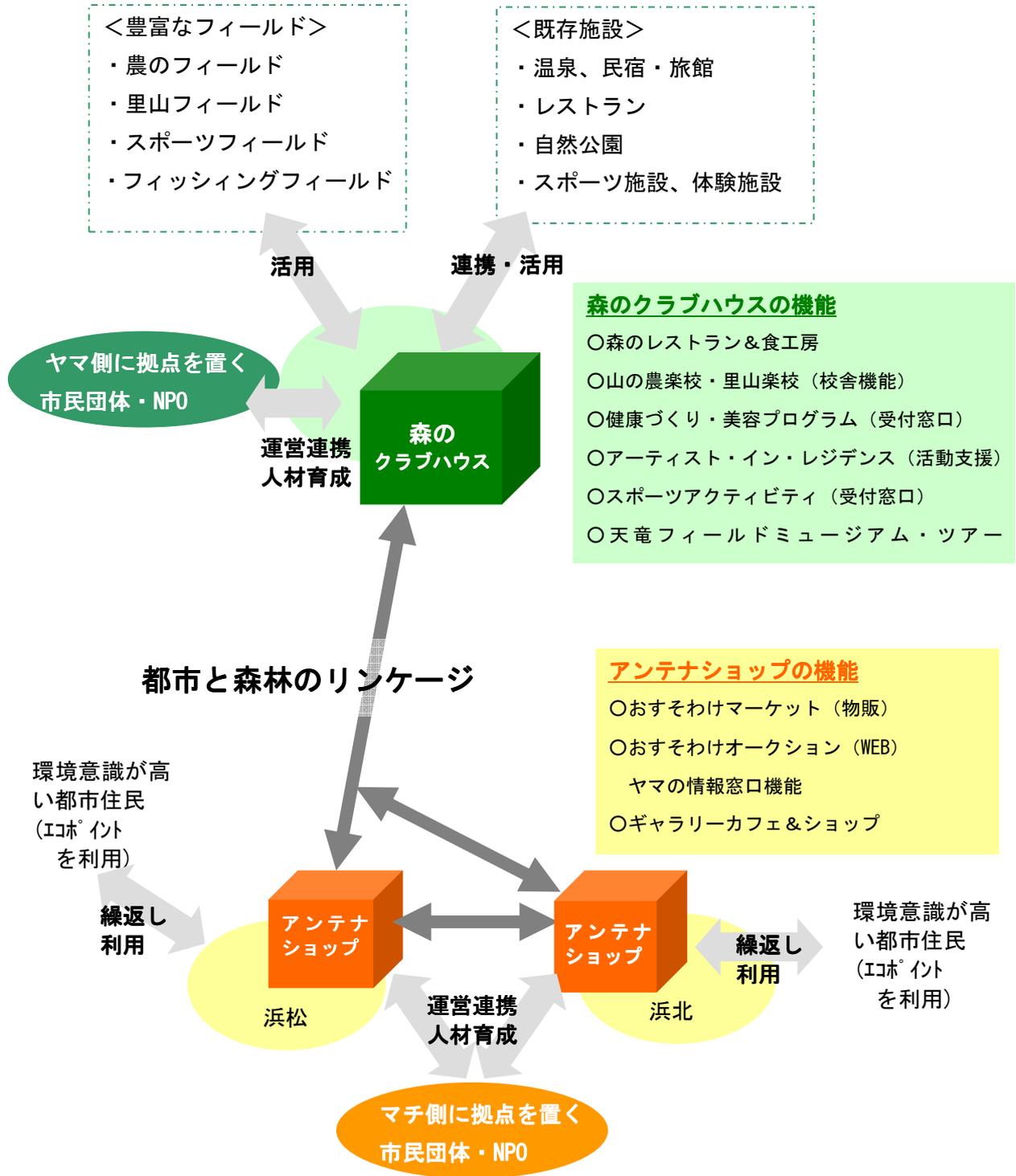
名称	アーティスト・イン・レジデンス
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天竜地域の新たな魅力づくりとしてのアートプログラムの展開</li> <li>・森林で実施する各種プログラムとの連携</li> <li>・長期滞在～二地域居住など、アート活動を起点にした新たな居住スタイルの創出</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な分野のアーティストを招聘し、一定期間天竜地域に滞在して制作活動を行ってもらうプログラム。</li> <li>・滞在中、里山楽校のプログラムなどと連携したり、アーティストと一緒に一定期間滞在し、制作活動を行うことができる仕組みをつくる。</li> <li>・アーティストの滞在空間として、学校関係や公共施設などの遊休施設、利用可能な地区の空き家などを活用する。</li> <li>・長期に滞留する都市住民に対しては、留学制度、弟子入り制度、田舎暮らしサポート制度などの支援策を検討する。</li> </ul>
運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・滞在場所の設定・事業運営＝市</li> <li>・他のプログラムとの連携＝民間の新運営組織（3拠点運営）</li> </ul>
成立条件・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市の実施計画・体制づくり</li> <li>・滞在場所（レジデンス）の確保</li> </ul>
立ち上げの手順	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市の実施計画・体制づくり</li> <li>・滞在・交流場所の確保</li> <li>・アーティストの招聘</li> </ul>

名称	健康づくり・美容プログラム
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天竜地域の健康関連地域資源（温泉、食材、生活様式等）の活用と地域活性化</li> <li>・都市住民の健康づくりニーズへの対応</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保養地としての歴史がある多くの温泉を現代風に更新（ハード・ソフト）し、健康づくりや美容・エステ、ダイエットなどの健康プログラムソフトを充実させ、都市生活者のニーズに対応する。</li> <li>・食に関するプログラム、地元食材の活用、健康づくりのアクティビティなど、他の体験プログラムとも連携し、プログラムの選択肢を確保する。</li> </ul>
運営体制	事業実施主体＝県小関連事業者（民間＝温泉事業者など） 運営支援＝民間の新運営組織（3拠点運営）
成立条件・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・健康関連事業者の啓蒙、事業参画者募集</li> <li>・都市住民のニーズ把握</li> </ul>
立ち上げの手順	<ul style="list-style-type: none"> <li>・温泉等健康関連事業者への趣旨説明、事業参画者の組織化</li> <li>・都市住民ニーズに対応したプログラム作り</li> <li>・施設の更新、新プログラムの導入</li> <li>・健康インストラクター（人材）の公募、育成</li> </ul>

名称	アウトドアスポーツ・プログラム
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・河川空間、農村の遊休空間、荒廃した森林空間の有効活用</li> <li>・都市生活者のアウトドアスポーツニーズへの対応</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャンプや軽登山などの手軽に楽しめるプログラムから、大井川源流域のフライフィッシング教室、里山空間を活用したアスレチックスポーツ（例：フォレスト・アドベンチャー）などの活動のためのフィールド整備と、インストラクターなど指導者育成、運営体制作りを行う。</li> <li>・他のプログラムと組み合わせ、相乗効果を発揮する。</li> </ul>
運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・設置者＝民間（地権者、団体・組合等）</li> <li>・運営者＝事業ノウハウを持つ民間事業者</li> </ul>
成立条件・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事業ニーズのマーケティング</li> <li>・フィールドの確保</li> </ul>
立ち上げの手順	<ul style="list-style-type: none"> <li>・都市側のニーズ把握</li> <li>・活用可能な遊休空間・荒廃森林の調査・把握</li> <li>・事業実施計画策定</li> </ul>
関連事業	健康づくり・美容プログラム 森のクラブハウス・プログラム

名称	フィールドミュージアム・ツアー
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天竜地域の潜在的資源の掘り起こしと活用による活性化</li> <li>・市民の生涯学習や手軽なレジャーニーズへの対応</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天竜地域を、多様な地域資源が点在するフィールドミュージアムと捉え、テーマごとに体験学習型の活動とソフトを合わせたフィールドミュージアム・ツアーのプログラムを開発する。</li> <li>・具体的には、以下のようなテーマが想定できる。 <ul style="list-style-type: none"> <li>⇒水…清流、湧水、滝、温泉、大崩れ（地質学的アプローチ）、溪谷、ダム</li> <li>⇒茶…栽培・加工技術、生活・歴史との関わり、地域の生活文化、作法など（生活文化としてのお茶）</li> <li>⇒地域食材（ワサビ、コンニャク、シイタケ、ソバ、アワ、ヒエ等）…地域の農業、気候風土との関係、栽培・保存・調理方法等（食の体感プログラム）</li> <li>⇒歴史探訪…歴史遺産をめぐる、講師のレクチャーを聴く（歴史学習プログラム）</li> <li>⇒植物・昆虫…地区の地勢・気候と生態系、植生・生物層を学び、フィールドで植物・生物に触れ体感学習する。</li> <li>⇒修験道の伝統</li> <li>⇒塩の道</li> </ul> </li> <li>・各地域の資源や人材（ガイド、インストラクター）を発掘し、プログラムを開発する際には、地元学的アプローチによる事前調査を地区において実施する。</li> </ul>
運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ソフトプログラムの開発・商品化＝民間の新運営組織（3拠点運営）、すでに活動を実施している市民団体・NPO等</li> </ul>
成立条件・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各種プログラムを実施している市民団体・NPOのプログラムの内容の見直し、体験プログラムとしてのブラッシュアップによる、統一プログラム化</li> </ul>
立ち上げの手順	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既存の活動実績、プログラムの把握、レビュー</li> <li>・都市側ニーズの把握と商品としての事業計画</li> <li>・インストラクター、リーダーの育成とプログラムのシリーズ化</li> </ul>
関連事業	森のクラブハウス・プログラム 健康づくり・美容プログラム 山の農楽校・里山楽校

＜拠点整備及びプログラム展開イメージ＞



(2) マーケティング機能

① 事業者協働によるマーケティング

名称	浜松市 森林・山村マーケティング調査事業
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・消費者の住宅に対するニーズ、観光・レクリエーション等に対するニーズが日々変化する中で、特に小規模の林業者、製材所、観光団体等はそのニーズを的確に把握できているとは言い難い状況がある。</li> <li>・しかし、一方で、限られた人員、資金で業務を回している状況の中で、独自にマーケティング調査を行うことは、特に小規模の林業者、製材所、観光団体等にとって難しいと言える。</li> <li>・そこで、これらの主体が協働で定期的に森林資源、山村資源の商品化等に向けたマーケティング調査を行うことで、消費者のニーズにあった事業展開を後押しする。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・林業者、木材業者、観光団体等が協働し、定期的に森林資源、山村資源の商品化等に向けたマーケティング調査を行う。</li> <li>・具体的には、実行委員会を構成し、定期的（2、3年ごと）に都市部住民に対するマーケティング調査（郵送アンケート調査、グループインタビュー等）を実施、その結果に基づく、森林・山村資源の商品化の方向性検討、協同事業の可能性検討等を行う。</li> <li>・行政も経費の補助、専門的アドバイス等を検討する。</li> <li>・住宅メーカーを交えた意見交換会の開催も望ましい。販売先、いわゆる出口が限られた住宅業界においては、こうした出口の声を聞くことは、売上を向上させるために欠かせない。方法はどうか、買い手の要望を汲み取る仕組みを作り、定期的に稼働させなければならない。</li> </ul>
運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市内の林業者、製材所、観光団体等が任意参加する実行委員会（浜松市地域材利用促進協議会等が実施主体となることも検討）</li> <li>・浜松市は、経費の補助、専門的アドバイス等を検討する。</li> <li>・商工会との連携も検討。</li> </ul>
成立条件・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意義の共有による連携体制（実行委員会）の構築</li> <li>・実施費用の確保</li> </ul>
立ち上げの手順	<p>H22：行政の関連主体に呼びかけを行い、マーケティングの意義等の研修・勉強会を行い、マーケティング調査の試行を行う。</p> <p>H23～：実行委員会による主体的な調査、検討を進める。</p>
関連施策	<ul style="list-style-type: none"> <li>○浜松版「木材生産・流通システム」構築事業</li> <li>○地域材利用促進庁内会議</li> <li>○特用林産物振興助成事業</li> <li>○木質バイオマスエネルギーの活用事業</li> <li>○普及啓発事業（森林・林業交流事業）</li> </ul>

## ② 商品・サービスの開発支援

名称	浜松市「FSC 森林認証」エコデザインコンテストの開催
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本調査で都市住民に対して行った WEB アンケート調査では、約 40%の回答者が近隣や地元の材を使いたいという意識を持っていること、環境性能や産地証明の明確化等に対してのニーズが大きいことが把握された。</li> <li>・こうした消費者ニーズに応えるため、FSC 森林認証 (FM 認証) を取得した森林の木材を使った商品・サービスの開発を進め、地域材利用の付加価値化、環境ブランド創出を図る。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・林業者・木材業者・建設業者・デザイン関係者・NPO・行政等多様な主体によりコンテスト実行委員会を構成し、浜松市「FSC 森林認証」エコデザインコンテストを開催する。</li> <li>・浜松市の FSC 材を使った商品・サービスのプラン・デザインを、広く市内外から募集し、優秀な商品・サービスのプラン・デザインを審査委員会で選定・表彰する。</li> <li>・なお、優秀プラン・デザインは、広く市民に PR する他、一般販売に向けて商品化を目指す。</li> <li>・行政も経費の補助、専門的アドバイス等を検討する。</li> </ul>
運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市内の林業者・木材業者・建設業者・デザイン関係者・NPO・行政等が任意参加する実行委員会 (これまで FSC 森林認証取得を中心的に進めてきた天竜林材業振興協議会等が実施主体となることも検討)</li> <li>・浜松市は、経費の補助、専門的アドバイス等を検討する。</li> <li>・商工会との連携、都市部企業の協賛働きかけも検討。</li> </ul>
成立条件・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・加工・流通認証である CoC 認証取得事業者が一定数確保されること</li> <li>・コンテスト開催経費の確保 (市の補助、協賛企業の獲得等)</li> <li>・優秀作品の商品化ルートの確保 (審査員に木材加工関係主体が参画できるとよいか。自社で作れるかという視点で審査を行う)</li> </ul>
立ち上げの手順	<p>H22～23：森林認証取得の下流域市民への PR CoC(加工・流通)認証の取得増加 コンテスト実施体制の構築、内容検討</p> <p>H24～：コンテストの開催、商品化の推進</p>
関連施策	○森林認証 (FSC) 取得事業

### ③ 天竜の木材等、森林・山村資源の認知向上

名称	天竜材の家 百年住居るハウス（スマイルハウス）キャンペーン
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本調査で都市住民に対して行った WEB アンケート調査では、約 40%の回答者が近隣や地元の材を使いたいという意識を持っている一方、天竜材の魅力や特徴について十分に認知されていないことが把握された。</li> <li>・一方で、浜松市は、外材を含む他産地材と市内産材との価格差に対し市が一定の助成を行い、地域材の需要を喚起する取り組み（天竜材の家 百年住居る事業）を行ってきた。これらの住宅は都市部にも多く立地し、都市住民が天竜材を見て・触れ・体験する絶好の素材であると言える。</li> <li>・この事業によって建設された住宅を活用した普及啓発キャンペーンを展開し、市民が天竜材や、天竜材を使った家を見て・触れ・体験する機会を提供することによって、天竜材の利用促進を図る。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天竜材の家 百年住居る事業で建設された住宅を活用した普及啓発キャンペーンを展開する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>○天竜材の家・天竜美林体験ツアーの催行 →天竜材の家の見学、原木市場の見学、天竜美林の見学や伐採体験等を行う体験型イベント</li> <li>○「天竜材の家 百年住居るハウス」紹介パンフレットの作成</li> <li>○「天竜材の家 百年住居るハウス」紹介マップの作成</li> <li>○「天竜材の家 百年住居るハウス」紹介番組の作成</li> </ul> </li> <li>・森林認証（FSC）の普及啓発と一体的に行う。</li> </ul>
運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天竜材の家 百年住居る事業を契機として設立された浜松市地域材利用促進協議会等が実施主体の中核となることが期待される。</li> </ul>
成立条件・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天竜材の家（スマイルハウス）の見学に関しては施主の了解</li> <li>・ツアー等の実施経費の確保（市の補助、協賛企業の獲得等）</li> </ul>
立ち上げの手順	<p>H22：キャンペーンの実施体制の構築、内容検討</p> <p>H23～：キャンペーンの展開</p>
関連施策	<ul style="list-style-type: none"> <li>○天竜材の家 百年住居る事業</li> <li>○森林認証（FSC）取得事業</li> <li>○普及啓発事業（森林・林業交流事業）</li> </ul>

(3) 人材育成機能

① 小中学校での森林環境教育の展開

名称	「浜松っこは、森の子」森林環境教育プロジェクト
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・浜松市が将来にわたって、森林の多面的機能を維持し、森林と共生した社会を構築するためには、未来を担う子どもたちを対象とした、森林や木材とのふれあいをおとした環境教育の展開が求められる。</li> <li>・浜松市内の小中学校では4年生の社会科で、副読本「のびゆく浜松」で金原明善の業績を紹介したり、総合的な学習の時間に、県が作成した環境学習の手引書「天竜美林の教え」を配布するなどの取り組みがなされてきたが、体験的な活動については、十分になされていない。</li> <li>・今後、林業者による出前講座や、児童が自然豊かな山村部を訪問することによる、山村の人々との交流や山村での生活体験や自然体験等の機会を増やすことで、児童にとって、ものの見方や考え方、感じ方を深め、学ぶ意欲や自立心、思いやりの心、規範意識などを育むといった力強い成長を促す効果があると期待される。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・林業者等による出前講座や、児童が自然豊かな山村部を訪問することによる、山村の人々との交流や山村での生活体験や自然体験等の機会を創出する。</li> <li>・そのために、以下を進める。 <ul style="list-style-type: none"> <li>○教材の整備</li> <li>○教育人材の発掘・育成</li> <li>○関係主体の連携・協働</li> </ul> </li> </ul>
運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上記を進めるために、県やNPO・学校等専門知識を持つ組織、浜松市役所関係部署（森林課、環境企画課、教育委員会等）が協議し、役割を分担する。</li> <li>※なお、出前講座に関しては、既に、若手林業家グループ「TENKOMORI」や市職員が行っているが、これを今後市内の全小中学校で行える体制を構築する。</li> <li>※体験活動に関しては、総務省・文部科学省・農林水産省が進める「子ども農山漁村交流プロジェクト」と連携を図るものとする。</li> </ul> <p>注) 子ども農山漁村交流プロジェクト</p> <p>このプロジェクトは、平成20年度から5年間で、農山漁村での1週間程度の宿泊体験活動（農林漁家での宿泊体験を含む）を、全国2万3千万校の小中学校1学年（5年生）程度の参加を目標に推進するもの。これは、平成19年6月に「都市と農山漁村の共生・対流に関するプロジェクトチーム（副大臣PT）」が打ち出したもので、総務省、文部科学省、農林水産省が連携施策として取り組んでいる。</p>
成立条件・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象校の理解</li> <li>・実施経費の確保</li> </ul>
立ち上げの手順	<p>H22～23：関係主体の連携・協働体制の構築、内容検討</p> <p>H23：教育人材の育成、教材の整備</p> <p>H24～：出前講座、体験活動の全市的展開</p>

## ② 社会人等対象の人材育成システムの構築

名称	はままつ森のなりわいスクール (はままつフォレストビジネススクール)
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現状、天竜林業高校、農林大学校等、学生対象の林業教育インフラは充実しているが、社会人が新たに林業・木材産業に就業する際の人材育成システムは十分とはいえない。</li> <li>・今後、林業・木材産業には、製造業や建設業等多様な経験を有する人材の参入が期待されており、これらの人材が体系的に林業・木材産業、地域森林管理に関して学ぶことのできる仕組みを整備する必要がある。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・浜松市において林業・木材産業への就業を希望する者、森林資源を活用した起業を希望する者が、地域の森林の現状や課題、様々な森林利用のあり方、林業・木材産業に就業する際に必要となる技術・知識を体系的に学ぶことができるシステムを整備する。</li> <li>・将来的には「学校」という形で定常的な機関を設置することが望まれるが、初期は、数週間程度の研修形式での実施が適切と考えられる。</li> </ul>
運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・浜松市森林課、静岡県立天竜林業高校、静岡県立農林大学校林業分校、市内森林組合等が、講師や施設、費用等を分担することが望まれる。</li> </ul>
成立条件・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天竜林業高校、農林大学校等が社会人を対象とした研修等に関する制度的上の制約の有無</li> <li>・常設の学校とするときの施設（新設か、既設のものを活用するか等）</li> </ul>
立ち上げの手順	<p>H22：内容検討 H23：研修の試行（年1回） H24～：ニーズを見て、回数を増やしていく。 ニーズが大きければ、常設も検討。</p>

## ③ 地域再生に資する人材育成システムの構築

名称	森林・林業マイスター制度
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・従来的一次産業としての林業技術・専門知識に重点を置いた人材育成だけでなく、環境問題、生物多様性など森林の多機能性に精通した総合的知識と技能を持った人材育成を行うことにより、地区の森林の将来ビジョン実現に必要な、多様な人材の育成システムを構築する。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・林業を基幹産業とする中山間地においては、これまで一次産業としての林業に関する専門知識や技能を身につけるための人材育成が中心であった。</li> <li>・近年、環境問題がクローズアップされるとともに、林業だけでは生活が成り立たなくなり、一次産業だけではない森林の多機能性に着目した幅広い知識・技能を身につけた人材が求められている。</li> <li>・今後、環境教育や生物多様性を体感できる森づくりを行うなど、これまでとは異なるニーズが増大すると考えられ、それに対応可能な新しいリーダー育成が必要となると予想される。</li> <li>・また、林業だけでは生活が成り立たなくなった現在、地区の現状や特性に応じて、荒廃しつつある森林に手を入れつつ一定の利活用を進めていくために、林業以外の森林の多角的利活用を検討することが、地区のニーズとして増大していく。</li> <li>・これを受け、地区ごとの森林の将来ビジョンと、短期・中長期の施業計画を作成するとともに、その実現にふさわしい人材を、地域ぐるみで育成する仕組みを構築する。</li> </ul>

<b>運営体制</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・浜松市による森林・林業マイスター制度の整備、ならびにカリキュラムおよび人材育成のための教材等開発。</li> </ul>
<b>成立条件・課題</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・林業以外の中山間地の森林（スギを中心とする人工林）の利活用方針の策定。</li> </ul>
<b>立ち上げの手順</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・H22～23 地区ごとの望ましい森林・林業の施行のあり方検討（放置状態にある食隣地への手の入れ方の検討、針広混交林化による環境教育林等多目的利用の推進の可否等）、地区ごとの森林・林業ビジョンの策定</li> <li>・H24～ 必要な人材の育成プログラムの開発</li> </ul>

(4) マッチング機能

- ① UJI ターン者等の住居・職業の斡旋
- ② 求職・求人のマッチング
- ③ 企業等 CSR の活動地の斡旋

名称	浜松市都市山村交流・定住支援センター（まち・もりセンター）
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本調査における森林組合等へのヒアリングで、林業・木材産業の求人情報や、山村の空き家情報等、林業への参入や、山村への移住に関する情報が一元化されておらず、都市住民の立場から非常に分かりにくい状況が把握されている。</li> <li>・また、山村へのIターン者、林業への新規就業者のニーズや求める生活環境等は様々であり、一方的な情報提供だけでなく、多様なニーズに臨機応変に対応できるコンサルティング、アドバイスを行うことも必要となっている。</li> <li>・今後、都市から山村へという人の交流・定住の流れを創出するためには、職業や、住居、さらには子女の教育環境等に関してワンストップで情報・アドバイスを提供できる総合的な支援機能が必要となってくる。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・都市住民が、市内で林業・木材産業に就業したい、あるいは山村に移住したいと思ったときに、気軽に相談でき、確実に情報が得られる拠点・窓口づくりを作る。</li> <li>・なお、交流から定住への発展を後押しすることも想定すると、観光情報の提供や、企業のCSR活動のフィールド斡旋等も一体的に提供できる体制を構築することが、望ましい。</li> <li>・「はままつ森のなりわいスクール」との一体的設置も検討する。</li> </ul>
運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・山村部で地域づくり活動を行うNPO団体、林業団体等が実施主体となることが望ましい。</li> <li>・浜松市も、運営経費の補助、施設の提供等積極的な関わりが望まれる。</li> </ul>
成立条件・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・運営主体の確保</li> <li>・求人情報の斡旋を行ってきたハローワークや、各種就業支援を行ってきた林業量動力確保支援センターとの役割分担の調整</li> <li>・6地区の自治センターとの役割分担の調整</li> <li>・運営経費の確保（県、市の補助等も検討）</li> <li>・運営施設の確保</li> </ul>
立ち上げの手順	<p>H22：ニーズ調査、システム設計  H23：運営主体の選定  H24～：運営開始</p>

(5) コミュニティ支援機能

① 自治的機能と広域ネットワークによる支援

名称	天竜広域生活サポートネットワーク
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地区ごとの特性や実情に対応したきめ細かな生活支援サービスの充足。</li> <li>・地区ごとに実施する生活支援サービスと広域ネットワークのサービスを組み合わせ、中山間地域広域の広域生活支援システムの効率化・充実を図る。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・合併後数年が経過する現時点においても、旧市町村単位で行われていた行政サービスの継続や、地域密着型生活支援を実施しているNPOの有無などにより、生活支援機能の充実度合いは、地区ごとにまちまちのままである。</li> <li>・一方、当該地域の少子高齢化傾向は今後も進み、システムや支援内容の効率化を行わなければ、サービス全体の低下・停滞を招く恐れがある。</li> <li>・本事業においては、中山間地域全体で統一されていない生活支援サービスや各種コミュニティビジネスなどの実施状況を一元的に整理し、既存のサービスは継続し、地区により不足している支援サービスを、主に中核となる病院・福祉施設（天竜、佐久間、引佐、浜北等）や商業施設（天竜、浜北等）などを拠点として、実施する広域ネットワークによる生活支援システム（訪問医療、サテライト診療、在宅診療、宅配買物サービス、移動店舗等）の検討を行う。</li> </ul>
運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行政を中心に、大型小売店舗を展開している商業事業者、一定数の病床を持つ病院や救急病院、福祉施設の事業者等の協力を得て、広域ネットワークシステムを構築する。</li> </ul>
成立条件・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サービスメニューの公益性に応じた、民間事業者への公的支援</li> <li>・既に関係サービスを実施している地区のNPOや交通事業者による運営協力</li> </ul>
立ち上げの手順	<ul style="list-style-type: none"> <li>・H22 既存の生活支援機能の情報収集・整理（棚卸し）、システムの設計</li> <li>・H23～ 着手可能なものから順次サービス開始</li> </ul>

② 浜松型「市内二地域居住スタイル」の可能性検討

名称	浜松型「マチ⇄ムラ往来生活スタイル」のすすめ
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交通インフラの充実を活かし、浜北や旧浜松（マチ）に住まいながら中山間地区（ムラ）へ通勤する、逆にムラに住まいながらマチに通勤するという、ライフステージ（家族の変化）に応じた居住地のフレキシブルな選択を可能とする二地域居住（往来生活）スタイルの成立可能性の検証と、実現に必要な支援策、それによる中山間地の活性化効果などを検証し、中山間地の活性化に寄与する。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もともと東海地方は、南にマチ北にムラという位置関係で、若いころはマチで働き、歳をとるとリタイアしてヤマに移住するという順送りの居住形態が定着しやすい地域であり、これを「東海型移住」と呼ぶ人もいる。</li> <li>・浜松市もその例に漏れず、天竜地区は遠州鉄道で旧浜松まで30分、車でも1時間程度で到着できる比較的都市に近い立地にある。これに加え、天竜区各地区へのアクセス道路の整備が進んだため、現在では以前に比べ格段に短時間でマチに出ることができるようになった。</li> <li>・このメリットを活かし、浜松の立地ゆえ成立する可能性があるマチ・ムラの通勤による地域居住の可能性を検証し、その問題点と対応に必要な施策等を検証し、実現へのアクションプログラムと課題を明らかにする。</li> </ul>
運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行政が中心となり、浜松型「市内二地域居住スタイル」の具体像、そのメリット・効果などを検証し、実践者へのヒアリングや、実現へのボトルネックとなる課題を抽出、対応策を検討する。</li> </ul>

<b>成立条件・課題</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・通勤渋滞や冬季の道路条件など、自動車通勤の阻害要因の抽出と対応が必要。</li> <li>・中山間地区における定住条件の充足と適切な住宅施策との連動が必須条件。</li> </ul>
<b>立ち上げの手順</b>	<p>H22～23 基礎調査、ヒアリング調査、仮説の設定と課題抽出</p> <p>H23～24 「マチ⇄ムラ往来生活」社会実験の実施、関連施策の検討</p>

(6) マネジメント機能

① サプライ・チェーンの再構築

名称	浜松版木材生産・流通システム
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市内の木材のサプライチェーンを見ると、原木流通の段階では市内材が 95%以上を占めるが、製品流通段階では外材、他地域材がシェアを伸ばし、市内材は 28%まで落ち込んでいる。</li> <li>・地域材の地産地消は、地域の木材を利用したいといった需要（地産地消）に応えられる一部の地域ビルダー、大工・工務店や建築士によって支えられているものの、大ロットかつ一定品質の製材品の安定供給を求めるハウスメーカーのニーズに応えうる地域材のサプライチェーンがないことが原因となっている。</li> <li>・今後は、市内の工務店などを対象とした地産地消を着実に推進するとともに、パワービルダーや地域ビルダーを意識した新たな需要の創出が必要である。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・こうした状況の中で、地域材の安定供給体制を構築しようという動きが始まっている。現在、地元材を利用した木材の生産・流通システム構想が 2 団体で動いている。</li> <li>・一方は、木材生産から住宅建築までを視野に入れた「産直住宅拠点」に関する構想（集成材工場）であり、もう一方は、現在ある地元材製材工場の規模拡大を視点とした構想である。こうした動きを、地域として後押ししていくことが望まれる。</li> <li>・なお、サプライチェーンの再構築においては、コーディネート機能、情報の集約・発信機能と、品質管理機能を有する拠点の整備が重要となってくる。</li> <li>・コーディネート機能とは、素材生産、加工、流通という 3 つの業界を調整する機能であり、どこでどのような木が切られ、どの工場でどのような木を必要としているかを把握し、さらに把握した情報をもとに生産量や価格を調整するものである。</li> <li>・情報集約・発信機能とは、川下側が・どのような材を・どれだけ・いつ必要としているか、反対に山側からも・どのような材を・どれだけ・いつ出せるかという情報を、IT を活用して集約・発信することである。</li> <li>・品質管理機能とは、ハウスメーカー等が求める品質を維持・証明するためのもので、ワンストップターミナルにグレーディングマシンを設置し、ターミナルを経由する材については厳密な品質管理を行うものである。</li> </ul>
運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・民間事業者が主体的に進めることが望まれる。</li> <li>・行政による設備投資への補助も検討</li> </ul>
成立条件・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・民間が自己資金を調達できること</li> <li>・市が認可できる内容になっていること</li> <li>・用地の取得 等</li> </ul>
立ち上げの手順	<p>H22：システム設計、用地取得、資金確保  H23：設備導入  H24～：稼動</p>

## ② 森林組合間、森林組合－素材生産業者間の連携強化

名称	人材・機材・作業等の広域融通システム
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・近年、林業採算性の低下、林業経営意欲の減退等による林業の停滞の中で、森林組合（市内6森林組合）は林業・木材産業、山村地域の活性化等のため、広域合併の推進により森林組合の組織・経営基盤を強化することが重要な課題である。</li> <li>・浜松市域の森林組合は、森林・林業諸施策の推進及び各事業の均一化を図ることを目的として、平成17年7月に「浜松地域森林組合協議会」を、平成20年12月には、「浜松地域森林組合協議会」内に合併研究会を設置。また、平成19・20年度にかけて、森林組合の部・課長クラス職員と市のグループ長以下の職員がワークショップを開催し、『平成22年度における浜松地域森林組合合併協議会の設置』を求める提言書を提出した。</li> <li>・今後合併の是非が詳細検討されるが、トップダウンでの決定ではなく、現場レベルから組合間連携の実績をボトムアップで積み上げていくことで、現場との乖離がない、真に必要とされている連携のあり方、合併の是非が見えてくるものと思われる。</li> <li>・また、森林組合間のみならず、森林組合と民間素材生産業者間でも連携を強めていくことで、地域として生産性の向上を図れると考えられる。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森林組合間、森林組合－民間素材生産業者間で、保有する人材（現場作業員等）、高性能林業機械等を貸し借りすることで、地域として人材や機械の遊びをなくし、生産性の向上を図る。</li> <li>・なお、本調査のヒアリングにおいては、既に水窪森林組合、佐久間森林組合、龍山森林組合においては、業務が多いときには他の組合の応援を頼むなどの取り組みがなされているので、こういった連携の取り組みをより広げていくこととする。</li> </ul>
運営体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森林組合職員（森林施業プランナー等）間の定期的な会議の中で進め方を検討。</li> </ul>
成立条件・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関係者の意義の理解</li> <li>・現場レベルのネットワーク形成</li> </ul>
立ち上げの手順	<p>H22：各組合等が保有する人材・機械、各組合等の業務の季節的変動等を整理し、連携のあり方を検討、融通の試行</p> <p>H23：本格的実施</p>

(7) コンソーシアム・ネットワーク機能

① 多様な主体の参画によるビジョン形成（推進・評価、PDCA）

名称	「森林都市はままつ」市民委員会
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森林は、木材生産以外にも、温暖化防止、土砂災害防止、水源涵養といった多様な公益的機能を持つが、都市住民と山村住民、林業関係者と非林業関係者など、居住地や職業によって、森林に期待するものは大きく異なる。</li> <li>・よって、地域の森林に係るビジョンは、立場の異なる多様な主体が議論に参加し、認識のギャップを埋め、思いを共有する作業を行わなければ、地域の中で広く指示されるビジョンにはなり得ない。</li> <li>・「森林都市はままつ」市民委員会は、「浜松市森林・林業ビジョン」等森林・林業・山村に関わる各種構想・計画の策定・改定作業に、山村住民だけでなく、都市部住民も含めた幅広い住民・事業者の参画を担保するものである。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後予定されている「浜松市森林・林業ビジョン」の改定、「森林都市宣言」の内容検討に当たって、山村住民だけでなく、都市部住民も含めた幅広い住民・事業者の参画を担保するために、市民委員会を立ち上げる。</li> <li>・なお、ビジョン改定後、宣言発表後も解散せず、それらの構想等の進行管理を行うなど、PDCAを行うものとする。</li> </ul>
運営体制	事務局：森林課
成立条件・課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・メンバーの選定</li> <li>・委員会での議論の公開</li> </ul>
立ち上げの手順	<p>H22：メンバー選定、中心的メンバーの意見交換</p> <p>H23：森林都市宣言(仮称)の発表</p>

② 庁内の横断的連携体制の構築

名称	浜松市地域材利用促進庁内会議（国施策との連携による発展的継続）
目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域材の需要拡大を図るためには、まず、市が率先して公共事業等に地域材を利用する必要があるという考えから「浜松市地域材利用促進庁内会議」及び「同幹事会」が平成17年度に設置されている。</li> <li>・また、本組織においては、より具体的な地域材利用の方針を定めた「公共部門における地域材利用促進に関する基本方針」を平成18年度(H19.3)に策定し、この基本方針に従い活動を展開している。</li> <li>・一方では、農林水産省は、国が率先して好況建築物における木材利用における木材利用に努めることなどをないようとした「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律案」を、平成22年3月に国会に提出した。</li> <li>・今後は、上記の国の動きとも連携することで、市の公共事業等における地域材利用を一層推進することが必要である。</li> </ul>
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国の「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律案」を踏まえて、「公共部門における地域材利用促進に関する基本方針」を改訂し、それに基づき、公共事業等における地域材利用を強化する。</li> </ul>

運営体制	現在、浜松市地域材利用促進庁内会議に参加している部署が引き続き参加。
成立条件・課題	・山村活性化と関係各課の業務との関連に関して、各課担当者が十分に理解をすること
立ち上げの手順	H22：『公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律案』の国会での審議の分析及び対応方針の検討。 H23：「公共部門における地域材利用促進に関する基本方針」の検討

### ③ CSR に取組む企業コンソーシアム形成

名称	「森林都市はままつ」サポーター企業コンソーシアム
目的	・企業同士が相互に刺激しあい、かつ社会に森林貢献活動の情報を発信するプラットフォームを構築することで、森林貢献に資する活動（森林吸収プロジェクト、排出削減プロジェクト等）を促進すること。
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・浜松市内に本店・支店のある企業やNPO等、環境貢献・森林貢献・山村地域貢献の意志を持つ団体任意に参加できるコンソーシアムを形成する。</li> <li>・コンソーシアムで行う事業内容は、以下を想定する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>○参加事業者の名前が掲載されたフリーペーパーを発行し、クレジットの認証や、オフセット商品の開発・販売等の取り組み等を積極的に発信する。このフリーペーパーは、参加事業者が営業ツールとして使える、参加メリットを提供できる性質のものとする</li> <li>○カーボン・オフセット商品やサービスなどを開発した事業者の市民向けのプレゼンテーションの機会をつくる</li> <li>○各事業者の環境への取り組みやCSR活動などの情報交換会を行なう。このほか異業種交流会も定期的に行なう。</li> </ul> </li> </ul>
運営体制	事務局は企業持ち回り (あるいは商工会等に事務局を置く)
成立条件・課題	・事務局機能の設立 ※ただし、任意団体等の緩やかなネットワーク組織でも機能を発揮できると考えられる。
立ち上げの手順	H22：中核的企業等によるコンソーシアムの事業内容の検討（できれば、事務局体制の整備も含めて） H23：コンソーシアムの本格的立ち上げ

#### ④ 他地域との連携・協働

名称	全国森林都市サミット 他
目的	・浜松市が中核となって、全国の森林資源を活用した地域づくりを推進し意思を有する地域間のネットワークを形成し、先進地域の再生ノウハウの共有化、水平展開を図る。
内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的には、以下のような取り組みを行う。 <ul style="list-style-type: none"> <li>●全国森林都市サミット <ul style="list-style-type: none"> <li>・「まち・もりシンポ」に類するイベントを、地域もちまわりで開催。林業地間のネットワーク形成、再生ノウハウの共有。</li> <li>・なお、「森林都市」については、以下の注釈を参照のこと。</li> </ul> </li> <li>●協同によるマーケティング調査 <ul style="list-style-type: none"> <li>・全国（あるいは地方ブロック毎）の林業地の木材の流通エリア、流通手法等を調査し、協同での販路拡大手法を検討</li> </ul> </li> <li>●協同による人材養成、ネットワーク形成事業 <ul style="list-style-type: none"> <li>・全国（あるいは地方ブロック毎）の林業地が、林業地の将来を担う人材を協同で養成、また、交流によりネットワークを形成</li> </ul> </li> <li>●協同によるブランディング事業 <ul style="list-style-type: none"> <li>・全国（あるいは地方ブロック毎）の林業地のブランドイメージ、ブランド影響エリア等を調査し、協同でのブランド力向上手法を検討</li> </ul> </li> <li>●全国の林業地を紹介するテキスト、ガイドブック <ul style="list-style-type: none"> <li>・産業観光としての林業地巡りの可能性を検討した上で、各林業地の魅力や森林の特徴を、一般向けに分かりやすく紹介。森林環境教育の教材化も検討。</li> </ul> </li> </ul> </li> </ul>
運営体制	・地域もちまわりで開催
成立条件・課題	・関心を有する地域が一定数集まること
立ち上げの手順	H22：過去の全国森林サミット参加自治体への呼びかけ H23：全国森林都市サミットの開催

#### ※【参考】 森林都市について

平成2年から平成15年まで、毎年1回、全国の林業地を巡回する形で「全国森林サミット」が開催されていた。浜松市においては、旧天竜市がこのサミットに参加していた。

また、旧天竜市は平成6年12月に「森林都市宣言」も制定している。

今回開催した、まちもりシンポジウムでは、かつて行われていた「全国森林サミット」を再開する足がかりとすること、また、旧天竜市で制定された「森林都市宣言」を、浜松市がより進化させた形で継承するための第一歩とすることも目的の1つとしている。

<全国森林サミット>

(開催状況)

	年月日	開催地	テーマ
第1回	H2. 10. 19	大分県日田市	森林からのまちづくり
第2回	H3. 10. 20	静岡県天竜市	木材を活かした産業の育成
第3回	H4. 10. 18	愛媛県久万町	森林・木材・こだわりの町づくり
第4回	H5. 10. 31	奈良県吉野町	「森の幸・人の技・町の和」 流域に生きる森林の民の交流から
第5回	H6. 10. 10	山形県金山町	「今よみがえる、匠の技術・森林の価値
第6回	H7. 10. 8	岡山県勝山町	川上と川下・都市と山村・人と自然 3つの共生を求めて ”木材の町 勝山からの発信”
第7回	H8. 10. 20	和歌山県本宮町	森林はみんなの財産 都市と山村の新たな関係
第8回	H9. 10. 25	熊本県小国町	山村も時代の波に乗ろう
第9回	H10. 10. 7	大分県日田市	21世紀 豊かな水の森林づくり
第10回	H11. 10. 2	静岡県天竜市	21世紀へ！新たな森林環境づくり 「人と自然が共生する社会」
第11回	H12. 10. 16	愛媛県久万町	森林が育む新世紀 ～地域材の活用方策を考える～
第12回	H13. 10. 13	奈良県吉野町	
第13回	H14. 10. 5	山形県金山町	新たな森林づくりへの挑戦
第14回	H15. 10. 19	岡山県勝山町	新時代「山は勝つ」山々に笑いが訪れる日を願って

(参加自治体) 山形県金山町、奈良県吉野町、和歌山県新宮市・本宮町、岡山県勝山町  
愛媛県久万町、熊本県球摩村、熊本県小国町、大分県日田市

(現在の状況) 市町村合併の進行と林業不振等が急速に進んだことから、平成16年度以降一時休止している。

<森林都市宣言>

(宣言文)

私たちのまち天竜市は、森林（もり）と川そしてそれらを守りつづけてきた先人たちにより、長い歴史が刻まれてきました。

森林や川ではさまざまな生命が誕生し、豊かな文化が伝承されています。このかげかえのない大地の恵みを多くの人々とわかちあい次の世代へ確実に引き継がなくてはなりません。

私たち天竜市民は、この森林（もり）を誇りとして人と自然が共生する社会を目指し、ここに「森

林都市」を宣言します。

(基本目標)

- 1 森林（もり）の大切さを知る
- 2 豊かな森林（もり）を育てる
- 3 森林（もり）の恵みを生かす

## 4. 事業展開のプロセス

前節「3. 山村活性化に必要な機能」「3) 機能ごとの具体的な事業(案)」の各事業の立ち上げの手順については各事業の記載箇所で示した通りであるが、以下にこれらの事業全体についてどのように地域のコンセンサスを形成し、どのように推進していくべきかについて、概要を記す。

### 1) 短期(目安:平成22~23年) : 推進内容の検討

まず、山村住民だけでなく、都市部住民も含めた幅広い住民・事業者の参画を担保した形で、本調査で提案する強化方策の妥当性検討、具体化等を進めることが望ましい。

なお、これらの多様な主体による議論、検討は、平成19年度に策定された「浜松市森林・林業ビジョン」の評価・検証作業と併せて行い、必要があれば、「浜松市森林・林業ビジョン」の改訂等も検討することとすることが望ましい。

また、これらの検討成果は何らかの形で明文化し、平成22年3月6日に本調査の一環で開催された「まち・もりシンポ 都市(まち)×森林(もり)=∞(無限大)」に類するイベント等を通し広く市民に発信することが期待される。

また、市民の行動規範的な合意事項については、「まち・もりシンポ」の大会宣言として出された「森林都市へのメッセージ」を発展させたものとして「森林都市宣言」「森林都市 市民行動計画」等として取りまとめることが考えられる。「森林都市宣言」については、条例化も視野に入れる。

### 2) 中期(目安:平成23~24年) : 推進体制の構築

事業の展開内容が市民によりコンセンサスを得られたら、いよいよ具体的な取り組みに入る必要があるが、新たな分野での事業の推進を図るためには、新たな人材の関与が欠かせない。従来の事業を粛々と続けていくのであれば、従来の主体が進めていくことで問題はないが、新しい時代にあった森林管理、地域管理を進めるためには、従来の主体だけでは不十分である。

よって、前述の議論の段階から市内の関連活動企業・団体、キーパーソンの議論への参加、ネットワークづくりを進め、さらにそのネットワークを潜在活動主体も含む幅広い層に広げていくことで、将来的な事業推進体制の構築を目指す。

### 3) 長期(目安:平成24年~) : 事業の推進

幅広い主体の事業推進体制が構築されたら、事業を立ち上げ、推進段階となる。その際に留意すべき点としては、地域の既存事業の方向性を再点検し、社会情勢を踏まえて、転換・補強を図ること、森林・林業に留まらず、農業・建設業等、地域内外の多様な産業との連関を図っていくことが望まれる。



## 《参考》 取り組みを進める上で留意すべき点（委員会意見より）

### ●ボトムアップ型のビジョン形成、事業形成

- ・ 事例調査を行った智頭町、下川町では、ボトムアップ型で住民自らが知恵を出すという取組が実を結びつつある（別冊全国調査報告書参照）。かつて我が国では資源造成として、国がトップダウンで画一的に人工林を造った。そうして造られた森林は国の資源でもあるが、地域の資源でもある。資源造成ではなく資源活用の時代となった今では、地域の特性に応じた活用方策が求められ、ボトムアップ型の取組が必ず必要となる。
- ・ 森林計画制度には下から積み上げる森林施業計画と、トップダウン型の全国森林整備計画があるが、このボトムアップとトップダウンの両方が合流し、調整する所が市町村である。
- ・ ここに様々な利害が集約されると思うのだが、ステークホルダーが如何に自分の問題として作り上げていくかということについての方向性が示されると良いと思う。

### ●産業として成り立たないところを、誰がどのように負担していくのか

- ・ 森林が産業として成り立ちうる部分をアクティベートしていくことがまず必要であるが、一方でどうしても成り立たない部分が残ると思われる。成り立つ部分をいかに拡大するのか、成り立たない部分をいかに底上げするのか、その負担をどのように共有するのかを考えていく必要がある。
- ・ かつて人工林として造林した森林の中で、経済林か環境林かの区分を明確にする必要がある。その上で、採算が合わずに環境林にせざるを得ない部分については整備・管理のための公的資金を投入することについて、下流も含めて理解を得ていく。智頭町の百人委員会（別冊全国調査報告書参照）のような形で、市町村レベルでの森林整備計画を作って関心を高めてはどうかと思う。

### ●森林の公益的機能と多角的利用を明確に位置づけることで、資源のポテンシャルを高める

- ・ 林業の方向性について、並材を量産するコスト削減型林業を進めるのか、高付加価値型林業にするのか。日本の伝統的な林業はすべて後者のみだったが、今は両方を選べる時代になっていると思う。地域に高付加価値型の材を出せる力があるならば2本立てで棲み分けていくような戦略も取ることが可能である。森林セラピーやCO<sub>2</sub>吸収等、様々な森林の使い方をすることによって資源のポテンシャルを高めていくことが出来る。

### ●多様な主体の合意形成を図るためにコーディネーターの存在が重要

- ・ 新規参加者と里人の関係は必ずしもうまく行くわけではない。合意形成が特定の人たちの間で行われてきたことを、社会の中でどのように合意形成をとるのか。住民が、自分たちの地域であるという意識をどう共有できるのかということを見ると、コーディネーターのような人が必要になってくる。森林においても重要なことだと実感している。
- ・ 今後は、週末は都市に居住し、週末は地方で余暇を過ごす、あるいは複数の拠点で働くといっ

たライフスタイル、いわゆる「Sターン」が重要になってくると考えられるので、新規参入者と里人の関係のあり方も見直しが必要だと思う。そこに定住する人たちだけが担い手ということではなく、担い手が多様化することは危機管理の上では非常に重要である。地域住民が新しい人たちに対する受入体制を作っていく際に、行政など様々な主体との協働が重要になってくると思う。危機意識をどのように共有するかということを考える必要があると感じている。様々な人たちを繋ぐネットワークの役割を担う人が地域に複数いることが大事であると実感している。

●個々の事業体や地域でできないこと、非効率なところは、積極的に広域連携、主体間連携を図る

- 川下側の木材販売の担い手が新たに必要ではないかと考えている。欲しい人（需要者）とものを結ぶ役割が不在である。今までそれを市場が担っていたが、高コストであったため、低コストでできる方法を新たに構築する必要がある。流通を低コスト化させる手段がITではないかと考えている。どの山にどのような木があるかがわかるような、物流管理システムを作れば、市場まで運ぶコストが掛からなくなり、市場に変わる安定供給体制になり得る。
- 広域的研修システムを作るべきであると考えている。地域に昔からあった研修システムは今無くなってしまった。また、個々の組合や事業体では人材育成を十分に行うことは難しいので、集合体として行う必要がある。

## 第5章 シンポジウムの開催

### 1) 開催概要

本調査の成果報告会として、市民向けのシンポジウムを開催した。タイトル、日時、目的等の概要は以下の通りである。

#### ① タイトル

まち・もりシンポ「都市(まち)×森林(もり)=∞ (無限大)」  
～ 浜松から発信!! 新たな森林都市のカタチ ～

#### ② 開催日時・場所等

平成22年3月6日(土) 13:30～16:30  
天竜壬生ホール(浜松市天竜区 最大500人収容)

#### ③ 主催・後援等

<主催> 浜松市 <後援> 林野庁、静岡県

#### ④ 開催目的

浜松市は、平成17年の広域合併により、市域の68%を森林が占める「森林都市」になった。しかし、その一方で、かつて「三大人工美林」で知られた天竜林業は木材価格の下落等により生産活動が停滞、山間部では過疎化、高齢化が進行している。

こうした林業・山村の現状を打破し、森林のもつ多面的機能を将来にわたって持続的に発揮させていくためには、市の人口の90%以上を占める都市部住民(旧浜松市住民等)の、地域の森林や地域の木材に対する関心・理解を高め、地域材の購入や林業への新規就業に繋げる必要がある。

こうした状況を踏まえ、本シンポジウムでは、あまり森林や林業に馴染みの無い都市部の市民を主な対象とし、さらには山村部の住民にも参加を仰ぎ、双方にとってのメリットを明確にして、森林や山村、そして林業の魅力を発信することを目指す。

#### ⑤ プログラム構成

～ 13:30 「みんなで考える森のチカラ」コーナーの質問・意見エントリー

13:30～13:45 開会(市長あいさつ・来賓あいさつ)

13:45～15:30 「マナビの時間1 賢人から学ぼう！」

トークセッション(速見亨氏×三浦しをん氏)

14:30～14:45 「休憩」・「みんなで考える森のチカラ」コーナーの質問・意見エントリー

13:45～15:30 「マナビの時間2 自分のまちの森林を知ろう！」

仲間の自治体から学ぼう！」

浜松市 農林水産部長 村田和彦氏

智頭町 町長 寺谷誠一郎氏

東京大学講師 蔵治光一郎氏

15:30 ~ 15:35	「休憩」
15:35 ~ 16:20	バーチャルワークショップ「みんなで考える森のチカラ」
16:20 ~ 16:30	「大会宣言」
16:30	閉会

#### <出演者プロフィール>

##### ◆マナビの時間1

三浦しをん（みうら・しをん）氏

作家。東京都生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。2006年「まほろ駅前多田便利軒」で135回直木賞受賞。2009年、箱根駅伝をテーマにした小説「風が強く吹いている」が映画化。同年「神去なあなあ日常」を発表。この作品では、都会の青年が林業に従事する姿を通して、その内情や文化、魅力をテンポ良く明るく表現している。

速水亨（はやみ・とおる）氏

林業家。慶應義塾大学法学部政治学科卒業後、三重県で家業の林業に従事。速水林業代表。2000年日本で初めて世界的な持続可能な森林経営に対する認証であるFSC認証を取得したフロントランナー。講演・著書など多数。日本林業経営者協会会長も務め、TV「カンブリア宮殿」にも出演。今、最も注目を浴びる森林経営者である。

##### ◆マナビの時間2

寺谷誠一郎（てらたに・せいいちろう）氏

鳥取県智頭（ちづ）町長。1943年生まれ、成城大学経済学部卒。鳥取青年会議所理事長、智頭町教育委員、智頭町森林組合理事などを歴任。国土交通省観光カリスマ、内閣府地域活性化伝道師に選定される。

蔵治光一郎（くらじ・こういちろう）氏

東京大学愛知演習林講師。1965年生まれ。東京大学農学部林学科卒業後、青年海外協力隊員として2年間ボルネオ島（マレーシア）にて熱帯雨林の研究に従事。東京大学千葉演習林助手を経て、2001年東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林講師に就任。専門は「森と水の科学」「森と水と人のかかわり」。矢作川森の研究者グループの共同代表として「矢作川森の健康診断」の運営に関わっている。編著書に「緑のダム」、「森の健康診断」（築地書館）、「森林認証・地域材認証と森林管理・木材利用」、「森林環境税は森を救えるか」（東京大学演習林出版会）など多数。

##### ◆司会

大和田順子（おおわだ・じゅんこ）氏

社団法人ロハス・ビジネス・アライアンス共同代表、立教大学兼任講師。東急百貨店、東急総合研究所、ザ・ボディショップ、イースクエア等を経て2006年4月に独立。持続可能な社会の実現に向け、講演・研修や執筆を通し社会の変革に情熱を注いでいる。2002年日本経済新聞等で日本に初めてLOHASを紹介。「日本をLOHASに変える30の方法」（講談社）など著書多数。

⑥ 来場者数

約 550 名

## 2) 開催結果

### (1) 「みんなで考える森のチカラ」コーナーの質問・意見エントリー

本シンポジウムは、来場者の森林・林業・山村に対する意識を高め、主体的な行動を促すきっかけとすべく、来場者が参加できる仕組みを取り入れた。

まず、開会前に会場ホワイエにて、「みんなで考える森のチカラ」コーナーを設置し、以下の質問に対する意見や、来場者から講演者等への質問を受け付けた。



参加受付の様子①



参加受付の様子②



ホワイエの様子（住居る事業のブース出展）



ホワイエの様子（TENKOMORIのブース出展）

**【来場者への質問】** あなたの考える「森のチカラ」ベスト3を教えてください。

**【来場者からの質問】** 森のチカラって何？ アドバイザーに聞きたいこと。

まず、来場者の考える「森のチカラ」について、右の項目から上位3項目について、参加者に模造紙の所定欄にシールを貼ってもらった。

シールは、『まち』の人（まちに住んでいる方、まち/都会が好きな方等）、『やま』の人（林業関係の方、山が好きな方等）に分けて貼ってもらうことで、都市住民と山村住民の意識の共通点・相違点等の抽出を試した。

次に、講演者等への質問を付箋に書いてもらい、模造紙に貼り付けてもらった。

なお、このコーナーでは、写真に示すように、沢山のエントリーが得られた。これらの結果は、パネルディスカッション「みんなで考える森のチカラ」での議論の材料とした。

あなたの考える「森のチカラ」選択項目

- ①地球温暖化を防ぐ
- ②きれいな水をつくる
- ③家やビルをつくる木材
- ④野生動物や昆虫のすみか
- ⑤洪水や土砂崩れを防ぐ
- ⑥人々に癒しや安らぎを与える
- ⑦子どもや大人の遊び場所
- ⑧環境や暮らしを考える場所
- ⑨キノコや山菜がある



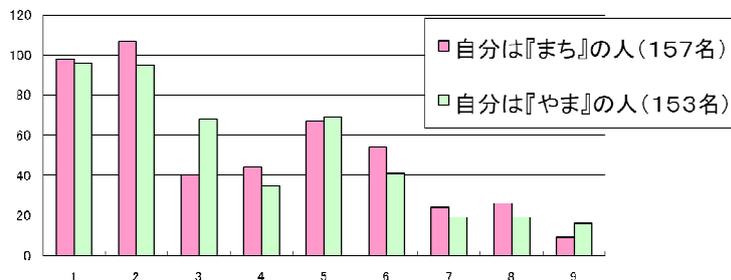
エントリーの様子①



エントリーの様子②

なお、来場者への質問「あなたの考える「森のチカラ」」の投票結果は以下の通りであった。

みんなで考える森のチカラ



- 1.地球温暖化を防ぐ
- 2.きれいな水をつくる
- 3.家やビルをつくる木材
- 4.野生動物や昆虫のすみか
- 5.洪水や土砂崩れを防ぐ
- 6.人々に癒しや安らぎを与える
- 7.子供や大人の遊び場
- 8.環境や暮らしを考える場所
- 9.キノコや山菜がある

## (2) 開会

まず、開会にあたり、主催者を代表し、浜松市・鈴木康友市長より開会の挨拶を頂いた。挨拶の趣旨は以下の通りであった。

- ・ 浜松は 12 市町村が合併し、全国で 2 番目に大きな市域を持つ市になった。山間部から、そして都市部まで、日本の中にあるあらゆる特徴を持った地域が、この浜松に凝縮をされている。
- ・ 今度、縮図型政令指定都市と呼ばれている。その中でも特に市域の 68%を占めるこの森林の活用と活性化というものが、浜松の活性化にも大変重要であるという課題を我々は抱えている。
- ・ 本シンポジウムのテーマは、まち側からの視点で、森を再認識しようということと、山側からまちにもっともっといろいろな情報提供したり、いろいろな教示をしていこうと。この双方の交流によって、山村を活性化していこうというメッセージを発信することである。
- ・ 浜松市では、平成 22 年 3 月 3 日に、この浜松の森林の約 1 万 8,000 ヘクタールの森林が、FSC 認証という世界的な森林認証の取得をすることができた。今後、FSC のラベルが貼られた木材がこれから市場に出て行くことになる。環境に配慮した地域の森林の資源を活用して、もっともっと浜松の持つ森林の価値を深めていくことができたらと考えている。
- ・ このシンポジウムが新たな浜松の活性化に向けた第一歩となることを心から期待している。

続いて、来賓を代表し、林野庁・島田泰助長官より挨拶を頂いた。挨拶の趣旨は以下の通りであった。

- ・ 今年は国際生物多様性年、来年は国際森林年である。世界中が今森林に対しても大きな関心を持ち始めてきている。世界では、森林減少が大きな課題となっているが、日本では、森林の蓄積が増え、手入れ不足が問題になっている。手入れをしていかないこと自体で森の元気がなくなっている。手入れをし、木材を活用することが、日本の森林の大きな課題となっている。
- ・ 農林水産省では、平成 21 年 12 月に、森林・林業再生プランを発表し、木材自給率を今の 24%から、10 年後には 50%以上に向上させる目標を出した。
- ・ 本プランの最初の具体的施策ということで、国会で、公共施設における木材利用の促進を図る法案を審議している。基本的には国が抱えている公共施設について、木造化ができるものは、もうすべて木造化をしていこう、木造化ができないような高層の建物等については、内装等木材を使えるところについては木材を使っていくことを促進するような内容である。
- ・ 国は、率先して国産材利用を進めるので、地方公共団体や、民間団体でも、このような地域材利用の取り組みを進めてもらいたい。
- ・ 日本の近代化は木造をコンクリート化することで行われてきたと言われているが、今、こ

の環境の時代の中で、そうした流れを変えて、もう一度、コンクリートの建物を木造に戻していきたいというのが我々の大きな目的である。

- ・日本の森林・林業を元気にして再生をしていくことは、環境問題だけではなくて、地域の経済の活性化という面からも大きな課題である。それを本当に実現していくためには、今日ここにお集まりいただいているような皆様方の後押し、理解がなければ、達成していくことはできない。ぜひ皆様のご支援をお願いしたい。



会場の様子①



会場の様子②

### (3)「マナビの時間1 賢人から学ぼう！」

続いて、「マナビの時間1 賢人から学ぼう！」として、作家の三浦しをん氏と林業家の速水亨氏によるトークショーを行った。トークショーの主な内容は以下の通りであった。

#### ○林業の魅力について

- ・【速水氏】愛情を持って、面と向かって森林を管理していくと、山の顔が変わってくる。必ず管理によって山の姿が変わってくる。その成果というのは、絵を描くような感じだと思う。作品をつくるような感じで楽しめる。そう考えると、林業家は、芸術家と多分同じような気持ちが持てる職業なのではないか。
- ・【三浦氏】取材で訪れた尾鷲の山がとても美しかった。それを見て、「ああ、熱心に働いている方がいらっしゃる山というのは、こういうふうになっているんだな」というのが、初めてわかった。大体、あんまり手入れが行き届いていない山を目にするほうが、どうしても多いので、とても新鮮だった。
- ・【三浦氏】取材で話を伺った山で働いている人たちが非常におもしろい方たちだった。仕事では、チームで動いていらっしゃるからなのか、非常にコミュニケーション能力の高い人たちだなという印象。初対面なのに、冗談を振ってくるし、どこまで本気なのかよくわからないことをいろいろおっしゃる。そういうのがとても楽しかった。
- ・【速水氏】林業というのは、山の中へ入ると、監督がいない作業現場。チームでやるので、完全に一人ということはないが、そのチーム自体を管理する本当の意味での監督というの

は現場にはいない。だから、自分たちの裁量の中で、どんどん仕事をしていかなければいけない、ある程度、意思決定が一致していないと、危険なこともある。

- ・ **【速水氏】** そのように、常に命をかけているようなところがあるから、やはりお互いに命を預け合っている仲間みたいところがある。なので、コミュニケーション能力が重要である。会話ができない人は、山ですごく使いにくい。だから、それは逆に、そういう人たちが山からどうしても残れないということにもつながっているかもしれない。

#### ○山村との関わりについて

- ・ **【三浦氏】** 小説では主人公が徐々に村に馴染んでいく、村の人に受け入れられていく様子を描いているが、実際にいきなりよそから行って暮らすことは、難しいことがたくさんあるんだろうなというふうに思っている。でも、外から行った人もそれを受け入れる側の人も、いろいろ感覚や考え方の違いがありつつ、それはそういうものだとして緩やかに受けとめて、何となく時間がたっていくうちに、「あれ。気づいたら、うまくいっていた」という感じが理想だろう。
- ・ **【速水氏】** 宮川村というところでも森林管理を任されているが、そこに1人、都会から責任者を入れている。彼に言ったのは、自分の家の入り口にだれがくれたのかわからない野菜が置かれているようになったら、その地域で好かれている証拠だと言っている。そして、その野菜を見ながら、だれがつくった野菜かがわかるように努力をしようと。次、どこかで会ったら、その人に、「あの野菜はおいしかった」と言ってみると。野菜が全然置かれなかったら、やっぱり地域の中に溶け込めていないんだから、どこか改善すべき点があるんだと。私が求める君の仕事は、まずは地域に溶け込むことだ。君の仕事の一つだと言って、言い聞かせている。

#### ○林業の現状について

- ・ **【速水氏】** 今の日本の森林の状況というのは、資源的に言えば最高の状態だと思う。ところが、それを経済財として利用していく仕組みとが、残念ながら、どこかでうまくいかなかった。だから今後、それをどう使っていくかを考えていかなければならない。ただ、木材自給率というのは分母と分子の話なので、全体の使用量が減っても上がる。そういう意味では、木材全体の需要をふやしながらか、その中で国産材がふえていくということが大事。内装材や、バイオマス利用だとか、あるいは紙にどんどん使っていくような、新しい木材の使い方をどんどん考えていかなければならない。
- ・ **【三浦氏】** 結局木が売れなかったら、山を持っている人は、せっかく手入れしても何の意味もない、何のうま味もないということになってしまう。補助金制度なども使って、山仕事で働いている方たちの技術に報いるということは当然必要だし、そうしていかないと人材が育っていかない。しかし、じゃあ、そうやって一生懸命手入れをしていった山の木を、どうやって売るか。そこは、商売というものが重要になってくる。

○森林の多様な価値、多角的利用について

- ・ 【速水氏】 森林の多角的利用については大賛成である。20 数年前にドイツへ行き、ドイツの林業経済の有名な先生と一緒に、その方が管理している山を歩いた。森の中に小さな湖があって、周りにキャンプ場があった。先生は歩きながら「速水、日本でもドイツでも、林業というのは木材を生産して売るのが商売だ。でもね、このキャンプ場から、私はこの山の年間の売り上げの半分を確保しているんだ。ひょっとしたら商売は日本もドイツも木だけじゃなくて、山の全体の価値をお金にかえるのが林業経営の主になるのかもしれないね」とおっしゃっていた。木材生産だけではない、森林全体の価値を有価に変えていくというのが林業経営だという発想が大切だと考えている。また、その手法をみんなで考え出すだけでなく、そのリターンが山側に返るといいう仕組みも作らなくてはならない。
- ・ 【三浦氏】 山の中を歩いて見させてもらうだけで、やっぱりウキウキしてくるし、すがすがしい気持ちになった。自分の頭が接していない世界へ行くと、やはり脳が活発に動くというか、好奇心が刺激され、何か感受するということがある。「何だ、これ？」という驚きや喜びがあったほうが、当然体にもいいと思う。うつつと毎日、同じことを会社とかの中で、ビルの中でやっているよりは。会社の研修や学校の社会体験、職業体験の授業などでも、積極的に山に行くと良いだろう。



トークショーの様子①



トークショーの様子②

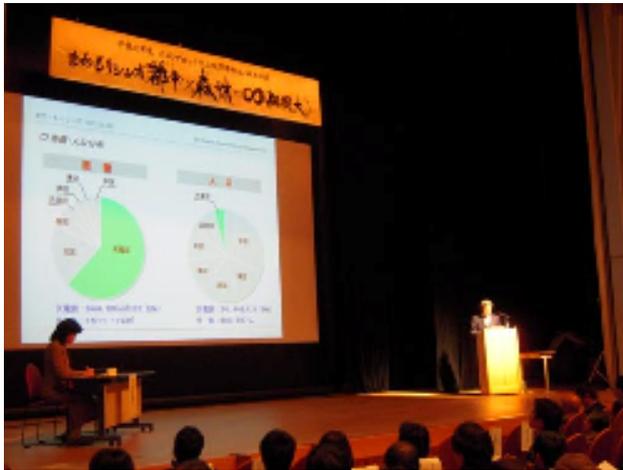
#### (4)「マナビの時間2 自分のまちの森林を知ろう！ 仲間の自治体から学ぼう！」

続いて、「マナビの時間2 自分のまちの森林を知ろう！ 仲間の自治体から学ぼう」では、浜松市を代表しての農林水産部長・村田和彦氏、仲間の自治体を代表して、鳥取県智頭町町長の寺谷誠一郎氏、東京大学講師の蔵治光一郎氏より、それぞれの活動についてプレゼンテーションして頂いた。各講演者の主な講演内容は以下の通りであった。

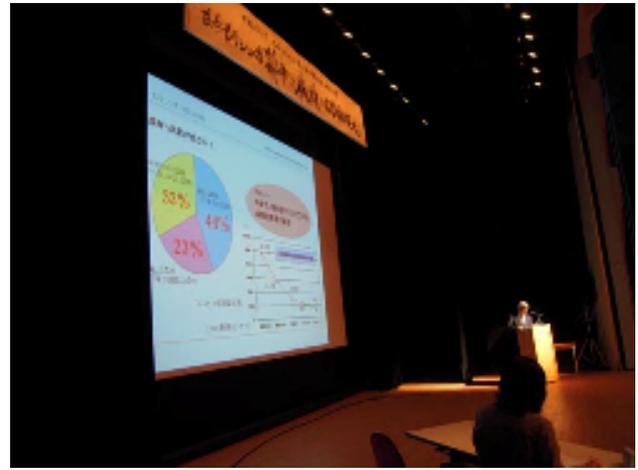
##### ① 浜松市 農林水産部長 村田和彦氏 講演

- ・市が南は遠州灘、北は長野県に接し、南アルプス、天竜川、浜名湖、遠州灘など、川、海、山に恵まれており、年間を通じて大変温暖な気候の都市である。市域の面積は1,511km<sup>2</sup>、森林が1,028km<sup>2</sup>と大変広く、森林率は、日本の68%とほぼ同じで、国土縮図型の政令指定都市である
- ・この広大な森林のうち、荒廃もしくは荒廃のおそれのある森林、すなわち整備を要する森林が既に50%を超えている状況であり、これらを管理するための、林業の担い手が十分でないことが問題となっている。
- ・林業従業者は減少傾向にあり、県内の従業者数の推移をみると、40年前の8分の1程度になっている。本日、ホワイエで若手林業家の皆様が色々と協力してくださっているが、そういった新しい担い手の活躍に期待している。
- ・平成17年に浜松市は広域で合併をした。広大な森林を抱えることになった市が最初にやったことは、浜松市森林・林業ビジョンを策定することだった。策定に当たっては、森林の多面的な価値を高めて、その価値ある森林を次世代に継承することを目標と掲げ、30年後の森林像を考え、そこへ至る戦略や方針を定めた。
- ・その最優先した仕組みづくりで取り組んだものが、FSCの森林認証の取得である。森林認証とは、森林が適切に管理されていることを、第三者機関が基準に沿って認証する。そして適正に管理された森林から出た木材等をラベリングし、持続的な森林経営に寄与させる制度。
- ・平成22年3月3日に、市内1万8,000haの森林が認証を無事取得した。長期的には、5万4,000ヘクタールの取得を目指している。
- ・また、今年度は、広域ブロック自立施策等推進調査を活用し、本市をモデル地区として林野庁、国土交通省、文部科学省、総務省、4省の協力を得て、森林・林業ビジョンの具現化方策を検討している。今回のシンポジウムもその一環として開催しているものである
- ・内容については現在議論しているところであるが、コンセプトとして、「森林都市・浜松～まちからつくる新たな林業～」ということで、まち視点で新たな林業を形づくることを考えている。具体的には、生産力は、育てる林業から売る林業へ。そして、売れる林業への進化を。雇用力では、閉じた林業から、まちから多様な人材を受け入れる開かれた林業へ。山村地域の力、すなわち地域力では、山に住んで営む林業から、まちから通う林業へ。教育の視点では、情操教育、生涯学習を含め、まちの子供も親しめる森林・林業を目指すこととしている。

- ・ 今後も、森林・林業ビジョンの理念である「価値ある森林の共創」ということを実現化させていきたいと考えている。



村田氏の講演の様子①



村田氏の講演の様子②

## ② 智頭町 町長 寺谷誠一郎氏 講演

- ・ 鳥取県智頭町は、「緑の風が吹く疎開の町、智頭」をテーマにしたまちづくりを進めている。ここで言う「疎開」というのは、別に戦争から逃げてくるわけではない。今、ストレスを受けて、疲れた都市住民が多くなってきている。そうしたストレスの多い都市からエスケープしてくるという意味である。そうした町が日本に一つぐらいあってもいいんじゃないかということである。
- ・ 智頭町は、かつて林業で栄えた町であり、景気の良いときは町の山主たちは自分の山を自慢しあったが、景気が悪くなって材価が下がってくると、山に見向きもしなくなって、下を向くようになった。横を向くと、まだ山が見える。もう下を向いていようということである。そういう悲惨な状態である。そして、山を持っている人たちは、山に入らなくなってきた。そうして、間伐等の手入れをしなくなって、山が荒れてきて、さらに木が売れなくなるという悪循環が起こっている。
- ・ これではいけないと、みんなでもう一回この町を磨こうじゃないかということで様々な取り組みを始めた。
- ・ まず手がけたのが、森林セラピーである。本町には町立の病院があるが、なかなか経営が苦しい状態。そういう中で、近々京阪神から鳥取市に向けて高速道路がつき、智頭にもインターチェンジがつくことになった。これで、京阪神からのアクセスが格段に良くなる。そこで、都会の方に智頭に来てもらって、病院でまず検査して、そして森に入ってもらおうというものである。ただ、森に入って、「ああ、気持ちよかった。さようなら」では、得るものがないということで、今度は集落に民泊してもらおうというアイデアも出てきている。
- ・ また、「森のようちえん」という取り組みも始まっている。これは東京から来た若いお嫁さんが「百人委員会」という住民発意の政策立案の場で、「智頭町ってすばらしいですね。

こんなに山に囲まれて、智頭の町民は幸せだ。私はこんなところで子供を育ててみたい。森の中で幼稚園をしてはどうか」と提案したのが、発端になっている。その後、彼女が中心になって、都会や地域の子どもたちを毎日森に連れて行って遊ばせる「森のようちえん」が開園した。

- 最近、都会から「森のようちえん」に子どもをつれて生きている若いお父さん、お母さんの中から、もう子供たちを智頭町に住まわせて、この自然の中で教育をしたいという方も出始めている。
- こういった取り組みは、森という大きな日本の宝物を、それぞれの地域でどう活用するかということでやっている取り組みである。地域によって利用方法は異なるだろう。智頭町では、まずは癒しから入っている。癒しから入って、山にみんなが目を向いた段階で、少しずつ林道を入れたり、作業道を入れて、材価がよくなったときには、すぐに材を出せるような、そういう仕組みを今から作っていかうとしている。
- 実際、「森のようちえん」を始めて、子供たちが山に入り始めた途端に、町民の視線が山に向かい始めた。今まで下を向いて、山なんてもう要らないと言っていた人が、子供たちが山に入ることによって、グルッと山に目を向けるようになった。
- 坂本竜馬が27歳のときに「日本という国を洗濯せねばならない」と言ったそうであるが、日本の国土もやはり、間伐をしたり、道をつけたりすることで、風通しが良いものにならなければならない。人間が犯した罪は、間がもう一回、もとに戻さなきゃいかん。
- 今回紹介した取り組みは、小さな智頭町が地球環境のためにできることの最初のスタートである。ぜひ浜松の皆さんとも協力してやっていきたい。



寺谷氏の講演の様子①



村田氏の講演の様子②

### ③ 東京大学講師 蔵治光一郎氏 講演

- ・全国的に市町村の合併が進められてきたが、それによって広大な森林を抱える市が、浜松市も含め全国に出現している。そこで話題となるのは、産業の観点から都市と森林、あるいは農山村の共存・共栄、あるいは協働というのはどういうふうにしていくべきかということや、防災、水資源の観点から、都市の安心・安全は上流の森林に依存しているので、森林を整備していかなければならないということである。そういった議論の中で、意識の高い市町村が独自に森づくりビジョン、あるいは構想、条例、計画といったものを策定する事例が出現してきた。今回紹介する愛知県豊田市もその一つである。
- ・豊田市では、2000年に、市中を流れる矢作川の上流で百年に一度と言われる程の大雨、東海豪雨があり、上流の森林の崩壊が起きた。ここで根こそぎ倒れた木は、下流にある矢作ダムに流れこんだ。この流木の量は約3万5,000m<sup>3</sup>で、毎年平均で出てくる流木の量の60年分にも上る。また、その78%は崩壊した人工林から出たスギであったということも調査されている。
- ・こうした教訓から、豊田市では安心・安全の都市づくりには、上流の森林整備が欠かせないという認識が生まれ、2005年の市町村合併を契機に、森林整備のための構想や条例を作ろうという動きが始まった。
- ・その一方で、市民の動きとしましては、「矢作川森林（もり）の健康診断」というのを、やはり東海豪雨がきっかけとなって、2005年より開始されている。具体的に何をやっているかということ、矢作川の流域、長野県から岐阜県まで及ぶ流域全体の森林に実際に市民が立ち入って、その健康状態を調べていくというものである。これまで1,270人の市民が森に入り、森林の健康度を測定している。その結果、6~7割の森林は不健康な森林で間伐が必要であるというふうに診断されている。
- ・現在、豊田市長は森林都市ということを宣言されているが、以上に示したような東海豪雨による森林の災害と、市民による自発的な健康診断がなされたことが背景にあると言える。
- ・豊田市が行政として何をやってきたかということであるが、まず条例をつくり、基本理念を明確にし、構想として100年先を見据えた方向性及び20年間の基本施策を示しています。ここでは、最重要課題は人工林の間伐の促進であり、それが持続可能な森づくり、都市づくりに欠かせないという認識がある。
- ・これらの構想等のエッセンスを説明する。現在ある3万haの人工林のうち、2万haは間伐が必要な過密人工林である。これを20年間で一通り間伐をして健全な人工林にしていく。最終的に100年後には、一部の林業不適地に立地する人工林については天然林に戻していくというようなことになっている。なお、これを実現するためには、現在の間伐のペースを約2倍に上げなければいけないという計画になっている。
- ・ここでやはり団地化や集約化ということが必要になってくるということで、豊田市では団地化推進プロジェクトというものを始めた。ここでは概ね旧大字あるいは町の単位で森づくり会議というものを設立し、その会議の中で団地設定というのをしている。
- ・現在、57会議が設立されており、これが徐々に増えていく。そして、会議の中で48団地

が既にできており、その面積は 723ha となっている。



蔵治氏の講演の様子①



蔵治氏の講演の様子②

#### (5) バーチャルワークショップ「みんなで考える森のチカラ」

続いて、バーチャルワークショップ「みんなで考える森のチカラ」と題し、速水氏、寺谷氏、蔵治氏、浜松市長によるパネルディスカッションを行った。ここでは、開会前に「みんなで考える森のチカラ」コーナーで募った質問や意見に対してパネラーにコメントして頂く形で進めた。主なディスカッション内容は以下の通りである。

##### ○「みんなで考える森のチカラ」の投票結果について

- **【司会】**「地球温暖化を防ぐ」、「きれいな水をつくる」、「洪水や土砂崩れを防ぐ」と言った項目が多く票を集めた。
- **【鈴木市長】**これはまさに時代状況をよく反映をしているという感じがする。やはり環境問題に多くの市民が関心を持っているということである。行政としては、こういった森林の公益的機能をいかに持続可能に維持をしていくかということが大きな課題であると認識した。
- **【速水氏】**地球温暖化の問題にしましても、きれいな水にしても、もう少し視野を広くしてみると違う事実が見えてくる。海外には、本当に生きるか死ぬかの水というものを森から得ている人々がいる。そういう人達の水を育む森を傷めつけながら、日本人が木を使っているということも認めなければならない。私はやはり日本は、今ある国内の森林を、地域の森林を有効に利用することが、地球環境を守っていくという意識を持つ必要がある。そこまで考えないと、このアンケートの結果を非常に浅く捉えてしまうことになる。FSCというのは、本来、そういうものである。
- **【速水氏】**FSCというのは、自分たちの森を良くしようという独善的なものではなく、自分たちの森を管理することで地球全体をどう変えていこうか、あるいは、地球全体の人権をどう守っていくか。そのような発想に基づくものである。浜松市は FSC をせっかく取得したのだから、自分たちの森だけでなく、世界の森のことも考えていかないといけない。

○来場者からの質問「林業の先進国、先進地はどこですか」

- ・ **【蔵治氏】** 日本を除くほとんどの国の林業というのは、基本的に環境破壊的産業だと見なされていることが多い。自然保護 NGO や、環境団体からは、林業というのは基本的に敵視されている。それが外国の基本的な現状で、外国のどの林業会社も、自分達が一生懸命環境に配慮してやっていることをアピールしなければいけない状況に置かれている。
- ・ 一方、日本の林業が環境破壊的だということは、これまでほとんど言われたことがなく、むしろ、林業をきちんとやるのが洪水の防止や土砂崩れの防止等の公益的機能が確保できるというのが基本的な発想だった
- ・ 実は持続可能な林業というような概念を考えた場合、日本の林業というのは、もしかしたら最先端だったのかもしれないと言える。一方で、もし日本の林業をグローバルゼーションの中で、世界との競争の中で展開していくような話になった場合には、他の国の林業と同じような状況を覚悟しなければならないことも想定される。経済性と公益性のバランスをうまくとっていかなければならない。

○来場者からの質問「地元の木材を使うと、なぜ地球温暖化防止になるんですか」

- ・ **【蔵治氏】** 地球温暖化がなぜ起きたのかを考えると、その根本的には、やはりライフスタイルが劇的に変わったことだと思う。私は、地球温暖化を本気で防止するのであれば、世界中のあらゆる人たちがライフスタイルを、便利であればいい、安ければいいと言ったライフスタイルではなくて、もっと地域、地元のことを大事にするとしたライフスタイルに、戻していくことが必要である。そして、その一つのシンボルとして、地産地消と言った観点から日本の木を使うということがあっても良いだろう。地球温暖化問題はこのように理解すべきで、1本の木に入っている CO2 が何トンでというような細かいことはあまり考えなくても良いのではと思う。

○来場者からの質問「森のようちえんの安全確保はどのようにしていますか」

- ・ **【寺谷氏】** 地元の老人から、「おれはな、何十年もこの地域にいて、どこにマムシがいて、どこにマムシがいないかがわかっている。だから、子供が来るときには、マムシを駆除しておいてあげる。」「子どもが歩く道のそばの杉の根元が腐っておった。腐った杉を切って、きれいにいわゆる橋を直しておいてやったぞ」と言ったような申し出をもらっている。このように地域ぐるみで子ども安全が守られている。また、子供というのは、見ていると、「危ない！」と思っても、結構、自分で防御するので心配しすぎないほうがよい。

○会場からの質問「正直なところ、市長にとって森林は宝物ですか。それとも、お荷物ですか。教えてください」

- ・ **【鈴木氏】** 私は最近、色々なところで、「山は浜松市にとって宝物だ」と言っているが、半分は私の本音であり、半分は希望である。
- ・ 環境面から森林をみると、二酸化炭素の吸収源と言った地球環境の観点、あるいは水を浄化する、水源を涵養するといった国土保全の観点から見直されている。そういう非常に豊

かな森林資源が浜松にあるというのは、本音として宝物であると考えている。

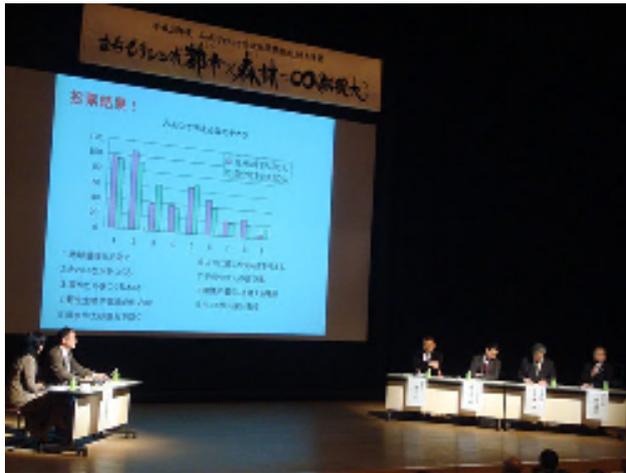
- ・ また、経済の面からみても、長期的に見れば、私は必ず林業というのは成り立ちうるのではないかという希望を持っている。世界的な木材需要と供給の動向を見ても、いずれやはり国産材というのは、必ず商売になってくるだろうなど。これは願いを込めて、そう思っている。そういう2つの大きな視点から言うと、私はやはり、この浜松の森林というのは宝物じゃないかと思っている。

#### ○来場者からの質問「林業を活性化するために都市住民ができることは何ですか」

- ・ **【速水氏】** 都市住民ができることは、2つあると思う。1つは、機会があるたびに森林に入って頂くことである。日本人は、森林を外から見ることに慣れているが、中に入って森林の変化を知るということは非常に大事である。外から見たら緑でも、実は中に入るとさまざまな状況の変化がある。山側主体も、都市住民が入りやすい山の育て方やアクセスの方法も考える必要がある。
- ・ もう1つは、やはり何はともあれ、木を使って、使うときに、この木はどこから来た木なのか、どんな山で切られた木なのかというのを聞き続けることである。今は答えが返ってこないかもしれないが、消費者が変わっていけば、いつか生産者も変わっていくだろう。それが大きな波をつくり出すんだらうというふうに思っている

#### ○島田長官よりコメント

- ・ 先ほど蔵治先生から、日本は世界の中で林業先進地だったのではないかという話があったが、私も実はそうじゃないかなと思っている。
- ・ 今年は生物多様性の年だが、日本の里山のシステムというのは非常にうまくできていて、山とそこで生活している人たちが非常にいい関係で、共存していた。今、もう一回、そのようなシステムを再構築ができないかということが、大きな課題になっていると感じている。
- ・ 日本の林業も、以前のままで、もう一回復活するわけではなくて、もう一回この社会の追い風を活かして、都会の人たちには木材を使ってもらい、山の人たちはそこに本当に使いやすいような木材を出していけるようなシステムを使っていけば、このシンポジウムのテーマ「都市(まち)×森林(もり)=∞ (無限大)」の通り、まちと森が結びついて無限の可能性を引き出していくことができるのではないか。



バーチャル・ワークショップの様子①



バーチャル・ワークショップの様子②



バーチャル・ワークショップの様子③



林野庁島田長官による講評

## (6) 大会宣言

続いて、浜松市の児童を中心とした劇団によるミュージカル『森のてんぐ屋さん』が公演された。なお、ミュージカルの内容や本シンポジウムでの発表の経緯は、以下の通りである。

浜松市では、次の時代を担う子供たちに、森林の大切さを伝えるとともに、豊かな自然に恵まれた浜松市を PR するため、森林のまち童話大賞という森をテーマにした童話の公募事業を実施してきた。平成 21 年に第 3 回を行い、全国各地から 676 作品の応募があり、10 月 4 日には、森林のまち童話大賞の表彰式で、浜松市中区の仲井英之さんの作品、『森のてんぐ屋さん』が大賞に選ばれた。

『森のてんぐ屋さん』は、題名が、『へーい、まいど！ てんぐやです』となり、現在、全国の書店で発売されているが、この童話により森林の大切さをもっと多くの人に知ってもらうことができないかと考え、童話『森のてんぐ屋さん』からミュージカルを創作した。そのミュージカルは、昨年、はままつフラワーパークで開演され、好評を博した。

このミュージカルのテーマでもある、「知ろう・伝えよう 森とともに生きるすべを」が、「都市(まち)×森林(もり)=∞ (無限大)」に通ずるものがあると考え、本シンポジウムで公演されることとなった。



ミュージカルの様子①



ミュージカルの様子②



ミュージカルの様子③



ミュージカルの様子④

そして、シンポジウムのフィナーレとして、浜松市の林業者、都市住民、NPO、市長による大会宣言（メッセージ）が発表された。メッセージの内容は、以下の通りである。

**児童：**

「私たちの住む浜松市には、たくさんの人が集う大きなショッピングセンターなど、日々の生活にとっても便利なところがあります。」

**児童：**

「そして、もう一方、浜松には山があり、海があり、天竜川があります。」

**児童：**

「町も森も大きな1つの浜松です。」

**児童：**

「森の恵みが、川の恵みが、私たちの生活をより豊かにしていることを、まちに住み多くの人にももっと知ってほしいです。」

**児童の親：**

「2つの顔をもつ私たちの浜松」

「町に暮らす人が、森に暮らす人がお互いの素敵なところを理解し、交流し、みんなでもっともっと素敵な浜松市をつくりましょう。」

**街暮らしの代表**

「きれいな水、澄んだ空気、温かみのある木。私たちは、これから、街に住んでいても、森のことを考え、森の恵みを知り、街と森のつながりを伝えていきます。」

**山暮らし代表：**

「天竜の豊かな森は、先輩方が守り続けてくれた財産。私たちは、これからも、この森を守り続けるとともに、多くの人に、この森の木を使ってもらえるよう、情報発信をしていきます。」

**NPO代表：**

「浜松にある街のパワーと森の恵み。私たちは、これから、街と森の通訳者として、浜松が元気であり続けるお手伝いをしていきます。」

市長：

「街と森は足し算ではなく掛け算。みなさん、これからは、街と森が融合した新たな森林都市を作っていきましょう！！」



大会宣言の様子①



大会宣言の様子②



大会宣言の様子③



大会宣言の様子④

3) シンポジウム告知用 チラシ

シンポジウムの告知のため、以下のチラシを作成・配布した。



まち・もりシンポ  
まち × 森林  
無限大



市域の68%を占める森林。浜松市は、都市と森林が融合した新しい森林都市になろうとしています。その一方で、都市部からは「森林や山村のよさが分かっていても近づきにくい」、山村からは「都市部住民へ情報をどう伝えたらいいのだろうか?」といった声も聞かれます。

今後は、より活発でしなやかな循環・交流が大切です。都市と山村の理解を深め、真の「ひとつの浜松」として都市と森林のよさを掛け算にする、新たな森林都市像を考えるシンポジウムを開催します。

既刊の書籍  
『風が強く吹いている』著者

作家  
三浦しをんさん



東京都生まれ、早稲田大学第一文学部卒業。2006年『まはる駅前多田便利軒』で第136回直木賞受賞。2009年、新巻鮎子をテーマにした小説『風が強く吹いている』が映画化。同年『舞臺なまなま』を発売。この作品では、舞台の青年が料理に挑戦する姿を通して、その内情や文化、魅力を丁寧に深く掘りくわしている。

テレビ東京系  
『カンパリア宮殿』出演

作家  
速水亨さん



慶応義塾大学法学部政治学科卒業後、三菱商事で営業の経験に次ぎ、速水特産代表。2000年日本で初めて世界的な持続可能な森林経営に対する認証であるFSC認証を取得したフロントランナー。講演・著書など多数。日本林業経営者協会会長も務め、『カンパリア宮殿』にも出演。今度も注目を浴びる森林経営者である。

13:45～ゲスト2名を迎えて  
トークセッション!

プログラム  
構成

参加費  
無料

直接会場へお越しください  
事前参加申し込みの  
必要はありません!

13:00～13:30	「みんなで考える森のチカラ」コーナーの質問・意見エントリー
13:30～13:45	開会のあいさつ
13:45～14:30	「マナビの時間1 賢人から学ぼう!」 *トークセッション 三浦しをんさん×速水亨さん
14:30～14:45	「休憩」・「みんなで考える森のチカラ」コーナーの質問・意見エントリー
14:45～15:30	「マナビの時間2 自分のまちの森林を知ろう! 神奈川の自治体から学ぼう!」 *浜松市の森林・林業について/地域での取り組み/他都市の取組み紹介 など予定
15:30～15:35	「休憩」
15:35～16:20	「みんなで考える森のチカラ」 *来場者がエントリーした自治体質問・意見・質問のある話題についてアドバイザーがお答えします *アドバイザーとして、速水さん・浜松市長・他都市の代表・他有識者 など予定
16:20～16:30	「メッセージ～森林都市をめざして～」
16:30	閉会のあいさつ

開催日時 / 平成22年3月6日(土) 13:30～16:30  
場所 / 天竜王生ホール (浜松市天竜区 最大500人収容)

○アクセス○  
JR浜松駅より遠州鉄道まで徒歩「西側線」駅下車、遠州鉄道バス「二俣・山東行き」で「秋野不処美南駅入口」下車徒歩約10分、または天竜浜名湖道路「天竜二俣」駅下車徒歩7分。



お問い合わせ ▶ 浜松市農林水産部 森林課 〒430-8652 浜松市中区元城町103-2 TEL 053-457-2159  
<主催> 浜松市

4) メディア掲載記事

本シンポジウムの様子は新聞、テレビ等で取り上げられた。以下が主な新聞記事である。

中日新聞・浜松遠州版（平成 22 年 3 月 7 日朝刊）

**森林の未来像 都市部も意識を**

新し森林都市像を考えるシンポジウム「都市×森林」が6日、浜松市天竜区二層の天竜生ホールで開かれた。林業や環境、癒やしなど、森林が持つ力をめぐり、有識者が意見を交わした。参加した約500人も森林の未来を考えた。都市部と山村部の融合を目指すことを確認した。

林野委託の研究事業の一環として浜松市が主催した。トークセッションに

天竜区でシンポ

500人が参加 有識者意見交わす

出演したのは、郵政の担当者から林業に従事する小説を書いた直木謙作家の三浦しをんさん。日本七初めトスC認定を取った林業家の津本亨さん。三重県紀北町、輸入材が多い現状について三浦さんは「直接口にしなから、消費者が安全を願うあまり気にしない」と投げかけた。津本さんは林業の魅力や「愛情を持って管理すると山の顔が変わり、芸術家と同じ気持ちになれる」と話した。

森の力を得るを求めている。有識者の意見も公表された。都市と山村の居住地で比べる。温暖化防止や水質浄化という回答はいずれも多いが、木材とする回答は都市部が山村部を回った。

津本さんは「森を管理して地域全体を守る発想が欠かせない。都市部の人にも機会のあることに山へ入り、木製品を使う時は産地を気にかけてほしい」と話した。（後藤隆行）

静岡新聞（平成 22 年 3 月 7 日朝刊）

**新しい森林都市像探る**

山間地の住民と都市部の住民が一緒になって、新しい森林都市像を探るシンポジウム「都市×森林」が6日、同市天竜区の大竜生ホールで開かれた。市民約500人が参加し、パネルディスカッションやトークセッションなどを通じて森林や林業の未来について考えた。

天竜区で 林業活性化策も

シンポ

市民500人が参加

パネルディスカッションは、鈴木康友市長や藤田光一郎東大講師、園内で最初にトスC森林認証を取得した林業家津本亨さん、三重県が務めた。

「林業を活性化するために都市住民ができることは？」という来場者の質問に対し、パネルディスカッションでは「自分の使う木がどこから来たか、切られた木なのか興味を持ち、質問すること。『責任を持って森林を消費したい』と表明し続けること」など

「ステジに上がり、森の力を知らずにはいられない市民」浜松市天竜区の大竜生ホール

とアドバイスした。鈴木市長は「浜松にとって森林は宝物。補助金が無くても、天竜材が使われるようになる日が必ず来ると思う」と力説した。

トークセッションでは、直木謙作家三浦しをんさんが森林セラピーや森林教育などをテーマに語った。地元の小中学生が森林をテーマにしたミュージカルを披露し、「都市と森林、お互いのすてきなところを理解し、もっとすてきな浜松をつくらう」と呼びかけた。

5) 講演発表資料

(1) 「マナビの時間2」浜松市説明資料

まち・もりシンポ (H22.03.06) The Forest & Forestry Vision of Hamamatsu City

マナビの時間2「自分のまちの森林を知ろう！」

## 浜松市の森林・林業

浜松市 農林水産部長 村田和彦

まち・もりシンポ (H22.03.06) The Forest & Forestry Vision of Hamamatsu City

### 〇 本日も話しすること

- (1) 浜松市の森林・林業の今
- (2) 浜松市森林・林業ビジョン
- (3) FSC森林認証の取得
- (4) 広域ブロック自立施策等推進調査

まち・もりシンポ (H22.03.06) The Forest & Forestry Vision of Hamamatsu City

### 〇 広大な森林を持つ「浜松市」

全域面積 1,511km<sup>2</sup>  
 うち森林面積 1,028km<sup>2</sup>  
 森林率 68%  
 人工林率(民有林) 76%

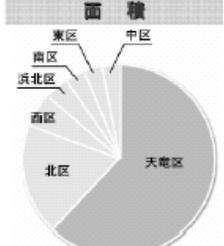
“天竜美林”として知られる！日本三天人工美林の1つ



まち・もりシンポ (H22.03.06) The Forest & Forestry Vision of Hamamatsu City

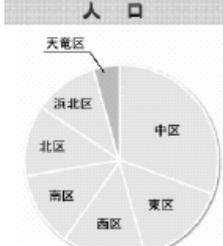
### 〇 面積・人口分布

**面積**



天竜区: 944.00 km<sup>2</sup> (62.5%)  
 全 体: 1511.17 km<sup>2</sup>

**人口**



天竜区: 34,448人 (4.3%)  
 全 体: 809,567人

まち・もりシンポ (H22.03.06) The Forest & Forestry Vision of Hamamatsu City

### 〇 森林・林業が危ない！

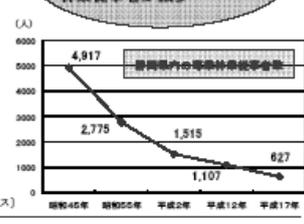
充実のおそれのある森林 (下草が一部しかない森林) 33%

健全な森林 (下草のある森林) 44%

荒廃した森林 (下草が消滅した森林) 23%

(H14～15県調査結果)

さらに...  
 今まで、森林を守ってきた  
 林業従事者が減少

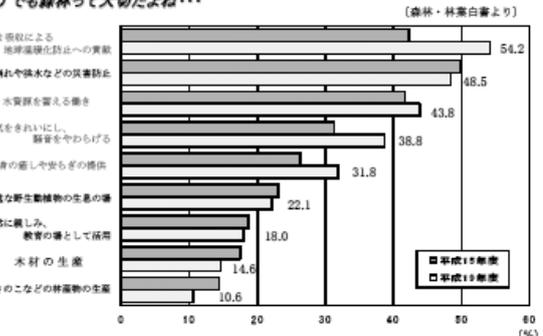


年次	数 (人)
平成15年	4,917
平成16年	2,775
平成17年	1,515
平成18年	1,107
平成19年	627

まち・もりシンポ (H22.03.06) The Forest & Forestry Vision of Hamamatsu City

### 〇 でも森林って大切だよな...

[森林・林業白書より]



理由	割合 (%)
CO2吸収による地球温暖化防止への貢献	54.2
山崩れや洪水などの災害防止	48.5
水資源を蓄える働き	43.8
空気をきれいにし、騒音をやわらげる	38.8
心身の癒しや安らぎの提供	31.8
貴重な野生動物植物の生息の場	22.1
自然に親しみ、教育の場として活用	18.0
木材の生産	14.6
きのこなどの林産物の生産	10.6

■平成15年度 ■平成19年度

〇 浜松市森林・林業ビジョン(平成19年3月作成)

■ 背景

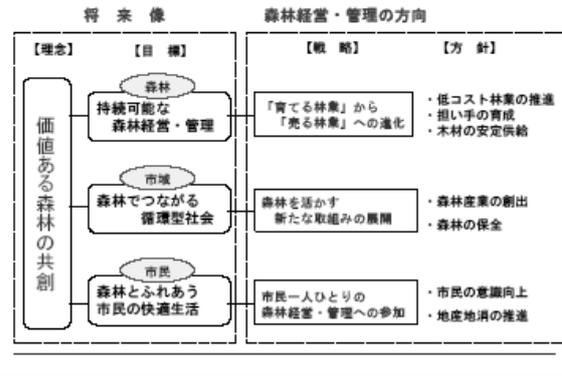
平成17年7月に合併、広大な森林資源を手に入れた「新浜松市」が、市として「森林」をどう位置づけ、今後、どうしていくのかを考える必要が生じた。

■ 目的

30年後の浜松市の森林像を考え、そこに引き続きまでの戦略や方針を示す。

■ 目指す将来像

森林の多面的な価値を市民総出で高め、その「価値ある森林」を次世代に継承する。



〇 浜松市でFSC森林認証を取得

森林認証制度とは…?

- 「森林が適切に管理されているか」を、第三者機関が基準に沿って審査・認証するもの
- それらの森林から生産された木材・木材製品へ認証ラベルを貼ることに、消費者の選択的な購買を通じて持続可能な森林経営を支援する制度
- 日本で取得されている森林認証は主に2つ
  - ① FSC (森林管理協議会) / 世界的規模の制度
  - ② SGE (緑の管理認証会) / 日本独自の制度

※ 浜松市は、FSC森林認証を選択しました。

【浜松市の取得概要】

(内 容) 市内6森林組合・県・市が連携して、森林を対象とするFSC森林認証(FM認証)を取得

(取得面積) 約18,000ha

(取得日) 平成22年3月3日



(今後の予定) 来年度以降も徐々に取得面積を増やしていき、平成28年には54,000haの取得を目指す。

〇 広域ブロック自立施策等推進調査

～ 雇用力・生産力・地域力・教育力の一体的連携強化による山村活性化に関する調査 ～

■ 背景・目的

全国的な課題である「山村の活性化」について、浜松市が国(林野庁)に対し調査を依頼、国の予算を活用させていただき、林野庁・国土交通省・文部科学省・総務省の協力を得て調査を進めている。浜松市は、調査のモデル地区として主体的に調査に関わっている。

■ 成果の活かし方

浜松市は、この調査から森林・林業ビジョンを具体化させる方策などを開る。

■ シンポジウム

本調査の一環として、「都市と山村の交流」「多くの市民に森林・林業を理解してもらう場をつくる」ため、今回のシンポジウムを開催した。

【中間報告】

コンセプト 森林都市・浜松 ～マチからつくる新たな林業～

	これまで	これから
生産力	育てる 林業 → 売る 林業	マチのニーズに合った “売れる”林業
雇用力	閉じた林業	マチの多様な人材に “開かれた”林業
地域力	山に住む林業	マチの自宅から “通える”林業
教育力	働いて初めて 知る森林・林業	マチの子どもも “親しむ”森林・林業



(2)「マナビの時間2」寺谷氏講演資料







(3) 「マナビの時間2」 蔵治氏講演資料

**マナビの時間2**

**自分のまちの森林を知ろう！  
仲間の自治体から学ぼう！  
他都市の取り組み紹介  
(愛知県豊田市を事例として)**

**蔵治 光一郎**

東京大学 愛知演習林 講師  
浜松市 森林・林業ビジョン評価会議 委員  
豊田市 森づくり委員会 委員

**背景**

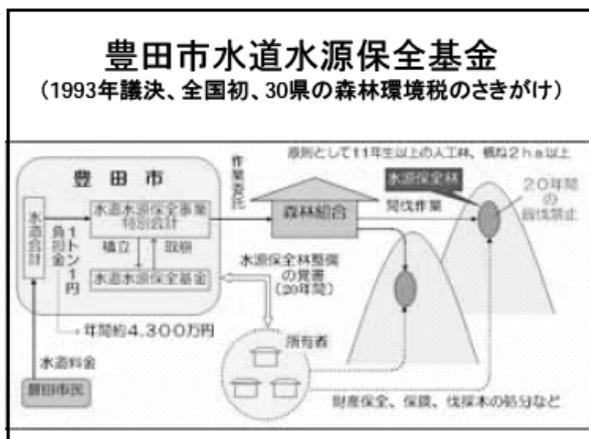
- 市町村合併により、広大な森林を抱える市が全国に出現
  - 産業の観点から、都市と森林(農山村)の共存、共栄、協働
  - 防災、水資源の観点から、都市の安心・安全は上流の森林に依存
- 地方分権改革により権限が市町村に移譲
  - しかし、市職員には専門性がない
  - 森林計画制度(市町村森林整備計画)の形骸化
- 意識の高い市町村で独自に「森づくりビジョン・構想・条例・計画」を策定する事例が出現

**浜松市と愛知県豊田市の比較**

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 浜松市                     <ul style="list-style-type: none"> <li>- 2005年合併、静岡県最大面積の市</li> <li>- 有名林業地</li> <li>- 人口 約82万人</li> <li>- 面積 1,511 km<sup>2</sup></li> <li>- 森林面積 1,029 km<sup>2</sup>(68%)</li> <li>- 私有林面積 782 km<sup>2</sup></li> <li>- 人工林面積 722 km<sup>2</sup>(森林の70%)</li> <li>- スギ・ヒノキ面積(民有林のみ) 545 km<sup>2</sup></li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 豊田市                     <ul style="list-style-type: none"> <li>- 2005年合併、愛知県最大面積の市</li> <li>- 有名林業地ではない</li> <li>- 人口 約42万人</li> <li>- 面積 918 km<sup>2</sup></li> <li>- 森林面積 630 km<sup>2</sup>(69%)</li> <li>- 私有林面積 560 km<sup>2</sup></li> <li>- 人工林面積 350 km<sup>2</sup>(森林の55%)</li> <li>- ヒノキ・スギ面積 305 km<sup>2</sup></li> </ul> </li> </ul>
--	---

**豊田市の森づくりの背景**

- 矢作川=母なる川(上水道原水の7~8割)
  - 1908年 明治用水組合が水源涵養林を取得
- 高度経済成長期、産業のために利用し尽くされ、水質が悪化
  - 1969年 明治用水、流域市町村による「矢水協」設立、超法規的な水質改善運動
- 「流域は一つ、運命共同体」が合言葉
  - 1977年 三全総の「モデル定住圏」に指定
  - 1978年 矢作川水源基金に水源林を明記(全国で豊川、矢作川のみ)



### 東海豪雨の教訓

森林

つながり

まち

安心・安全の都市づくりには  
上流の森林整備が欠かせない  
⇒2005年市町村合併の動機の一つに

### 矢作川森の健康診断

2009年 第5回 (2005年より10年間継続予定)

### 森の健康診断

◎ 2005年調査地点  
● 2006年調査地点  
● 2007年調査地点  
● 2008年調査地点  
● 2009年調査地点

5年間合計  
参加者数 1,270人  
調査地点数 346地点

### 森の健康診断の結果

6~7割が不健康、要間伐

調査回数	適正	過密	超過密
第1回	~40	~40	~20
第2回	~30	~40	~30
第3回	~10	~20	~10
第4回	~20	~30	~20
第5回	~20	~30	~30

調査地点数

- 豊田市長が「森林都市」を公言する2つの背景
- 2000年東海豪雨
- ボランティア・研究者・市民による自発的な健康診断とその結果

### 豊田市の森林の最重要課題

人工林の間伐の促進

↓

持続可能な森づくり  
持続可能な都市づくり

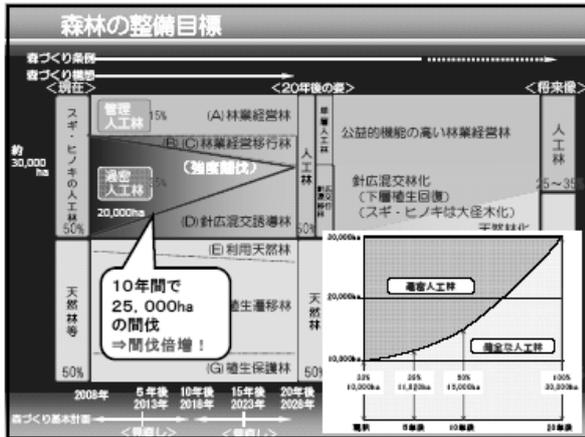
### 森づくり条例及び森づくり構想

豊田市の森づくりの方針

森づくり条例  
基本理念、市・森林所有者等

森づくり構想  
理念を実現するために、100%森づくりの方向性及び20年間の考え方を示したもの

森づくり基本計画  
構想を具体化するために、今施策を、数値目標とともに示し



### 団地化促進プロジェクトの背景

10年間で25,000haの間伐＝間伐倍増ところが、

- ・所有規模が小さい
- ・経営意欲が低い
- ・不在地主が多い
- ・境界がわからない (地籍調査0%)
- ・路網など基盤がない など

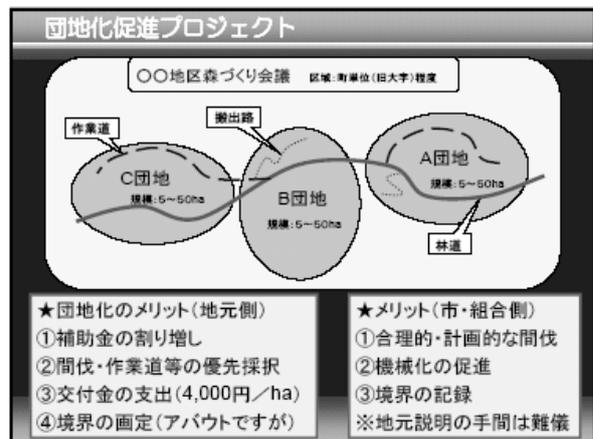
「団地化」「集約化」が不可欠  
⇒独自の団地化戦略を開始

### 団地化推進プロジェクトの特徴

#### 豊田市の「団地化」の特徴

⇒所有者の意欲を引き出す仕掛け

- ① 各地域で「森づくり会議」を設立
  - ・森づくりの“合意形成”の場、推進母体
  - ・概ね旧大字(町)単位
- ② その中で「団地設定」を行う
  - ・1団地＝5～50haの人工林
  - ・同意が得られる所有者で構成
  - ・団地計画を作り、市が認定する
- ③ 市、森林組合のバックアップ・協働



### 団地化のステップ

- ①森づくり会議設立の地元説明
- ②森づくり会議の設立(地元)
- ③団地設定、路網計画の話し合い
- ④境界確認(地元)
- ⑤森林調査(組合)
- ⑥団地計画策定(地元)
- ⑦団地計画の認定(市)
- ⑧間伐、作業道等の整備(組合)



森づくり会議、団地化の成果（22年1月末現在）

森づくり会議：57会議

⇒年度末までには60会議に

森づくり団地：48団地、723ha

⇒年度末までには1,000haに

境界の画定、森林調査も終わっている！

あとは計画的に間伐をやるだけ！

林野庁が進める「集約化」にも適用できる！

団地化戦略の報道 22.1.15



謝辞

- 本発表で用いた資料をご提供いただいた、または勝手に利用させていただいた以下の関係機関に感謝いたします

- 豊田市産業部森林課（原田裕保氏）
- 豊田市矢作川研究所
- 矢作川森の健康診断実行委員会
- 矢作新報社
- 国土交通省豊橋河川事務所

## 参考資料

### 1) 調査検討委員会の議事要旨

#### (1) 第1回専門家検討委員会 議事要旨

日時 : 平成21年12月24日(木) 13:00~15:00

会場 : アクトシティ浜松コンgresセンター23 会議室

#### ○主に雇用力に関連して

- ・ 労働力、雇用について。今、山村活性化に必要なのは、量としての労働力も必要かもしれないが、人材や人財という面での質的なものを考えた、森林の管理・経営を含めた労働力の確保も、教育と絡めて求められるのではないかと。(佐藤委員)
- ・ 労働環境の整備に力点を置いて進めてきたところだが、まだまだ不十分なので、まずは一般企業並みの労働環境を整えることを目標に進めているところである。従来の高齢労働者と若手労働者との入れ替えについては、スピード感を持って進めなければならないと分かってはいても、安定した事業量の確保という面で厳しい部分もある。安定した事業量と労働力のバランスの問題がある。(岡本委員)
- ・ 天竜地域には自動車産業の下請工場も多くあるが、最近これらの工場での雇用調整が進み、再就職口としての森林組合という見方が強くなっている。面接希望者も毎月何人か訪れている状況で、中には外国人労働者もいる。浜松市で行われた緊急雇用対策事業や地域残材搬出奨励事業等も併せて考えたときに、林業だけではないが、水面下における雇用希望者はまだまだかなり存在する。林業界が何か方策を示して雇用希望者を吸い上げることが出来れば、地域力の向上にも繋がってくるのではないかと思う。(岡本委員)

#### ○主に生産力に関連して

- ・ 榛村委員提案の森林土地区画整理事業(P274 参照)について、森林・林業問題の根本はここにあると考えている。山村活性化について提言するのであれば、この問題の解決に繋がるような方向付けが望ましい。今の林野庁の施策も集約化という方向でトップダウン的に進めようとしているが、この調査でその先端に行くことが出来れば素晴らしいと思う。(蔵治委員)
- ・ 天竜の船明地区に盆地がある。水窪筋と春野町筋の扇の要になる場所で、そこに木材コンビナートを集約したら良いと考えている。中部電力のような企業に核になってもらい、バイオマス発電を中核に、間伐材の処理、土場、製材工場、チップ工場等を集約して木質バイオマスタウンを作る。働く場所ができれば山に帰る人は増えると思う。土地区画整理事業によって住宅地として天竜市が8haの土地を購入予定であったが、浜松市との合併により宙に浮いた。半分は浜松市が購入する方向で調整中だが、もっと行政が中に入って住居地域を準工業地域に変える等して、率先して取り組むと良い。市長のマニフェストにもバイオマスタウン構想が入っている。目に見える形である場所にコンビナートが出来ると市民の見方も変わるのではないかと考えている。(村越委員)
- ・ 天竜林材業振興協議会では、この2年間、浜松版の木材生産システム・加工流通の拠点化につい

て、構想を検討し立ち上げようと進行中である。その中で市場調査を実施したので、森林課と調整の上、この調査でも役立てて欲しい。(岡本委員)

- ・ 調査対象に原木を取り扱う静岡県森林組合連合会も加えると、どのように原木が流通しているのか把握できるので良いと思う。昨年度の天竜での市場の取扱高のうち地元での消費は半分で、残りは県内他地域や県外へ流出している。地元での大量消費が可能な施設の構築が急務ではないかと思っている。金原委員の取組がよりスピードアップして進むと良い。(岡本委員)
- ・ 中部電力は船明地区にある 15ha の土地の活用にスポンサーになってもらう話があったが、現在は動いていない。我々が進めている木材センターは、本来は船明地区に設置したかったが、様々な事情により困難であるため別の場所で計画中である。(金原委員)
- ・ 販売先については、遠方と近隣の両方での戦略を進めている。遠方については大手が買いに来ているが、値段的には厳しくなる可能性もある。近隣の消費については、浜松では住宅着工件数から計算すると年間 8 万 m<sup>3</sup> の製材品が必要である。しかし、実際に地域で生産されているのは 2 ~ 2.5 万 m<sup>3</sup> で、残りは地域外から来ている。安定的に地域に販売するという考えが必要である。(金原委員)
- ・ 木材センターでは、人工乾燥で 3~6m の材、集成材で 4~8 m の長尺の材を作ろうとしている。また、積層ブロックやプレカットもどこまで出来るかというところ。また、ロケット工法という金具工法で 5 世代保つ家を国産材で作るための基本設計についても研究をしている。そうした成果について、「こういうものが可能だよ」と市場に提案していかなければならない。また、販売のノウハウについて、CAD やシミュレーション等を活用してどのように作っていくかも課題である。ユーザーが後工程でどういったものが欲しいかを聞いてもらうと良い。(金原委員)
- ・ エコハウスが注目されているが、木材を壁材に用いると断熱効率が良くなる。太陽熱だけで冷暖房がまかなえるのでは、というレベルまで検討している。販売がどうかというところが大切であり、いかに付加価値をつけるかを考えていかなければいけない。(金原委員)
- ・ 素材生産では、いかに高く買ってもらうかということをもまず考える。買ってもらえれば伐採の費用も出せる。最後が安定供給の話になる。(金原委員)
- ・ 観光も含め、山に人が入りお金が入らないと難しいと考えている。建設予定の木材センターでも見せる工場にすることを考えている。産業観光、体験を通じて商品としての魅力を感じてもらうことが必要だ。(金原委員)
- ・ その見せ方についても考える必要があると思う。木の家が、周りが木に囲まれた場所にあるのと、駅前にあるのでは全然違って見える。(蔵治委員)
- ・ 協議会で木造住宅のデザインコンクールを行っている。審査員を務めたが、木のことに精通した設計士が少ない、木を活かすも殺すも設計士次第だと感じた。設計士への啓蒙も取り組もうと考えている。(村越委員)

### ○主に地域力に関連して

- ・ 山村の活性化にあたって定住人口と交流人口を考えた場合、広い意味での「観光」、光るものを見るという意味での山村観光というものを考えてみてはどうか。交流人口を前提に、山村景観等の見せるところを掘り下げることが出来るのではないかと思う。(佐藤委員)
- ・ 調査の内容は森林関係のことが最も強い印象を受けたが、私は、山に人を入れるとき第一に観光

を考える。現在計画中の木材センターも観光ビジネスの感覚で取り組んでいる。観光面の切り口が弱いかなと思った。廃校の活用事例も浜松では20を数えようとしており、もっと工夫の余地がある。また、地域力に関連しては一村一品運動をもう一度やろうとしている。林業はその中の一つになるのではないか。山村活性という切り口はもっとあると思う。(金原委員)

#### ○主に教育力に関連して

- ・ 学校教育の現場との森林・林業の連携についても重要な課題として挙げられると思うので、ここでも含めて欲しいと思う。これは山村地域だけでなく、都市で育った子供が森に入ったこともなく木材に触れたことがないという状況に繋がっている。教育委員会だけではなく、小中学校や保育園を含めた教育現場にいる先生にヒアリングをしてはどうか、ということ。(蔵治委員)

## (2) 第2回専門家検討委員会 議事要旨

日時 : 平成22年2月19日(金) 10:00~12:00

会場 : クリエイト浜松4階「特別会議室」

### ○調査結果の取りまとめに関して

- ・ 佐久間、水窪に住むのは大変なので、家庭を持っている人は浜北や旧天竜市に住む。交通基盤は生活基盤であり、交通基盤の整備が進むと人口増に繋がるはずである。町と山の架け橋となる場所が二俣地区。山と町を繋ぐ取組の一環として、食の拠点となるレストランを二俣地区に明日オープンさせる予定である。今後の浜松は浜北～天竜が中心になるだろう。山と町を繋いで交流を進める。キーワードは食育と地産地消。農業、林業、水産業など、山が町に出ると商品になる。(金原委員)
- ・ 我々のグループで販売している「治一郎バームクーヘン」は、インターネットで販売したところ全国的に注目され、それにより地元での消費も伸びた。全国規模で考える必要がある。(金原委員)
- ・ 全体に関連する力として、「情報力」があるのではないかと感じた。発信する力と受信する力、広域的な情報力と地域的なものといった視点が必要なのではないかと感じた。第二東名高速道路が完成すれば、浜北や引佐が中心となるチャンスが来る。食だけではなく、山や木材加工品の情報も発信すべき。(佐藤委員)
- ・ 県と市がもっと連携すべきである。天竜市は県と連携していたので県の施設は色々存在している。しかし、スーパー林道や県民の森等の施設は、地元の市民には存在を知られていない。(金原委員)
- ・ 調査が非常に多岐に渡っており、あれもこれもやれば良いというような印象を受けた。調査結果や委員会による提言の中で、限られた予算の中でどう選択集中していくかというメッセージが見えてこないで、そこまで踏み込んで欲しい。(蔵治委員)
- ・ 林業や定住はその土地に依存するもので、条件は平等ではない。例えば、上流部について定住インフラの整備をしてまで不利な場所で住む必要があるのか。ビジネスとして成り立たない場合は撤退するという選択肢も含めて議論をしないと現実的ではないように思う。(蔵治委員)
- ・ Iターン等を受け入れるための空き家などのデータを行政が持っていない。基盤となるデータがないことがそもそもの問題である。(井ノ上委員)
- ・ 情報整理にあたっては、本来は流域毎に行うべき。天竜川本流、二俣川、気田川、水窪川、阿多古川、都田川など。(榛村委員)
- ・ 山村活性化については国交省や総務省、環境省等も取り組んでおり、それぞれの自治体が別のところから予算を取っている状況である。縦割り行政の問題を解消し、より有機的に展開することが出来ないか。(榛村委員)
- ・ この調査で行った各種アンケートの結果や委員会での論議を考察すると、その諸課題の解決のためには、森林の所有の問題に切り込まざるを得なくなると考えられる。それ故、「(仮)森林経営革新団地化事業」の制度設計を提案したいと考える。(榛村委員、P274 参照)

## 2) アンケート調査の調査票

### (1) 都市住民向けアンケート調査 調査票

#### 調査名 将来的な木造住宅の建築・購入に関する国産材、 特に「天竜材」の使用に関するアンケート調査

#### 1. 調査対象

首都圏及び中部圏)、静岡県内浜松市以外、浜松市在住で、今後一戸建ての住宅の建築・購入の希望・予定のある世帯主の方(30歳以上60歳未満)

首都圏(東京都、神奈川県):150サンプル  
(30才代:50サンプル、40才代:50サンプル、50才代:50サンプル)  
中部圏(愛知県、岐阜県):150サンプル  
(30才代:50サンプル、40才代:50サンプル、50才代:50サンプル)  
静岡県内(浜松市以外):150サンプル  
(30才代:50サンプル、40才代:50サンプル、50才代:50サンプル)  
浜松市内:150サンプル  
(30才代:50サンプル、40才代:50サンプル、50才代:50サンプル)

#### 2. 質問内容

以下の質問は、選択式(複数回答可)の状況として、お答えください。

#### F. 基本属性

A. あなたの現在の住まいはどちらですか。(チェックは1つだけ)

1. 東京都 2. 神奈川県 3. 愛知県 4. 岐阜県  
5. 静岡県(浜松市以外) 6. 浜松市内

B. あなたの年齢に該当するものを選んでください。(チェックは1つだけ)

1. 30才未満 2. 30才以上40才未満 3. 40才以上50才未満 4. 50才以上60才未満

C. あなたの職業に該当するものを選んでください(チェックは1つだけ)

1. 農林漁業の自営・家族従事者 2. 専門職サービス業の自営・家族従事者  
3. 自由業(医師、弁護士、著述者等の個人事業者等)  
4. 10年以上の会社役員・会社経営者 a. 会社員 b. 公務員  
7. 団体役員 8. その他

D. あなたの出身地を記入してください

\_\_\_\_\_都・道・庁・県\_\_\_\_\_市・区・町・村

E. あなたの現在の住まいの状況を教えてください(チェックは1つだけ)

1. 専らの一戸建て 2. 持ち家(賃貸マンション)  
3. 賃貸住宅 4. その他

## I. 住宅を建築・購入する予定と希望する構造・工法等について

以下の質問は、世界全体としての回答の意見を求めています。あなた自身だけでなく、できるだけ多くの意見を取り入れて、お答えください。

▼ 1. 今後、一戸建て住宅を建築・購入しようとしている時期を教えてください（チェックは1つだけ）

1. 1年以内
2. 3年以内
3. 5年以内
4. 10年以内
5. 建築・購入時期は未定

▼ 2. 希望する一戸建て住宅の面積はどれくらいですか（チェックは1つだけ）

- |                       |                        |
|-----------------------|------------------------|
| 1. 60㎡（約18坪）未満        | 9. 60㎡以上80㎡（約24坪）未満    |
| 2. 80㎡以上100㎡（約30坪）未満  | 10. 100㎡以上120㎡（約30坪）未満 |
| 3. 120㎡以上150㎡（約36坪）未満 | 11. 120㎡以上150㎡（約36坪）未満 |
| 4. 150㎡以上180㎡（約45坪）以上 |                        |

▼ 3. 一戸建て住宅の構造として、採用したいものはどれですか（チェックは1つだけ）

1. 木造
2. 鉄筋コンクリート造
3. 鉄骨造
4. その他

▼ 4. 問3の構造を希望する理由を教えてください（チェックはいくつでも）

1. 国土の寸法等の敷地面が優れている
2. 外観がデザイン性が高い
3. 間取りや内部がデザイン等の自由度が高い
4. 比較的低いコストでの設置が可能である
5. 耐久性等に優れている
6. 工期が比較的短い
7. 部材や質のばらつきが少ない
8. 開放感や視界が容易である
9. 国土慣れしている、親しみが持てる
10. 価格が比較的安価である
11. 日本の気候風土に合致し居住性が高い
12. 周辺の景観・町並みと調和しやすい
13. 地球温暖化防止のため、省資源・省エネルギーに寄与できる
14. 家族や子どもの健康に良い
15. その他、工法を越えて建築法が採用できる
16. 特に理由はない
17. その他：具体的に書き添ってください

## II. 木材・国産材へのこだわりについて

※5. 一戸建てを建築する場合、住宅のどんなところに木を多く使いたいと考えていますか（チェックはいくつでも）

1. あらゆるところにできるだけの材を使用したい
2. 天井・柱等材として使用したい
3. 床材、大妻柱など、目立つところを使用したい
4. 内装に使用したい
5. 壁材（内装）に使用したい
6. 壁材（外装）に使用したい
7. 大材に使用したい
8. 何にも使用したいと考えていない

※6. 使用する材木の生産国について、こだわりはありますか（チェックはいくつでも）

1. 木質が安心できるから、国産材を使用したい
2. 木質を愛用するから、輸入材を使用しない
3. 木質が好みで、国産材あるいは輸入材がこだわりたい
4. こだわりはない

注）1と答えた方は、問6付問1、2、3に回答ください。

2、3と答えた方は、問6付問4に回答下さい。

4と答えた方は、問7に回答してください。

※6で「1. 木質を使用するから、国産材を使用したい」と回答した方にお聞きします。

問6付問1. 国産材を使用したいと考える理由を教えてください（チェックはいくつでも）

1. 国産材の質がよいから、質が信頼できるから
2. 国産材の価格が安いから
3. 国産材の雰囲気や香り等が好きなから
4. 国産材を利用することで地産地消や資源・エネルギー問題の解決に貢献できるから
5. 国産材を取り扱っている方が信頼できるから
6. 輸入材よりも国産材が木材だから、信用できるから
7. その他：具体的に詳しく教えてください

※6で「1. 木質を使用するから、国産材を使用したい」と回答した方にお聞きします。

問6付問2. 使用する国産材の産地にこだわりはありますか？（チェックはいくつでも）

1. 地元や近場で生産された材を使用したい
2. 地元や近場ではないが、この木種に使用したい国産材の産地がある（この木種の産地の名称）
3. 国産材の産地にこだわりはないが、具体的な産地は決まっていない
4. 国産材であれば産地はどの産地でもいいと考えている
5. こだわりはない

※6で「1. 木材を使用するなら、国産材を使用したい」と回答した方にお聞きします。

問6々問3. 国産材の産地を選ぶ場合、どのような条件を重視して、産地を選びますか（チェックはいくつでも）

1. 木目の質がよい、質が信頼できる、質が保証されていること
2. 木材の価格の適正である、または安いこと
3. 近くに産地の木材を扱う業者がある、購入窓口があること
4. 産地に近い産地であること
5. 産地が自分の産地であること
6. 木材及び産地産地のイメージがよい、ブランド価値があること
7. 木材産地をよく知っている、熟練のことからなること
8. 木材の山木の林業関係者をよく知っている、評判が良いこと
9. 産地の木材を使用するお付き合いがある（木材産地への立寄、産林体験ツアー等）こと
10. その他：具体的に書きたい

※6で「2. 木材を使用するなら、輸入材を使用したい」あるいは「3. 木材であれば、国産材あるいは輸入材にこだわらない」と回答した方にお聞きします。

問6々問4. 国産材の使用にこだわらない理由を教えてください（チェックはいくつでも）

1. 国産材は質が安いから、質が信頼できない
2. 国産材は価格が高い
3. 輸入材の技術水準や品質が好まぬ
4. こだわりたい輸入国がある
5. 国産材を利用することで地球温暖化の資源・エネルギー問題の解決に貢献できるからではないが、地球温暖化問題等に貢献できない
6. 国産材を扱う業者が信頼できないから
7. 国産材であっても木材が産地以外からない、信用できない
8. 国産材から別のものにすればよいと思う
9. その他：具体的に書きたい

Ⅲ. 「天竜村」について

※7. 運業村として「天竜村」という名前を聞いたことがありますか（チェックは1つだけ）

1. よく知っている
2. 聞いたことがあり、ある程度知っている
3. 聞いたことはあるが、よく知らない
4. 聞いたことがない

※8. 「天竜村」に対してお持ちのイメージについて、該当するものを異尺してください（A～Eの各項目について、各々チェックは1つだけ）

	1. よく 知っている	2. 多少 のことは 知っている が、よく 知らない	3. 多少 のことは 知っている が、よく 知らない	4. 多少 のことは 知っている が、よく 知らない	5. 全く 知らない	6. その他 （注）
A. 質がよか・質が値段でわかる	1	2	3	4	5	6
B. 価格が安い	1	2	3	4	5	6
C. 木造の雰囲気や香りがよい	1	2	3	4	5	6
D. 地元民者が信頼できる	1	2	3	4	5	6
E. 親しみがある	1	2	3	4	5	6

※9. 「天竜村」の産地である合併した浜松市北部の山手部（旧水窪町・旧喜多町・旧佐久間町・旧兼山村・旧大塚市）をご存知ですか（チェックは1つだけ）

1. よく知っている
2. 聞いたことがあり、ある程度知っている
3. 聞いたことはあるが、どこにあるのかわからない
4. 聞いたことがない

※10. 「天竜村」の産地である浜松市北部の山手部に居住、あるいは訪れた経験はありますか？（チェックは1つだけ）

1. 現在でも住んでいる
2. かつての居住地がある（居住年数 年間）
3. 定期的に訪れている（1年間の来訪回数 回）
4. 定期的ではないが、何度か訪れたことがある
5. これまで1回訪れたことがある
6. まったく訪れたことがない

▼ 11. かつて「大草刈」の産地は人工林の日本三大産地と言われていたことをご存知ですか（チェックは1つだけ）

1. よく知っている
2. 聞いたことはある
3. 知らない

▼ 12. 「大草刈」はスギ、ヒノキともに産地として非常に算がきいと言われていますが、今後の住宅の建築・購入において、「天竜材」を使用した住宅を建築・購入したいと思われませんか（チェックは1つだけ）

1. 「大草刈」を使った住宅を建築・購入したい
2. 「天竜材」を使った住宅に集約があり、検討したい
3. 「天竜材」を使った住宅に興味はない
4. わからない

▼ 13. 今後の住宅の建築・購入において、「天竜材」を床材、壁材、天井材装束、一部でも取り入れたいと思われますか（チェックは1つだけ）

1. 「天竜材」を床や壁、天井等の一部でも使いたい
2. 「天竜材」を床や壁、天井等の一部でも使いたいと思いが強い、検討したい
3. 「天竜材」を床や壁、天井等の一部でも使うことに興味はない
4. わからない

▼ 14. 「天竜材」の使用を検討するにあたって、「天竜材」の産地に対して希望はありますか A～Eの各項目について、各々チェックは1つだけ）

	1. 検討を したい	2. 検討を したい	3. どちら もよく ない、関心 がない	4. 検討 しない
A. 産地の「天竜材」に関する情報を提供してくれる制度をつくってほしい	1	2	3	4
B. 「大草刈」を使った住宅の建築を奨励してほしい	1	2	3	4
C. 「大草刈」のある木材や木業、木材加工の場を奨励してほしい	1	2	3	4
D. 産地の産地は、自分で産地をしたら、産地に設備を充実させて、将来も産地を自分の家や仕事で使えるような仕組みを作ってください	1	2	3	4
E. 天竜川流域、森林や木業、あるいは山村の暮らし等を体験・学習できるイベントやツアー等を催してほしい	1	2	3	4

※

(2) 求職者向けアンケート調査 調査票

**市内求職者（日本人）用 調査票**

**□ 林業への就業に関するご意見をお聞かせください □**

細江・浜松用

浜松市は、平成 17 年の合併により、都市部と広大な森林を含む地域が一緒になり（市内の 68% が森林）、新しい都市として出発しました。

特に天竜川本流とその支流、都田川及び太田川流域で営まれる林業は、「天竜林業」と呼ばれる先進林地ですが、近年、高齢化に伴う就業者の減少は大きな問題となっています。

そこで、就業者の増加や地域の活性化をめざして、浜松市も森林課の創設、「浜松市森林林業ビジョン」の策定など、対策を進めておりますが、実際の求職者の方の声を、今後の林業と山村の活性化の参考にさせていただくため、アンケートをお願いするものです。

忌憚のないご意見をお聞かせ下さい。よろしく御願いたします。



**1. 林業についてお聞きいたします（該当するものに○をつけてください）**

<林業：伐採- 枝打ち - 植林 - 製材、山からの搬出 等>

**1-1 林業についてのイメージ**

- 1) とても良い    2) まあまあ良い    3) 普通    4) あまり良くない    5) 良くない

**1-2 林業という職業への関心**

- 1) とても関心が高い    2) まあまあ関心がある    3) 普通  
4) あまり高くない    5) 関心はない

**2. 山村についてお聞きいたします（該当するものに○をつけてください）**

**2-1 「山村」についてのイメージ**

- 1) とても良い    2) まあまあ良い    3) 普通    4) あまり良くない    5) 良くない

**2-2 山村で暮らしてみたいと思いますか**

- 1) とても思う    2) まあまあ思う    3) どちらでもない  
4) あまり思わない    5) 全く思わない

**2-3 そう思う理由は何ですか？（簡単にご記入下さい）**

（関心がある・思う場合設問 5 へ、関心がない・思わない場合は設問 3 へ）

3. あなたご自身についてお聞きたいします（該当するものに○をつけてください）

3-1 年齢

- 1) 10代 2) 20代 3) 30代 4) 40代 5) 50代 6) 60代 7) 70代以上

3-2 性別

- 1) 男性 2) 女性

3-3 お住まい

- 1) 中区 2) 西区 3) 南区 4) 東区 5) 北区 6) 浜北区 7) 天竜区 8) 浜松市外

3-4 家族構成

- 1) 単身 2) 夫婦のみ 3) 夫婦と子供のみ（子供 人） 4) 親世帯と同居（二世帯同居）  
5) 三世帯同居以上

4. あなたの雇用経歴についてお聞きたいします（該当するものに○をつけてください）

4-1 前職の業種

- 1) 農林業 2) 林業 3) 漁業 4) 鉱業 5) 建設業 6) 製造業 7) 電気・ガス・熱供給・水道業  
8) 情報通信業 9) 運輸業 10) 卸売・小売業 11) 金融・保険業 12) 不動産業  
13) 飲食店・宿泊業 14) 医療・福祉 15) 教育・学習支援業 16) 総合サービス業  
17) サービス業 18) 公務（他に分類されないもの） 19) その他の産業

4-2 業務内容

- 1) 正社員（事務職） 2) 正社員（専門職） 3) 役員・管理職 4) 経営者 5) 派遣社員  
6) 契約社員 7) 自営業 8) 公務員 9) パート・アルバイト 10) その他（ ）

4-3 前職を離職した理由（差しつかえ無ければお聞かせ下さい）

- 1) 自己都合 2) 会社都合  
3) その他（ ）

ご協力ありがとうございました。

林業及び山村での生活に関心があるとお答えになった方にお聞きいたします。

5. 林業への就業意向についてお聞きいたします（該当するものに○をつけてください）

5-1 就業機会があれば林業に就業したいと思いますか？

- 1) ぜひ就業したい 2) 条件があれば就業しても良い  
3) 条件が良くても就業したくない 4) どちらともいえない

5-2 どのような職種に就業したいと思いますか？

- 1) 天竜地域の森林組合（植樹、育林、間伐等）  
2) 森林生産事業者（切り出し、殺出等原木の生産）  
3) 製材業  
4) その他（ ）

5-3 林業に就職する場合に求める条件について（主なもの3つに○をつけてください）

- 1) 勤務地 2) 給与・賞金 3) 休日・休暇 4) 勤務時間 5) 正規雇用 6) 教育・研修の実施  
7) その他（ ）

5-4 条件に具体的な希望があったらご記入ください

- 1) 勤務地（ ）  
2) 給与・賞金（ ）  
3) 休日・休暇（ ）  
4) 勤務時間（ ）  
5) 正規雇用の有無等（ ）  
6) 教育・研修の内容（ ）  
7) その他（ ）

6. 林業に従事する地域についてお聞きいたします（該当するものに○をつけてください）

6-1 大竜区に行ったことがありますか？

- 1) 何度もある 2) 一度はある 3) 行ったことはない 4) わからない

6-2 行ったことのある方にお訊ねします。訪ねた理由は何ですか？

- 1) 観光・レジャー 2) 仕事 3) 帰省・友人・知人の訪問 4) 森林業体験・学習活動  
5) その他（ ）

6-3 林業に就業する場合の居住地はどのような条件の地域が望ましいですか？

- 1) 自然が豊かな場所 2) 住居が提供される場所（家賃が安い）  
3) 浜松市街地へのアクセスの便が良い 4) 医療機関が近い  
5) 学校が近い 6) コミュニティがしっかりしている  
7) その他（ ）

（最後に設問3と4にお答えください）

ご協力ありがとうございました。

□林業への就業に関するご意見をお聞かせください□

浜松市は、平成 17 年の合併により、都市部と広大な森林を含む地域が一緒になり(市内の68%が森林)、新しい都市として出発しました。

特に天竜川本流とその支流、都田川及び太田川流域で営まれる林業は、「天竜林業」と呼ばれる先進林業地ですが、近年、高齢化に伴う就業者の減少は大きな問題となっています。

そこで、就業者の増加や地域の活性化をめざして、浜松市も森林課の創設、「浜松市森林林業ビジョン」の策定など、対策を進めておりますが、実際の求職者の方の声を、今後の林業と山村の活性化の参考にさせていただくため、アンケートをお願いするものです。

忌憚のないご意見をお聞かせ下さい。よろしく御願いたします。

天竜区用



1. 林業についてお聞きいたします (該当するものに○をつけてください)

<林業：伐採 - 枝打ち - 植林 - 製材、山からの搬出 等>

1-1 林業についてのイメージ

- 1) ととても良い    2) まあまあ良い    3) 普通    4) あまり良くない    5) 良くない

1-2 林業という職業への関心

- 1) ととても関心が高い    2) まあまあ関心がある    3) 普通  
4) あまり高くない    5) 関心はない

2. 山村についてお聞きいたします (該当するものに○をつけてください)

2-1 「山村」についてのイメージ

- 1) ととても良い    2) まあまあ良い    3) 普通    4) あまり良くない    5) 良くない

2-2 山村で暮らしてみたいと思いますか

- 1) ととても思う    2) まあまあ思う    3) どちらでもない  
4) あまり思わない    5) 全く思わない

2-3 そう思う理由は何ですか? (簡単にご記入下さい)

(関心がある・思う場合設問 5 へ、関心がない・思わない場合は設問 3 へ)

林業及び山村での生活に関心があるとお答えになった方にお聞きいたします。

5. 林業への就業意向についてお聞きいたします（該当するものに○をつけてください）

5-1 就業機会があれば林業に就業したいと思いますか？

- 1) ぜひ就業したい 2) 条件があれば就業しても良い  
3) 条件が良くても就業したくない 4) どちらともいえない

5-2 どのような職種に就業したいと思いますか？

- 1) 大庄地域の森林組合（植樹、育林、間伐等）  
2) 素材生産事業者（切り出し、搬出等原木の生産）  
3) 製材業  
4) その他（ ）

5-3 林業に就職する場合に求める条件について（主なもの3つに○をつけてください）

- 1) 勤務地 2) 給与・賞金 3) 休日・休暇 4) 勤務時間 5) 正規雇用 6) 教育・研修の実施  
7) その他（ ）

5-4 条件に具体的な希望があったらご記入ください

- 1) 勤務地（ ）  
2) 給与・賞金（ ）  
3) 休日・休暇（ ）  
4) 勤務時間（ ）  
5) 正規雇用の有無等（ ）  
6) 教育・研修の内容（ ）  
7) その他（ ）

6. 林業に従事する地域についてお聞きいたします（該当するものに○をつけてください）

林業に就業する場合の居住地はどのような条件の地域が望ましいですか？

- 1) 自然が豊かな場所 2) 住居が提供される場所（家賃が安い）  
3) 浜松市街地へのアクセスの便が良い 4) 医療機関が近い  
5) 学校が近い 6) コミュニティがしっかりしている  
7) その他（ ）

（最後に設問3と4にお答えください）

ご協力ありがとうございました。

### 3) 専門家検討委員会委員長 提案資料

静岡県森林組合連合会  
会長 榛村 純一

#### (仮)森林経営革新団地化事業の制度設計

～効率的かつ持続可能な森林経営の促進に森林土地整理事業を～

日本の森林・林業の低生産性と木材供給の不安定性と山村の後進性は、第二次世界大戦敗戦後の農地改革的な林地改革が行われず、零細林家、零細林地、所有森林の散在のまま、森林組合が十分に機能しなかったことによると言える。

そこで、本調査「雇用力・生産力・地域力・教育力の一体的連携強化による山村活性化に関する調査」で得られた諸課題と施策案を根本的に解決する実施手法の方向性として下記の制度設計の提案をする。

#### <目的>

土地の所有・経営や利用計画は、農地・農村では土地改良事業（圃場整備事業）により行われ、都市・市街地では区画整理事業（再開発事業等）により整理・整頓され、面的整備がなされてきた。しかし森林・山村においては戦後の農地解放的改革もなく、旺盛な木材需要に支えられ、270万林家の零細所有、分散所有はそのまま推移し、薪炭の石油化の中で、広葉樹を杉桧松に林種転換するという大植林運動となり、1,000万haの人工林が実現した。

その後は外材攻勢と鉄、コンクリート、アルミなど、木材代替品の進出で、材価低落の林業衰退と過疎高齢化が進行し、森林施業放棄、境界不明化、集落消失など山村の成立基盤を崩壊させていった。このため林政は不活化し地籍調査も進まず、低コスト林業実現のための施業集約団地化事業も森林所有問題のネックが多く、必ずしも巧く進行していない。

そこで下記各項の手法をシステムとして導入し、下流都市や大企業が森林を所有・経営しやすくし、持続可能な森林経営を行う所有者と公益的機能受益者の責務を定める制度設計を行う。

#### <内容>

- ① 100ha～200ha以上の小流域を一元管理する施業受委託団地（(仮)森林経営革新団地）を設定する。そして、測量、境界確認、交換分合・減歩、買い取り、証券化等により、作業道・林道など路網整備をすすめ、あわせて治山施設・山土場・森林浴施設・駐車場・キャンプ場設置等をすすめることとし、国はこの立ち上げのため、森林の公有的経営の代金として補助金・補償金（交付金）を支出する
- ② 山村では森林の境界不明、所有者の林地ばなれ、不在村化等により、所有意識と森林内容の劣化が深刻化している。この積極的な打開策は①の森林経営革新団地の設定とその箇所数やシェア拡大が鍵であり、仮に100ha×1万カ所=100万ha（または、200ha×5000カ所=100万ha）をカバーすれば、森林山村の雇用力、生産力、地域力、教育力を一挙に高め、森林林業山村は成長戦略にふさわしく活性化させることができる

- ③ 森林経営投資の財源不足や打ち切りの心配、および人手不足には、都市側・下流側・工業側の森林所有・経営投資・CSR 森林整備の参画を促進することが大切である。それには森林土地の都市有林化、会社有林化を図る売買斡旋体制を構築し、買取・換地・合筆等で一筆面積と施業集約団地面積を拡大し、所有形態と経営規模を大型化し、森林土地の商品化をすすめることである。日本の森林経営力を高め、日本を大木列島にするためには、国県のほかに下流都市有林や大企業社有林や学校林をふやす必要がある。
- ④ 森林計画と施業計画を①②の施策で一致させた森林計画地を設定し、森林・山村に適した簡素な地籍調査手法の開発と導入を図りつつ、国土調査と森林計画・施業計画をリンクさせ、森林施業や再生林の義務化と広葉樹林化を図る。

### <効果>

- ① 現在、林野庁がすすめている林業再生プランの施業集約団地化と路網整備と高性能機械導入の3点セット施策を徹底するために、①の各手法を合併施工すれば、林業の生産性向上、森林経営の雇用力・生産力・地域力アップが効率的に図られる
- ② 森林経営革新団地事業という面的整備の中に、環境教育・自然観察・森林療法・特用林産等の施設を設置したり、廃校等を駐車場に整備し、都市人の森林浴・エコツアーアクセスを整備し、山村の教育力、自然環境教育力を高める。これにより森林の持続的投資力のある開かれた森林山村生涯学習社会が構築される
- ③ 資源循環林、人との共生林、水土保持林の三種類別や気候別、傾斜度別の施業技術体系団地を設定し、森林組合等が長期受託する。これにより森林組合は安心して職員や作業班を計画的に養成する責任を担う経営力を持ちえて、雇用力、生産力、地域力、教育力を連携・統合する存在となりうる

---

平成 21 年度 広域ブロック自立施策等推進調査

雇用力・生産力・地域力・教育力の一体的連携強化による山村活性化に関する調査  
調査報告書 <浜松市調査編>

平成 22 年 3 月

農林水産省 林野庁  
静岡県 浜松市

---

調査受託： 株式会社プレック研究所 持続可能環境・社会研究センター  
〒102-0083 東京都千代田区麹町 3-7-6  
Tel : 03-5226-1106 Fax : 03-5226-2698  
<http://www.prec.co.jp/>

---